

「竹下弥平の出自と明治私擬憲法草案への明六社の思想的影響について」

吉田 健一（鹿児島大学学術研究院学内共同教育研究学域准教授）

鶴丸 寛人（鹿児島県鹿児島地域振興局）

The Life of Yahei Takeshita, and the Influence of Meiroku-sha's Ideology on Takeshita's Draft of the Meiji Constitution

YOSHIDA Ken 'ichi (Associate Professor, Kagoshima University, Education and Research Institutes Coalition)

TURUMARU Hiroto (Deputy Section Chief, Kagoshima Prefecture, Kagoshima Regional Promotion Bureau)

キーワード：竹下弥平、私擬憲法草案、東京遊学、明六社、啓蒙思想

目次

はじめに 一本稿の目的（吉田）

第1章：「竹下弥平」についての研究史とその評価（吉田）

1節：竹下弥平に関する先行研究の紹介

- 1) 『朝日新聞』記事「竹下弥平を知っていますか」
- 2) 出原政雄「鹿児島県における自由民権思想－『鹿児島新聞』と元吉秀三郎－」
- 3) 出原政雄「日本最初の民間憲法草案－国分・隼人地区の竹下弥平－」
- 4) 川喜兼孝「竹下弥平の憲法草案」
- 5) 伊地知南「湾奥きりしまの進歩性」
- 6) 神田嘉延「霧島山麓の襲山郷在中の竹下彌平の憲法草案－東京「朝野新聞」の明治8年3月4日付けの発表－」
- 7) 『南日本新聞』記事「憲法改正 明治8年 鹿児島から草案 竹下弥平なら」
- 8) 神田嘉延「竹下彌平の憲法草案にみる自由民権思想と西郷隆盛」
- 9) 水野公寿「竹下弥平憲法草案をめぐって二、三のこと」
- 10) 久米雅章「竹下弥平憲法草案について－西南戦争従軍者の一人か？－」

2節：竹下弥平に関する先行研究の類型化

- 1) 竹下弥平に戦後民主主義思想の源流をみる論
 - 1－1：自由民権運動にすら批判的な論
 - 1－2：自由民権運動には理解があるが、西南戦争と西郷隆盛に批判的な論
- 2) 自由民権運動に竹下弥平が影響を与えたとする論

3節：啓蒙主義と竹下弥平－明六社の影響－

- 1) 竹下弥平の憲法草案に登場する人物
- 2) 明六社と『明六雑誌』

3) 竹下弥平の憲法草案に名前の挙がった人物とその思想的立場

4) 憲法草案中の人物の竹下弥平への影響

第2章：竹下弥平は何者であるか（鶴丸）

1) 竹下弥平は何者であるか

2) 竹下弥平は何処にいたのか

3) 「竹下弥平」は本名であるか。

4) 「松元氏系図」に残る松元武元の記録

5) 「竹下弥平」の名の由来

6) 明治8年前後の西郷隆盛の動向

7) 松元武元と西郷隆盛に面識はあったか

8) 松元家に残された西郷の揮毫

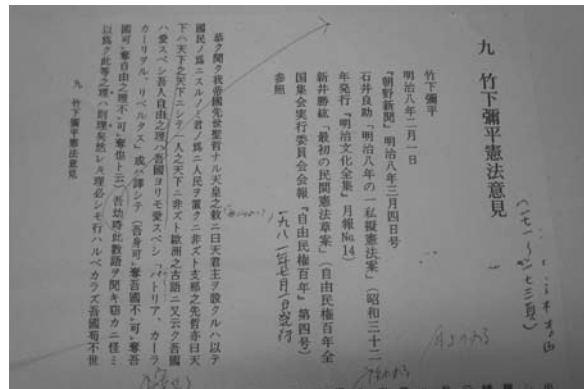
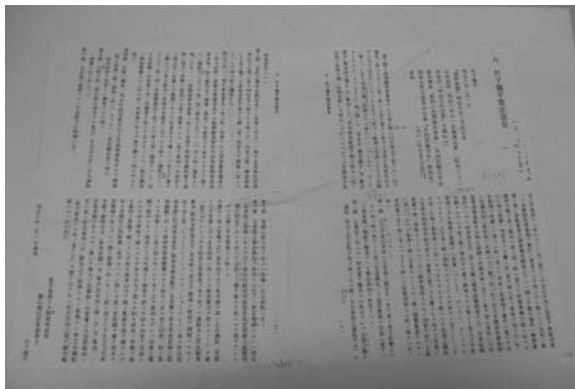
9) 明治7年から8年にかけての松元武元の動静

10) 新聞の社会的役割の変遷

11) 松元武元は幼少から外国文化に触れる機会があった

12) 田辺聖子氏のこと

おわりに（吉田）



竹下弥平憲法草案

竹下弥平憲法草案（全文）

明治8年2月1日 「朝野新聞」明治8年3月4日号

（旧字体の一部は現代語表記）（原文にはない句読点を挿入）

恭ク聞ク。我帝国先世聖哲ナル天皇之敕ニ曰天君主ヲ設クルハ以テ国民ノ為ニスルノミ、君ノ為ニ人民ヲ置くニ非ズト。支那之先哲亦曰、天下ハ天下之天下ニシテ一人之天下ニ非ズト。欧州之古語ニ又云ク吾国ハ愛スベシ吾人自由之理ハ吾国ヨリモ愛スベシ「パトリア、カーラ、カーリヤル、リベルタス」或イハ訳シテ（吾身可奪吾国不可奪吾国可奪自由之理不可奪也）ト云。

吾幼時此数語ヲ聞キ窃カニ怪ミ以為ク。此等之理ハ則理矣理然レドモ理必シモ行ハルベカラズ。吾国苟不世出之英雄起ルニ非ルヨリハ、安ゾ能ク二千五百年來之宿習ヲ勇載浄濯シ

テ、此数語、所謂真理ヲ実行ニ著見スルヲ得ンヤト。既ニシテ戊辰ノ顛覆ニ会シ。逆亂奮習之陋説、義兵錦旗之下ニ一掃シテ盡キ、海内一變、群藩幡然方嚮ヲ更メ縣治ニ帰ス。此ノ時ニ当リテ所謂万機公論ニ決スル云々等之聖誓ハ、即、恐レ多クモ裏ニ所術、天地ニ亘リ万世ヲ究メ不可易真理ニ根據シテ発スル所ノ者ニテ、而直ニ此真理ヲ実行ニ施スヲ見ル。吾輩幼時之疑恠、頓ニ氷釈スルヲ覚フ。此ニ置イテ刮目企踵、此所謂真理、益發達暢進、欧米文明之諸国ト并馳共峙ニ至ラン事ヲ望ム。

者茲ニ七年、豈計ランヤ一昨癸酉五月（井上大蔵大臣大等退職前後ヲ云）以来、政機失調スルアルガ如ク、嘗テ泰山ヨリ重ク鉄城ヨリモ堅シト吾人ガ平素憑信シタル維新之基礎タル聖誓（パトリア、カーラー、カーリヤル、リベルタス）之大旨ハ頗ル湮晦スルモノアルガ如キニ至ラントハ、子又怪ミ以為ク、真理果シテ行ハルベカラザルカト。

既ニシテ、民会議起ル。其得失、利害、尚早、既可詳カニ諸賢之説アリ。又贅スルヲ須タズ。吾謂フ聖誓ヲ將ニ湮晦セントスルノ日ニ、維持挽回スルモノ民会ヲ舍テ又、他ニ求ムベカラズ。真理ヲ將ニ否塞セントスルノ際ニ、開閉暢達スルモノ亦民会ヲ舍テ他ニ求ムベカラズ。而シテ吾最切望スル所ノ条々は左ノ如シ。

第一条 己巳平定以来此ニ七年蓋シ国歩又一步ヲ進メ君子豹変スベキハ此ノ時ヲ然リトス故ニ吾帝国宜シク益其廟謨ヲ広遠ニ運ラシテ我帝国ノ福祉ヲ暢達スベキ憲法典則ヲ欽定スベシ

第二条 右憲法ヲ定ムルハ即聖誓ヲ拡充スル所以ナレバ立法之権ヲ議院（現今之左右院ヲ改メ新ニ立ル所ノ左右両院之議院ヲ云）ニ悉皆委任スベシ

第三条 左院之議員定額百員トシ定員三分の一ハ今各省奏任官四等以下七等に至り判任官八等ヨリ十等マデノ内其主務ニ練達暗熟シテ且才識アル者毎省若干員ヲ人選（省ノ長官之ヲ選挙シ定ムベシ）シテ出ス所之議員トス

他之三分一ハ現今衆庶著名ニ知ル所ノ功勞アル人望家舊参議諸侯ノ如キ在野ノ俊傑及博識卓見ナル福澤福地箕作中村等新聞家成島栗本等ノ如キ諸先生ヲ選挙（最初ハ太政官ヨリ命令シテ之ヲ挙クベシ議院已ニ立ツテ後ハ別ニ選法ヲ立ツベシ）充ル所ノ議員トス

他ノ三分一ハ府県知事令参事ニ命シテ其管下秀俊老練民事ヲ通曉シ地方ノ利弊ヲ諳悉スル者ヲ選挙セシム（是レモ最初ハ太政官ヨリ地方官ニ示暗諭シテ濫選ナキヨウ注意其人ヲ挙シメバ其人ヲ獲ルニ難カラズ其小節目ハ各地方官適宜ニ任ズルモ妨ゲナシ議院已ニ一タビ立ノ後は別ニ詳細選挙法ヲ設クルヲ要ス別ニ論述スベシ）以テ各府県ノ令参事ト共ニ代議員ト為リテ出ルモノトス（他日議員ノ選法整備スルニ至ル迄ハ令参事ヲ併セテ地方技士ニ列セザルヲ得ズ）

第四条 右院ノ議員ハ現在行政官勅任以上及皇族華族中ヨリ選挙（此モ前第三条ノ選例ニ同シ）セラルベシ其定額百員ヲ限ル

第五条 太政大臣（即行政ノ首官タル重任）及左右大臣ハ左右両院ノ選挙ヲ以テ定ムベシ

第六条 左右院ヲ開閉スルハ天皇陛下之特権ニ在リ

第七条 帝国ノ歳入出ヲ定ムル特権ハ左右両院ニ在リ

第八条 凡帝国之憲法典則ヲ欽定スル若クハ更正増減スルハ一切左右両院之特権ニ在ルヲ以テ假令行政官司法官及武官何様之時宜アルトモ決シテ立法上ノ権ヲ毫モ干犯スル

ヲ得ザラシムルハ立国之本旨最重スル所トス

大畧右ニ述ル旨趣ヲ以テ其手段ヲ立テ其方便ヲ為シ左右議院（民選ト云モ官選ト云モ名目如何ニ拘ワラス唯其实功ヲ要スルノミ）ヲ速ニ設立セラレン 今日政府之急務是ヲ舍テ何ゾヤ、蓋欧米之民沈毅果断有余、而忠厚温良不足、其弊ヤ君主ヲ威逼シ政府ヲ倒制スルモノ往々有之彼「ヒューミレイションオフ、ショーウレーン」有ル所以也。

我帝国之民淳撲忠愛有余、而英鋭勇断不足、其弊ヤ躬自卑屈奴隸之習氣腦髓ニ印シテ、精神恍惚復醒覺ナキカ如キニ至ル。彼ノ印度ノ奴ト為リシモ亦職トシテ是之由ル。今ニシテ早ク之ヲ挽回セザレバ、印度ノ覆轍ヲ踏ザルモノ幾希ナリ。夫外国人ト婚娶ヲ許スガ如キ、出版ヲ自由ニスルカ如キ、学校ヲ盛ニスルガ如キ、兵力ヲ張ルカ如キ、拷掠ノ苛酷ヲ除キ審判之傍聴ヲ縦ニスルガ如キ、汽車山川ヲ縮メ電線宇宙ヲ縛スルガ如キ、皆開花之衆肢体ニ非ザルハナシ。然レドモ徒ニ其肢体ヲ獲テ而未タ其精神ヲ具セズンバ、偶人塑像ニ均シキノミ。試ニ見ヨ三千五百万兄弟中、能ク毅然自立（假令吾国ハ可奪共吾自由之理ハ不可奪也）ノ志気見解ヲ存スルモノ果タシテ幾人ゾ。吾輩故ニ曰聖誓之大旨湮晦此ニ至ル。寔ニ怪且痛哭ニ不勝也。之ヲ救済スルノ道他ナシ。唯左右議院（前文条述スル所ノ者ヲ云）ヲ建テ以テ大イニ自主自由之理ヲ拡充暢達スルニ在ル而已。

明治八年二月一日謹述

鹿児島県下大隅国噌嶺郡

襲山郷住居愛国愚夫 竹下弥平

竹下弥平憲法草案（大意）

天皇の詔では「君主は人民のために為政を行うのであり、君主のために人民を利用するのではない」という。

中国の古語では「天下とは天下の天下であり、一人の天下ではない」という。

欧州の古語では「国とは愛すべき存在であるが、「自由の理」は国よりも愛すべきである」という。

これを「パトリア、カーラ、カトリア、リベルタス」、訳すと「たとえ、わが身が奪われようとも、我が国が奪われることはない。たとえ、我が国が奪われようとも、「自由の理」は奪われることはない。」という。

戊辰戦争で錦の御旗の下、旧習を一掃し新しい時代がつくられたが、「万機公論に決する」などとした五箇条の御誓文の精神は達成されていないのではないか。これは自分が幼少時に気づいたことであるが、我が国は五箇条の御誓文の精神を達成するため、「自由の理」を実行するとともに、国民がそれぞれ「自立」した、欧米諸国のような国になることが望まれる。

井上馨大蔵大臣が退職した明治6年5月頃から、政府は維新の理想、五箇条の御誓文の精神を失ったのではないか。このままでは「自由の理」、「自立」を実行することはできない。

では、どうすれば「自由の理」、「自立」を実行できるか。それは議會を開くことである。議會を開くことは時期尚早であるなどの意見もあるが、五箇条の御誓文の精神を達成するためには、議會を開くこと以外に方法はない。

議會を開く場合の条件で私が望むことは、以下の条文による。

第1条 我が帝国は、政策を立案し人民の幸せを伸ばすため、憲法典則を欽定する。

第2条 憲法においては、立法の権利を議院（左右両院）に委任することとする。

第3条 左院は定員100名とし、その3分の1は各省に勤め実務に熟練し且つ才識ある者を省毎に人選して議員とする。

他の3分の1は現在著名で功勞のある人望家や、参議諸侯のような在野の俊傑、博識卓見である福澤、福地、箕作、中村等や新聞家である成島、栗本等の先生方を選び議員とする。

他の3分の1は府県知事や令参事に命じて、地方の事情に精通した者を選び議員とする。

第4条 右院の議員は、行政官で勅任以上の者と皇族華族より選ぶ。定員は100名とする。但し司法官と武官は議員になることはできない。

第5条 太政大臣及び左右大臣は左右両院の議院から選ぶ。

第6条 左右両院を開閉するのは天皇陛下の特権である。

第7条 帝国の歳入歳出を定める特権は左右両院にある。

第8条 帝国の憲法典則を欽定すること、若しくは条文の加除修正は一切左右両院の特権である。行政官、司法官、武官はいかなる理由があろうと立法するにあたり憲法の規範を犯すことはできない。

このような形で、早急に議會を開設する必要がある。このままでは、インドのように欧米列強の植民地となってしまうだろう。インドの轍を踏まないためにも、五箇条の御誓文の精神、「自由の理」、「自立」を実行するためにも、議會を開設することが大切である。

外国人との婚姻、出版の自由の保障、学校を盛んにすること、汽車を走らせること、電線を張り巡らせることなどを行えば文明開花も進むが、これらも精神が伴っていないと、「自由の理」の実行とは言えず、自立もできていない、人形のような人間ができるだけである。我が国3500万人の中に、毅然とした自立の志気を有する者がどれだけいるのか。

私は、五箇条の御誓文の精神、「自由の理」、「自立」を国民に広めていくためには、議會の開設しかないと考えている。

明治8年2月1日謹述

鹿児島県大隅国曾於郡襲山郷住居

愛国愚夫 竹下弥平

【現代語訳：鶴丸寛人】

はじめに 一本稿の目的― (吉田)

本稿の目的は、これまで謎とされて来た、明治に私擬憲法を作成した鹿児島の人物「竹下弥平」の出自と、竹下がどのような生涯を送った人物であったかを広く世に公表することである。竹下弥平による憲法草案は、上に掲げたものである。

明治時代に「大日本帝国憲法」が公布される前に、多くの私擬憲法が存在したことは、世に知られているところである。そして、私擬憲法を発表した人物についても、その多くはどのような人物であったのかは、すでに明らかにされている。竹下弥平のみが、殆どその輪郭を今日まで知られていないままだったといっても良い。

私擬憲法とは衆議院憲法調査会の報告書によれば、「大日本帝国憲法公布以前に、民間団体・個人によって作成された憲法私案の総称」である。この資料によれば、幕末維新から大日本帝国憲法公布に至るまでの20年あまりの時期には、元老院による國憲編纂、自由民権諸団体・個人による憲法草案や国会開設の請願書など、官民双方から多数の国家構想が表明されたという。そして、これらのうち「憲法草案」と呼べるものは、政府側の作成したものも含めれば、平成7年(1995年)現在までに94種類のものが確認されているという。これには草案自体は未発見のものも含まれているとのことである。研究者によればこれら94種類の「憲法草案」は起草時期によって以下のように区分されるという。

衆議院憲法調査会の資料では、区分けと表は新井勝紘「自民民権運動と民権派の憲法構想」『自由民権と明治憲法』(江村栄一編・吉川弘文館・1995年)によったとの記述があり、その本による区分けが以下の分け方である。

- 1) 慶応3年(1867年)～明治11年(1878年) 第1期(20種類)
幕末維新时期から民権派諸団体が憲法起草を最初に結実させる前年まで
- 2) 明治12年(1879年)～明治14年(1881年) 第2期(55種)
明治13年(1880年)11月に、国会期成同盟の第2回大会が次期大会に憲法見込案を持参すること等を決議したことを受け、民権派諸団体が憲法起草に取り組んだ時期
- 3) 明治15年(1882年)～明治22年(1889年) 第3期(19種)
明治14年の政変から大日本帝国憲法の公布直前まで

この区分けで行くと竹下弥平の憲法草案は第1期に出ている。ちなみに明治14年の政変とは大隈重信が追放された政変のことである。大隈は憲法意見書を執筆して提出していたが、大隈失脚とともに福澤門下の交詢社による私擬憲法草案の作成に加わっていた矢野文雄や、郵政行政を握っていた前島密などの大隈系官僚は下野し、立憲改進黨を作ることになる。大隈を追い落としたのは伊藤博文、井上毅らだった。そしてこの時に国会開設は9年後と発表され、新たに政府の最有力者になった伊藤の主導で憲法が起草されることが政府部内で合意された¹⁾。

この政変はビスマルク憲法に倣い君主大権を残す憲法を考えていた伊藤らとイギリス憲法の議院内閣制を構想していた大隈らの対立であった。伊藤、井上らが主導権を握ったことによって大日本帝国憲法の形が君主大権を残すビスマルク型憲法になっていくことと

1 鈴木淳『維新の構想と展開』(講談社・2002年) Pp. 300-301 参照。

なった。

上述した区分けで見ると、最も多くの私擬憲法が出されていたのは第2期である。この時期は民権派の活動が盛り上がり、国会期成同盟の大会が次期大会に憲法見込案を持参すること等を決議し、これを受け、民権派諸団体が憲法起草に取組んだ時期に当たるからである。竹下弥平憲法草案は第1期に分類されており、民権派諸団体が憲法起草を最初に結実させる時期に当たっているので私擬憲法の中でも、初期に起草されたものである。

第2期と第3期は多くの草案が起草されているので、ここでは第1期の草案のみを掲載しておく。以下が第1期のいわゆる私擬憲法とその起草者の一覧である。

【第一期 慶応3年（1867）～明治11年（1878）】

	名 称	起草年代	起草者・団体	備 考
01	船中八策	1867.06	坂本龍馬	土佐藩郷士
02	日本国総制度	1867.09	津田真道	政府官僚
03	議題草案	1867.11	西周	明六社系知識人
04	政体（政体書）	1868.04	副島種臣・福岡孝弟	
05	国会草案（未発見）	1869	市來四郎・赤松則良	
06	国会会議の議案	1870.10	江藤新平	政治家
07	立憲為政之略儀	1872.05	福島昇	
08	大日本政規	1872	青木周蔵	政府官僚
09	国会議院規則	1873.01～06	左院	
10	大日本会議上院創立案	1873	西村茂樹	佐倉藩士
11	帝号大日本国政典	1873	青木周蔵	政府官僚
12	合衆帝国構想	1874.08	窪田次郎ほか	医師
13	建言書〔民撰議院構想〕	1874.08	宇加地新八	山形県士族
14	国体議案	1874.09.14	田中正道	福岡県役人
15	国体新論	1874.12	加藤弘之	啓蒙学者
16	矢口某憲法草案（未発見）	1874頃	矢口某（変名）	
17	憲法典則〔憲法意見〕	1875.02	竹下弥平	鹿児島県人
18	通翰書	1875.06	自助社	徳島県民権結社
19	日本国憲按（第一次案）	1876.10	元老院	
20	日本国憲按（第二次案）		元老院	

※この表は、衆議院憲法調査会事務局「明治憲法と日本国憲法に関する基礎的資料（明治憲法の制定過程について）」（平成15年5月）からそのまま引用した。そしてこの基礎的資料自体が『自由民権と明治憲法』（江村栄一編・吉川弘文館・1995年）をそのまま引用しているものである。

この時期の私擬憲法の発案者は、未発見のものは変名と思われるものもあるものの殆ど、どのような人物だったかが知られている。しかし、今日まで「竹下弥平」は名前が判明している人物の中では「大隅国喺嶽郡襲山郷」の人物であるということが分かっているだけで、その実像は全くの謎とされてきた。この表を見て分かるように個人で草案を起草している人物は（見てみると例外もあるものの）その殆どは旧藩藩士、政治家、政府官僚、知識人である。だが、竹下弥平は鹿児島県人という出身しか分かっていなかった。

これまでも、竹下弥平について研究して来た人々によって竹下弥平の人物像に迫る試みはなされてきたものの、実際にどのような人物であったか、そして、どのような活動をしたのかは、誰にも正確に突き止められることはなかった。本稿は、今まで全くの謎とされてきた「竹下弥平」の実像を突き止めたことを、広く世に公表するものである。

「竹下弥平」が今日まで、正確にどのような人物であったのか、突き止めることが困難であった理由は複数あるが、その最も大きな理由は、「竹下弥平」という名前そのものが、本名ではなく、変名であったということである。そして、もう一つは、竹下弥平と名乗った人物が若くして亡くなったと思われることである。この度、我々は、様々な証拠によって「竹下弥平」が「松元弥一郎武元」という大隅国襲山郷に在住した人物であったということに確証を得た。本稿ではこのこと報告したい。

「竹下弥平」が「松元弥一郎武元」であると我々が考え、結論付けた根拠は、鶴丸寛人が執筆した第2章で詳細に述べるが、本稿の構成について、ここで述べておきたい。

まず第1章1節においては、これまでの竹下弥平の研究史の整理を行う。今日まで、竹下弥平については、その憲法草案の内容から、その内容に魅力を感じる何人かの論者によって研究が進められてきた。実際にはその誰もが、「竹下弥平」の実像には迫ることなく、今日まで来たのだが、第1章1節では、今日まで「竹下弥平」について論究された研究を紹介し、その内容を検討する。

その際、今日までの研究史と、それぞれの論者の竹下弥平への評価を紹介するが、それぞれの論者によってなされて来た、かなり一方的な評価からの竹下弥平観を再検討し、左派的イデオロギーからのみ評価され続けて来た竹下弥平への評価の不十分さを批判的に検討したい。2節ではその先行研究を類型化して、これまで竹下弥平に言及してきた人々にもいくつかのタイプがあったことを報告する。

3節においては、竹下弥平が影響を受けたと思われる人物について言及する。筆者(ら)は、竹下弥平が影響を受けた人物は憲法草案に登場する人物ではないかと考えている。その視点から明六社と『明六雑誌』について検討したい。そして、竹下弥平の憲法草案に名前の挙がった人物とその思想的立場を紹介した後、憲法草案中の人物の竹下弥平への影響について考察する。

第2章においては、竹下弥平と名乗った人物が、「松元弥一郎武元」という名の人物であったことの根拠と、松元弥一郎武元の実像に迫る。ここは、子孫である鶴丸氏しか知り得ない事実を今回、本稿で公表して頂いた。なお、本稿は「竹下弥平」が、本名は「松元弥一郎武元」という人物であったことを世に公開するものであるが、本稿でのこの人物の記述は、途中までは、私擬憲法草案の作成者として世に知られている「竹下弥平」で統一する。

本稿の執筆に先だって吉田健一、鶴丸寛人の二人は「竹下弥平研究会」を組織した。そ

もそも、本研究は、平成25年3月に、鶴丸寛人の父である明人氏（現：鹿児島県議会議員）から吉田に竹下弥平なる人物の書いた私擬憲法の資料が提供されたのが始まりであった。そして、その時点で、鶴丸（明人）氏は、竹下弥平が自身の先祖にあたる人物ではないかとの目星をつけていた。しかし、その段階では、まだ確証を得るところまでは、行っておられず、竹下弥平の実像を研究して行くということを二人が合意した。

その後、多少、時間が経過したが、平成26年の秋に、再び、鶴丸（明人）氏と吉田が会った時に、竹下弥平についての研究を再開することが合意された。そして、平成26年10月に吉田、鶴丸（寛人）の二人によって、「竹下弥平研究会」が組織された。

竹下弥平研究会は、平成26年11月からほぼ週に一回の研究会会合を繰り返しながら、竹下弥平について議論を行った。平成27年1月には竹下弥平の子孫の親族にあたる松元史子氏へのヒアリング調査も実施した。そこで得られた知見は第2章で明らかにされる。研究会では、「竹下弥平」が松元弥一郎武元である根拠についても議論したが、その人物像、思想、影響を受けた思想についてまで議論しながら、出来るだけその実像に迫った。その結果、我々は、今日まで一部の論者によってイメージされてきた竹下弥平の像は、かなりの偏りのあるものであるとの共通の認識を得た。

本稿は、まず「はじめに」及び第1章を吉田が執筆、第2章は鶴丸が執筆し、吉田が全体の調整を行った。鶴丸（明人）氏からは、この研究会の議論に資する資料提供を受け、議論の時々で何度も重要な示唆を与えて頂いた。ここに記して感謝する。各章には、それぞれの原執筆者の分析、見解が示されてはいるものの、本稿は、全体として吉田、鶴丸の2人の共同研究の所産であることを明記しておきたい。

第1章：「竹下弥平」についての研究史とその評価（吉田）

1 節：竹下弥平に関する先行研究の紹介

本章では、これまでの竹下弥平についての研究史を紹介し、その評価を行う。

竹下弥平の憲法草案自体は、今日、家永三郎ほか編『明治前期の憲法構想』増訂版第二版（福村書店、1987年）に収録されているので比較的容易に読むことができる。1967年の『明治前期の憲法構想』の初版には、作者不明として収録されていたのが、24年後に竹下弥平の草案と判明したとのことである。下の表にも入れているが水野公寿のエッセイ「竹下弥平憲法草案をめぐって二、三のこと」によれば、竹下弥平の憲法草案が最初に紹介されているのは、石井良助の紹介による「明治八年の一私擬憲法案」（戦後再刊の『明治文化全集』月報14号、1957年3月25日発行）という文章とのことである。しかし、この石井の文章が書かれた時点では作者は不詳だった。それが後になって新井勝紘（当時：町田市市史編纂室。その後、専修大学教授）によって『自由民権百年』（4号、1981年7月1日発行）でこの憲法草案の出典が『朝野新聞』464号（明治8年3月4日発行）だったことが明らかにされた。そして、『憲法構想』増訂版（1985年2月刊）以後の版には「竹下弥平憲法意見」として掲載されているということである。

今日まで、竹下弥平を扱った書物・論文・短文、新聞記事などは下記の通りである。ここでは、いわゆる「論文」としてまとめられたものや、書籍の一部になっている論考の他に広く雑誌記事、新聞記事、研究会でのレジュメ、研究会での報告書、個人のブログなども対象とした。その理由は、公表された論文、書籍に収録されている論考だけでは絶対的

な数が少なく、どのような人々にどのような文脈で竹下弥平が研究され、理解されてきたかを検討するには、不十分と考えたからである。竹下弥平を研究してきた人々の思想的な傾向を検討するために、小さな文章も対象とした。だが、極めて小さなサークルなどで発表されたエッセイの全てまでは網羅できていないかもしれないので、この表に掲載したものが、竹下弥平について書かれた全てであるとはいえない。

	著者	論考のタイトル	媒体・号数・発表年月など
1	野崎健太	「竹下弥平を知ってますか」	2000年8月18日『朝日新聞』記事
2	出原政雄	「鹿児島県における自由民権思想 —『鹿児島新聞』と元吉秀三郎—」	『志學館法学』第4号 2003年
3	出原政雄	「日本最初の民間憲法草案」	志學館大学生涯学習センター・隼人町教育委員会 編『隼人学』（南方新社・2004年）pp. 109-117
4	川寄兼孝	「竹下弥平の憲法草案」	県教育者協議会編『鹿児島近代社会運動史』 （2005年・南方新社）pp. 54-63
5	伊地知南	「湾奥きりしまの進歩性」	『MOSSITURNきりしま』2010年9月号、10月号
6	神田嘉延	「霧島山麓の襲山郷在中の竹下彌平 の憲法草案 —東京「朝野新聞」の 明治8年3月4日付けの発表—」	神田のブログ 2013年3月12日
7	前田昭人	「憲法改正 明治8年 鹿児島から 草案 竹下弥平なら」	2013年6月9日『南日本新聞』朝刊
8	神田嘉延	「竹下彌平の憲法草案にみる 自由民権思想と西郷隆盛」	神田のブログ 2014年5月22日
9	水野公寿	「竹下弥平憲法草案をめぐって 二、三のこと」	2014年10月22日 水野氏個人のエッセイ
10	久米雅章	「竹下弥平憲法草案について —西南戦争従軍者の一人か？—」	2014年11月23日第1回「鹿児島近代民衆史研究会」 における報告資料。

※久米は鹿児島近代民衆史研究会の機関紙「かごしま民衆」第1号（2015年1月1日発行）に、「10」と同趣旨の論考を寄せている。この論考は、11月23日の研究会のレジュメを要約したものであるため、一覧表には入れない。

※筆者が入手しているものだけでも他に久米の資料に添付されていた「久米雅章氏「竹下弥平憲法典則」報告を聞いて」（森健一）、「竹下弥平憲法草案について——9月例会の久米報告を聞いて」（水野公寿）という二つの熊本近代史研究会の会員向けの文章もあるが、これは検討対象に入れていない。

※文章の長短や発表された媒体に関係なく、発表（掲載）順に並べた。

1) 『朝日新聞』記事「竹下弥平を知ってますか」

これは、『朝日新聞』の記者野崎健太による新聞記事である。2000年8月18日付である。後で紹介する川寄らの共著が出たのが2005年なので、それより早い時期に出た記事であ

る。記事では、川寄の説を紹介している。記者の野崎自身も川寄と同じ傾向の思想の持ち主と思われる。記事には大きく「民主思想の士族か」と書かれている。

川寄は記事の中で「投書が掲載されたのは西南戦争の二年前で、当時の鹿児島は、明治政府から下野した西郷に率いられた私学校派が県政を押さえていた。征韓論や富国強兵を唱える国権派が幅をきかせていた鹿児島で、竹下のような民主主義思想の持ち主がいたことは、驚くべきことだ」と述べている。そして、「まだ希少だった新聞を購読し、西洋の民主主義思想にも触れていた竹下は、先進的な思想をもった士族だったのではないか。思想的には西南戦争に参加するタイプには思えないが、ひょっとしたら、西郷派にも民権思想が影響しているのかもしれない」とも川寄は述べている。

川寄は、「当時の鹿児島は、明治政府から下野した西郷に率いられた私学校派が県政を押さえていた。征韓論や国権派が幅をきかせていた鹿児島で…」と西郷と私学校に極めて否定的な見解をもっている。西郷の「国権派」対「民主主義」との構図でものを見ていたが、これは、当時の時代背景と、薩摩における西郷の影響力の強さのみならず、敬愛のされ方を考えると、一方的で偏った見方だと考えざるを得ない。

そもそも、西南戦争で西郷は「反政府」になっているのに「国権派」というのはおかしい。おそらく、川寄は、征韓論をもって、そう位置づけているのだろう。左派的史観の代表例とっていいだろう。この部分は後で検討したいのだが、鹿児島でも戦後、高校の社会科教員などを中心として、かなり西郷隆盛に批判的な人々もいたようである。今では殆ど否定されつつある西郷の征韓論だが一遣韓論が優位になりつつある一戦後の俗にいう「民主教育」の中では西郷がかなり軍国主義の先祖であるという見方は鹿児島においてすらあったようである。

だが、「…ひょっとしたら、西郷派にも民権思想が影響しているのかもしれない」と最後に述べるなど、川寄は部分的には竹下弥平と西南戦争をつなぐ線として竹下弥平の民権思想が西郷軍に影響を与えたとの見方もしていたようだ。

後に検討するが、西郷を評価する神田は、竹下弥平を西郷派、西南戦争の西郷軍に影響を与えたという見方をしている。ここは西郷を「国権派」、軍国主義の先祖とする立場との違いではある。左派は「こんな国権派の巣窟で、よくこんな民主的な人が出たものだ」と竹下弥平を自分の思想の系譜の先祖と位置づけている。

だが、本稿で明らかにするように、この立場の人からすれば残念なことなのだろうが、竹下弥平は西郷と交流があり、「こんな国権派の巣窟で、よくこんな民主的な人が出たものだ」との見方は全く正しくない見方であることが明らかになった。この点でいえば「竹下弥平の民権思想が西郷軍に影響を与えた」論の方が、まだ説得力をもってもくるが、この論にも無理がある。これは後に考察したい。

どうも川寄は、竹下弥平が西郷と関係のある人物ではあつて欲しくないと望んでいるようである。川寄は「鹿児島9条の会」で行った挨拶でも、当時の私学校を厳しく批判している。もしかすると、川寄は自分の先祖が私学校の生徒に殺された私怨でももっているのかも知れないと推測したが、そこまでは分からなかった。

そして、川寄は、現行憲法の護憲を訴える時に、竹下弥平を持ち出し、あたかも、西郷派が今の改憲勢力であり戦争遂行勢力の先祖であるといわんばかりだが、これは相当に一方的な見方であるとしかしいようがない。

しかし、その川寄が「…ひょっとしたら、西郷派にも民権思想が影響しているのかもしれない」といっているのはどういうことなのだろうか。できれば西郷と一切の関係がないのが理想だが、仮に西南戦争に行ったのなら、せめて西郷軍に「民権派」の影響があり、西南戦争に「民権派の闘いでもあった」という色を付けたいからであろうか。

この記事は「人権を尊重」、「議会が中心」などに見出しに書いており、全体的に恣意的な記事である。全て、現在の価値観から書かれている。記事中に「立法府中心主義」などと書いてある。だが、この時期は自由民権運動が始まった（板垣に呼応してこの草案も投書された）時期であり、この表現も、よく検討すれば当時の時代背景を理解せず書かれていることが分かる。要はこんな民主的な人がいたという驚きを伝えるという、恣意的な記事にするために、「立法府中心主義」と書いているとしか思えない。

この記事自体は川寄を紹介した記事なので、川寄の思想以上のことは出てこないのだが、記事の執筆者の野崎も全面的に川寄と同じ傾向の思想をもっていることが伺える。

2) 出原政雄「鹿児島県における自由民権思想—『鹿児島新聞』と元吉秀三郎—」

出原は現在、同志社大学法学部教授。専門は政治学、日本政治思想史。この論考の執筆時は志學館大学教授だった。この論考は2003年に大学内の紀要『志學館法学』に発表されている。

竹下弥平憲法草案については、「はじめに」に触れられている。自由民権運動派、「民撰議員設立建白書」の呼びかけから始まったことが良く知られているとしたうえで、「鹿児島県においてはこの建白書に呼応する形で…投書しているのが注目される」とある。竹下弥平憲法草案も、歴史的には、板垣退助に建白書に呼応して書かれたもののようである。

出原は「…こうした議会開設の要望とそれを支える政治思想が県内各地に広がる以前に、一八七七（明治一〇年）の西南戦争勃発によって、その流れは一旦中断してしまったと推測される」と述べており、鹿児島にも出てきた「民権思想」が西南戦争で途切れたという見方である。この見方は、後に述べる神田のような「西南戦争の思想的バックグラウンドが民権思想」でそれに竹下弥平憲法が影響を与えていたかもしれないという説とは微妙に違った見方である。

出原がいうように、鹿児島においては、西南戦争という内戦が起こったことは確かなので、土佐のような言論による自由民権運動が、板垣の活動と同時に盛り上がらなかったことは事実であろう。「西南戦争勃発によって、その流れは一旦中断してしまったと推測される」との見方はほぼ正しいものと思われる。筆者自身は、「その流れは一旦中断してしまった」説を支持したいと考える。この論考自体は、ほとんど『鹿児島新聞』と元吉秀三郎について研究されているものであり、竹下弥平への言及は最初の部分だけである。

3) 出原政雄「日本最初の民間憲法草案—国分・隼人地区の竹下弥平—」

上述した出原の論考。志學館大学生涯学習センター・隼人町教育委員会編『隼人学』（南方新社・2004年）の一部分に収録された論考で、竹下弥平を世の中に知らしめた論の一つ。竹下弥平の憲法草案を評価しつつも、後に紹介するものとは違って、竹下弥平に過剰な思い入れがないのが特徴である。もちろん、この論考でも出原も竹下弥平を特定はしていない。

出原は竹下弥平を慶応義塾と関係があったのではないかと推測しているが、『慶応義塾入社帳』には名前はなかったとはっきり書いている。竹下弥平が変名であったことから、竹下弥平が慶応義塾に全く在籍していなかった証明にはならないまでも、竹下弥平が「竹下弥平」の名前では、入社していなかったことを裏付けるものである。

出原はこの論考で竹下の人物像を「幼少時からかなり先進的な教育環境の中で育ち、また彼の周りには洋学の知識があふれていたと想定される」と推測している。しかし、これは実際にはどうか分らない。本稿では竹下弥平が郷土であったことまでは間違いなく確認したが、周りに洋学の知識があふれていたか否かまでは分らない。

筆者は、竹下弥平は東京に行っていた時代に啓蒙思想の影響によって先進的な知識を得たと考えている。この出原の論稿にしても他の論稿にしても、全て竹下弥平がずっと鹿児島にいて、この憲法草案を書いたと想定している。そのような思いこみから、竹下弥平が鹿児島にいながら、なぜ、先進的な思想をもつに至ったのかという謎が生まれ、どこかで洋学と先進思想を見に付けたのだらうという推測が生まれたのだと思われるが、東京に行って先進的な思想に触れた人物と想定すれば、生まれた家に洋学の知識があふれていたかどうかなど関係のないことである。

出原は、竹下弥平の憲法草案についても分析している。その中で「…新聞紙上の投書では「鈴定」となっている事実は、竹下の意図した憲法草案の方法が欽定方式ではなく、議会による憲法制定という民約憲法方式を構想していたことが確認できて、興味深い」と述べている。また、「つまり竹下の議会論の第一の特徴は、現行の中央集権的な太政官制を改廃して新しい制度改革を実施するための憲法制定議会の設立が構想されていて、しかも憲法の制定および改正は議会だけの権限と位置付けられているところにある」とも述べている。

確かにこのように読めなくもないが、憲法草案の中に憲法制定議会の提案をしているという解釈はどのようなのだろうか。「現行の中央集権的な太政官制を改廃して」と出原は述べている。「現行の中央集権的な太政官制」と簡単に述べているが、この憲法草案の書かれた時期はまだ明治政府ができて8年目である。国家そのものが生まれたばかりで、様々な制度を整えていたこの時期に竹下弥平に「制度の改廃」というような発想が実際にあったのかどうかまでは分らない。

出原はこの論考の「二 竹下弥平の人物素描」で「…上述のように左院議員に「朝野新聞」の成島柳北や「郵便報知新聞」の栗本鋤雲を、「東京日日新聞」の福地源一郎とともに推挙されるべき人物に含めていることからして、竹下はこうした新聞類や雑誌（同様に名前を挙げていた福沢諭吉や中村正直の関係した『明六雑誌』でも民撰議院が展開されている）を丹念にフォローしていたと推察される」と述べている。

出原は「丹念にフォローしていた」というレベルで考えているが、筆者は竹下弥平の思想のかなりの部分は東京にいた時の明六社との邂逅によって作られてきたものだと考える。竹下弥平という突出した人物が東京から遠く離れた鹿児島にいて、独自に憲法草案に書かれた思想をも持つに至り、新聞で少し影響を受けていたかもしれないというのが、今日までの竹下弥平研究者の殆どの論である。この出原の論考も竹下弥平が中央と遠く離れた鹿児島にずっといたことを前提とした推論のように思われる。

出原はまた竹下弥平の憲法草案について「なかでも、国民本位主義や自由尊重の精神を

立論の基本原則としていたこと、そして憲法制定議会による民約憲法方式の提唱や議院内閣制を中心とした立法府中心主義の制度構想といった具体的な提言がまっさきに目につくが、とりわけ議会開設の目的を「自由之理」の拡張に求めた主張は特筆に値するといえよう」と述べている。「国民本位主義や自由尊重の精神を立論の基本原則としていたこと」は、実際に竹下弥平はこのような思想をもっていたのであろうから正当な評価だと思われるが「憲法制定議会による民約憲法方式の提唱」の部分は少し行き過ぎた表現のように思われる。

この後、出原は「三 県内民権運動における位置」で鹿児島の民権運動との関係で論じている。だが、出原自身が「これまで主として竹下の投書に示された憲法構想の内容分析と歴史的位置を詳しく紹介してきたが、やはり竹下弥平なる人物についてほとんど明らかになし得なかったことは隔靴搔痒の感を禁じ得ない」と述べているように、竹下弥平そのものについては分からなかったということでこの論考は終わっている。

4) 川寄兼孝「竹下弥平の憲法草案」

川寄は竹下弥平の研究家で、『鹿児島近代社会運動史』（2005年・南方新社）の編者でもある。元中学教諭。この論考は『鹿児島近代社会運動史』（2005年・南方新社）に収録。先に紹介した新聞記事から5年後にこの本が出たことになる。

この論考で、川寄は竹下弥平に迫ろうとしているが、川寄も竹下弥平を特定できてはいない。この論考で川寄は竹下弥平を「日当山地区の旧郷土階級出身の人物」と推測しているが、これは正しかったということになる。

この論考は川寄のイデオロギーの色濃く表れた論考である。川寄の思想の一旦の表れている部分を紹介しておく。川寄は、竹下弥平が憲法草案を起案した時期の鹿児島を、「二、竹下弥平の憲法草案の歴史的位置と意義」の中で「…西郷隆盛を首領と仰ぐ私学校派が、鹿児島県政、地方郷政を牛耳っていた時期である。内に於いては、旧武士階級の特権・維持回復を図り、外に向かつては「征韓論」に示されるような武力侵略の傾向の強い、いわば民主主義に反する、武断的風潮の強かった鹿児島で」あったと述べている。

ここも議論のある部分だが、川寄はそんな風土の鹿児島から竹下弥平の憲法草案が出た意義を「そんな鹿児島で、竹下弥平が「理＝真理」であり、「立国の本旨」としている「吾が身奪うべくも吾が国奪うべからず、吾が国奪うべくも自由の理奪うべからず」という自由の理、自由の権利を尊重すべきという考え方を明確に打ち出し、新聞への投書を通じて、全国の有志に訴えていること、さらに竹下弥平が彼の「幼時」、おそらく幕末から明治初年の時期に、この「理＝真理」を聞いていたとすれば、鹿児島には、我々が想像する以上に、早い時期から民権尊重・民主主義の思想が人々の間にあり、それが話題となっていたことになる」と述べている。

そして川寄は「未だに「武の国薩摩」とのイメージの強い、そしてそれを官民挙げて誇りとする傾向の強い鹿児島ではあるが、鹿児島の人間が、鹿児島の歴史・風土の持つ多面性を理解すべきこと、言い換えれば、鹿児島にも民主主義の実現を求める歴史的伝統があったということ、理解すべきではなかろうか」と述べている。川寄は「民主主義」という当時は、広く使用されていなかった言葉を、今の時点の価値観で何度も使っている。

そして、川寄は「四、憲法草案の各条項とそれが目指すもの」と題して竹下弥平の憲法

草案について独自の解釈を試みている。全部についてはここでは言及しないがいくつかを見ておく。第4条について「三権分立、シビリアンコントロールを志向している」と書いている部分は行き過ぎた解釈だろう。実際の第4条は「右院ノハ現在ノ行政官勅任官以上皇族華族中ヨリ撰挙セラルベシ。其定額、百員ヲ限ル。但、司法官ト武官トハ議員タルヲ得ズ」とある。ここは竹下弥平が右院についての規程を書いている部分で、右院議員から司法官と武官を除いていることをもって川寄は「シビリアンコントロールを志向している」と書いているのだが、シビリアンコントロールとは軍部の文民による統制のことであって、議会に武官を入れないことではない。議員の要件から武官を除いていることを、シビリアンコントロールというのは正確ではない。

さらに、司法官が議員になれないことをもって「三権分立を志向している」と述べているのもおかしい。この当時はまだそれこそ憲法もなく、権力分立の考えも充分にはなく、政府（つまり行政）しかなかった時代である。司法権の独立という概念すらない時代である。竹下弥平の憲法草案に、行政権、立法権、司法権が分けて規定してあれば、このように評価しても良いだろうが、右院の議員の要件から司法官を除いていることをもってして、竹下弥平が「三権分立を志向していた」というのは、竹下弥平に先見性があったことを評価したいのは理解できるものの、行き過ぎた解釈であろう。

もう少し見ておくと川寄は「第5条では、その左右両院に、内閣総理大臣に相当する太政大臣の選定権を認め、議院内閣制への道を開こうとしている」と述べている。だが、竹下弥平の憲法草案の第5条は「太政大臣（即行政ノ首官タル重任）及左右大臣ハ左右両院ヲ撰挙ヲ以テ定ムベシ」とあるだけである。確かに、読みようによっては、竹下弥平が議院内閣制らしきものを考えていたののだろうかと思えなくもない。しかし、この規程には、太政大臣は左右両院いずれかの議員である必要性も書いてないし、さらに太政大臣以外の規程のある大臣は「左右大臣」だけである。つまり昔からの左大臣、右大臣のことにしか言及していない。

内閣の規程は竹下弥平の憲法草案にはない。太政大臣が左右両院で選ばれることは書いているが、他の閣僚についての記述はないし、そもそも閣僚（各省大臣）という概念はなかったのだろう。多数党の党首（あるいは連立政権の時は多数勢力をつくる政党の連合の代表）が立法府で首相の指名を受けて内閣を組織するのが議院内閣制である。したがって、太政大臣を左右両院の選挙で選ぶことを規定しているからといって、「議院内閣制への道を開こうとしている」との評価はこれまた行き過ぎた解釈であろう。

最後に第8条についての川寄の意見も見てみよう。川寄は「第8条では、行政、司法、軍事の如何なる権力の介入も排除して、憲法の制定、改正の特権を、左右院にのみ認めている。欽定憲法ではなく、民定憲法を目指している。ここにも三権分立の思想が表れている」と述べている。全く自分の理想で全てを解釈しているとしかいいようがない。実際の第8条は「凡帝国之憲法典則ヲ鈐定スル、若シクハ更正増減スルハ一切左右両院之特権ニ在ルヲ以テ、仮令行政官、司法官及び武官、何様之威権、何様之時宜アルトモ、決シテ立法上ノ権ヲ毫モ干犯スルヲ得ザラシムハ、立法ノ本旨最重スル所トス」と書いてある。

立法権中心の思想が書かれていることは確かなのだが、そもそもこの左右両院議員が民選（当時の言葉では民撰）議員でない以上、立法府に大きな権力を与えているからといって、民衆が行政をコントロールする思想の憲法だったとはいいきれないし、またこの条文

に「三権分立」を読みとることも少し無理があるのではないだろうか。そして、一体、どこに「欽定憲法ではなく、民定憲法」の思想が表れているのか不明である。

そもそも、この時期には憲法はまだ制定されておらず、それゆえに、民間からも様々な私擬憲法草案が発表されていたのだが、実際に制定される憲法は、大日本帝国の憲法であることには違いなかったのだから、民定憲法にするか欽定憲法にするかという議論が国民の間で広範になされていたわけではない。帝国の最初の憲法なのだから、どのような内容のものになるにしても、あらゆる憲法は欽定憲法になるしかなかった時代である。そして実際には大日本帝国憲法は欽定憲法とはいうものの伊藤博文が中心となって起草した²。仮に竹下弥平の憲法草案のような内容の憲法が実際に制定されても、それは明治天皇によって定められた憲法となったはずであり、議会が開設された後、議会による憲法制定を竹下弥平は考えていたのかも知れないが、この時代の話をするのに竹下弥平は「民定憲法を目指している」などと何をもって断定したのだろうか。

そして、川寄は「…1889年（明治22）に制定された大日本帝国憲法が、主権者であり、元首である天皇の権限を極めて強く認め、一方、「臣民」の権利を認めるに極めて弱いものであったのに比すれば、竹下弥平の憲法草案は遙かに優れたものであったといえる。また、その底を流れる思想が、現在の日本国憲法に引き継がれたとも言えるだろう」と述べる。言いたいことは理解できるが「その底を流れる思想が、現在の日本国憲法に引き継がれた」とは何を根拠に述べているのだろうか。戦後の憲法は良くも悪くも、立場によって様々な議論があるが、占領軍が大枠を作ったものである。GHQが作った戦後の日本国憲法が竹下弥平の憲法草案の思想を受け継いでいるとは、これまた行き過ぎた表現だろう。

「結果として明治初期に竹下弥平が構想した憲法の底流にあった思想のいくつかは戦後に実際の憲法に表現されることとなった」という程度の表現が妥当だろう。

そして、「五. 最後に」に「…そして今もなお「明治の元勲」として褒めたたえられる鹿兒島の「先人」たち、例えば西郷・大久保・その流れに属する人々は、日本が欧米文明諸国と肩を並べる方策を、国の内外で人権を抑圧しての富国強兵、アジア諸国への侵略に求めた。だが、竹下弥平は、基本的には人権の拡充、民主主義の発展を求めている。今こそ、竹下弥平の如き民権派の思想を、如何に継承し発展させていくべきかを考えてみたい」との記述がある。

川寄は、西郷と大久保を同列に論じたり、薩摩の維新の元勲が「アジア侵略」を行ったと断じたりしているところなどから、多少偏った歴史観をもっている人物であることが理解できる。そもそも、西郷に韓国侵略の意図があったかどうか、未だに分からず、最近の歴史学の研究では「遣韓論」の方が優勢な中で、どうしても、西郷を「アジア侵略の原点」としたいのが川寄の立場だったようだ。

この川寄の西郷及び私学校への理解も偏ったイデオロギーによるものだが、これに竹下弥平を単純に対比しているのは、非常に奇妙なことである。竹下が西郷と面識があったことや、西郷の知遇を得ていたことが、我々の研究で明らかになったが、川寄などからすれば、信じたくない、認めたくない事実だろうと思われる。

2 大日本帝国憲法制定については、例えば鈴木淳『維新の構想と展開』（講談社・2002年）の「第6章 憲法発布」（pp. 290-342）に詳しい。

この川寄のいうような、国権派、西郷派が幅を利かせていた薩摩・鹿児島に、全く別の立場で西郷派の影響の外側に希有な珍しい民主主義者の青年がいたという見方は完全に否定されるべきものである。このように考えたい人々が一定数いるのは理解できるが、これらの人々は、当時の鹿児島の実情、雰囲気を中心に無視してものを考えていたのである。

実際のところは竹下弥平といえども、薩摩・鹿児島の人脈の中で行動していたのであり、しかも、竹下弥平は西郷隆盛と面識があったのである。このことを、川寄的な思想的立場立つ人々はどう考えるのだろうか。

5) 伊地知南「湾奥きりしまの進歩性」

この記事は誰が書いた文章なのか分からなかったが、鶴丸（明人）氏の指摘により、この記事に執筆者は、伊地知南であると判明した。この論考は、2010年に『MOSSITURN きりしま』という地域情報誌に掲載されたものである。

この文章の中では川寄と出原が紹介されている。『朝野新聞』から川寄が竹下弥平を発掘したのが川寄であることと、2007年に出原が志學館大学で講演をしたことが紹介されている。この記事は川寄を紹介した記事であるから、勿論、この記事でも竹下弥平の実像は突き止められてはいない。

この記事には、「この通りやれば戦争など起こらなかった」とあるように、伊地知も竹下弥平を「民主主義、平和主義の思想」の先祖と位置付けている。この「戦争」は第一次世界大戦を指しているのか、第二次世界大戦を指しているか、分からない。しかし、この論考は、あたかも「平和憲法を持てば、自然に戦争は起こらない」という、空想的平和主義を思わせる一文である。

この記事で伊地知も憲法草案のことを説明している。第4条の説明の中に「但し、この中には司法と武官（軍閥者）は入らない。司法の独立と軍のシビリアンコントロールを守るためである」とある。川寄を紹介しているだけあって川寄と同じようなことを書いているのだが、先に指摘したように、シビリアンコントロールとは軍に対する文民統制のことであって、これから設立を想定する右院議員の要件に、竹下弥平が武官を除いていることはシビリアンコントロールとは関係がない。

そもそもこの時代は、政軍関係が戦後の我々の観念で考えられる時代ではなかった。極論をいえば、明治維新によって成立した明治政府自体が、ある意味で初期は軍事的な国家なのであって、その後（西南戦争後）に政治を代表する伊藤博文と軍事及び官僚を代表する山県有朋（いずれも長州）によって明治国家は制度化されていく。その後、政治（文）と軍部（武）が並び立つて行くのが明治国家である³。勿論、この二元的な制度は破綻した。その意味から考えれば、明治初期の制度設計時点で（といってもこの明治8年よりは後だが）文民優位の制度を作っておくべきだったとは筆者も考える。議院内閣制も明治時

3 五百旗頭 真編『戦後日本外交史』第3版 補訂版（有斐閣・2014年）pp. 7 - 9 参照。執筆者の五百旗頭はこの制度を「明治体制の欠陥——二元的制度」として「（西南戦争と大久保暗殺後）…明治国家の制度化という局面を中心的に担ったのが、政治を代表する伊藤博文と、軍事及び官僚を代表する山県有朋であった。二人の並び立つ関係が、明治国家の制度にも反映された感があった。明治の元老たちは多くの立派な業績を残したが、国家制度の根幹について重大な誤りを犯し、それが戦前の日本帝国にとって、死に至る病となった」と述べている。

代から取り入れ、そして文民統制を明記しておけば良かったと筆者も個人的には考えている側である。

だが、この時期はまだ西南戦争の前である。この時期にはまず日本にシビリアンコントロールという概念さえなかった。江戸時代の武士は文も武も一元的に支配していた中で、文民統制の考え方が明治8年の時点の日本にあったはずがない。そもそも江戸時代の武士は戦がなかった時期は基本的に文民（公務員）である。そして幕末から維新の時期に武が力を持ったのだが、これは幕府を武力で倒幕するしかなかったのだから仕方がなかった。その後、明治政府が成立する。この時期には、今日的意味でのシビリアンコントロールの概念はまだ存在していなかったのである。そんな時期の日本で一人竹下弥平だけは、後のシビリアンコントロールの概念に気づいていたという論を展開したいのだろうが、右院議員の要件から武官を除いていることを「シビリアンコントロール」を想定していたとまでいうのは論理の飛躍である。

伊地知は「江戸幕府以上に進む強権政治的なものに対抗して竹下が目指す近代国家像には欧米で進んでいた民主主義立国が見える」とも述べている。本当にそうだったのだろうか。筆者にはこの明治8年の時点で、竹下弥平が明治国家を「強権的な国家」と捉え、それに対して「欧米で進んでいた民主主義立国」を対比して考えていたとは考えられない。これは後に述べるが、筆者が伊地知のような考え方に賛成できない理由は、竹下弥平はこの時期、明六社の啓蒙思想に多大な影響を受け、明治初期の論壇で展開される議論から影響を受け、自身の思想を固めて行ったと考えるからである。

伊地知は竹下弥平の人物像を「ラテン語や英語の短文を駆使する知識と民主主義思想を持ち合わせた当時としては飛び切りのインテリ」、「東京の朝野新聞を知って購読していたとすればそれなりの資産家」、「地元においてこれほどの情報を持つことは無理で、一度は東京に遊学して知識人との交流があったのではないかと推測している。東京遊学の可能性を挙げてはいる。そして、「そして竹下は孤立した存在ではなく、同じ志を持つグループ、若者層があったとも思われているのである」とも推測している。だが、これは推測の域をでないものであろう。竹下弥平が自由民権運動の鹿児島における運動のリーダーであったという資料がない以上—実際には、竹下弥平は鹿児島で団体（政治結社）を創るなど組織的な自由民権運動は行っておらず西南戦争に行き戦死したことが判明している—実際に竹下弥平が孤立していたか仲間がいたかなどは分からない。

この記事には、「欽定憲法の下、やがて日本は間違いじみた全体主義に陥り、あげくに敗戦の惨状を味わうことになる。竹下の提唱した民主主義国家は六十年余り後ようやく実現するのである」という記述もあるが、これも極端な歴史認識に基づく考え方である。そもそも、欽定憲法と戦争は直接的には関係ない。欽定憲法だから国家は戦争に突き進み、民定憲法を持つ国は戦争をしないのだろうか。そもそも、民主国家は戦争をしないともいうのだろうか。歴史上、「民主主義国家」が「民主的」に、国民の多数派の意志で戦争の道を選んだことは枚挙にいとまがない。

さらには、「竹下の提唱した民主主義国家」との表現も大袈裟かつ、的を外している。竹下が「民主主義国家」を提唱していたにも関わらず、実際の日本が「国家主義国家」、「全体主義国家」としてスタートしたとも簡単には断定できない。明治国家は途中から軍部主導になったことは確かであるし、筆者も明治国家の制度設計は間違いだったと考えて

いる側に位置する。だが「欽定憲法」だったから、戦争への道を歩いたのであり、「民定憲法」なら戦争はしなかっただろうと一概にいえるものではない。

本稿で後に言及するが、竹下弥平は、戦後民主主義的な視点から見た「民主主義思想家」ではなく、文明開化直後の「啓蒙主義に影響された青年」であったと我々は考えている。竹下弥平憲法草案に出てくる人物は、殆ど明六社系の人物だが、彼らは自分たちを、今日のような意味での「民主主義思想家」とは規定してなかったはずである。彼らは国民の「蒙を啓く」ことを使命としていたのである。その流れから東京遊学中に影響を受けた鹿児島出身の青年が、影響を受けた思想に基づく草案を書いて投書したというのが実際の姿であって、「竹下の提唱した民主主義国家」などというのは後付けの理屈の最たるものであろう。

伊地知は西南戦争にも否定的でもある。伊地知は「西南戦争については様々な理由づけがされているが、本音は土地を手放すことになった郷士の既得権確保戦だ」と切り捨てている。伊地知は武士層の既得権益確保に否定的な感情を抱いていたのであろう。そして、その後、西南戦争に敗れた武士団が民権運動と合流するという状態を「奇妙な状態」といい、「だが、これは所詮、本物ではない」とも酷評している。武士が担い手というだけで、伊地知は全部が気に入らない様子である。

ただし、確かに自由民権運動そのものは、土地も仕事も官職も何もかも失った士族の反乱だから、この見方も正しいといえれば正しい。つまり、西南戦争のみならず、「民権運動」すらも、そんなに崇高な理想に基づく立派なものではなかったともいおうと思えばいえる。この立場の論者は、民権運動も農民や被差別、被統治階級から起こったものは「本物」で、旧武士層から起こったものは「偽物」という極端な意見をもっているように推察できる。

確かに、江戸時代まで「持つ者」だった郷士は維新で「持たざる者」になった。彼らの反乱は、所詮はこれまでの既得権益を放したくない連中の反乱で「民主主義的ではない」と評価したくなる心情も理解できなくもない。だが、そもそも、時代的背景を考えれば、この時代の知識層は、田舎では（大都市の富豪や町衆がいない地方）旧武士層に限られていたのだから、第一弾として、そこから自由民権運動が起こったことを、批判しても仕方がないのではないだろうか。労働者、大衆、被抑圧者しか、社会改革の担い手になる資格はないということはないであろう。

この文章も、川寄、出原を紹介しているだけでなく、かなり著者である伊地知の理想と思想が全面的に出ているものといわざるを得ないものである。

6) 神田嘉延「霧島山麓の襲山郷在中の竹下彌平の憲法草案—東京「朝野新聞」の明治8年3月4日付けの発表—」

この文章はブログに書かれたものである。神田は鹿児島大学稲盛アカデミー特任教授。元教育学部教授。専門は社会教育学、教育社会学。竹下弥平憲法草案の内容を説明している。それに個人的な評価を記している。特段、新しく何かを発見したというようなことは書かれていない。勿論、神田も竹下弥平を突きとめてはいない。

7) 南日本新聞記事「憲法改正 明治8年 鹿児島から草案 竹下弥平なら」

『南日本新聞』記者であり編集委員(当時)の前田による記事。2013年6月9日付朝刊。竹下弥平及び憲法草案の紹介。それほど記者自身の主張が前面に出ている記事ではない。記者なら改憲派の議員には「何がネックかかをまず問いたい」とし、改憲反対の議員には「いわゆる護憲派として、憲法を生かすために日々どのような活動をしてきたのか」と尋ねたいと書いてある。記者自身は中立の態度をとっている。この記事は竹下弥平が紹介されているだけで、そこまでの主張はない。しかし、文章全体からは改憲派に疑念をもっている文章に読めるものである。

8) 神田嘉延 「竹下彌平の憲法草案にみる自由民権思想と西郷隆盛」

この文章もブログに書かれたものである。神田は竹下弥平憲法草案と西郷隆盛を併せて論じている。そして、竹下弥平憲法草案を全面的に評価している。神田は西郷も評価している。この辺りは、川寄らとは違う評価である。神田の主張は、竹下弥平憲法草案を評価し、それは、鹿児島に士族民権運動があったことの証明だということである。そして、これが、私学校・西郷と関係があるのではないかという仮説から、ひいては、西南戦争は自由民権派の立ち上がった戦争という評価である。西郷を軍国主義の祖とするような川寄などとは違った見方である。

しかし、ここで神田がいうような、竹下弥平憲法草案、士族民権、西郷隆盛、西南戦争はストレートに直線的につながるものなのだろうか。大久保の新政府を敵視している部分は、川寄とも共通する。しかし、竹下弥平は、そもそも、そこまで大久保の明治政府を敵視していたのだろうか。神田は、中村正直の『自由之理』が竹下弥平にもストレートに影響を与えたという立場だが、本当だろうか。これは後でもう一度、考察したい。

「国家を超えた人類の普遍的な理想としての自由之理を強調している人物である」などのいいまわしは、大袈裟すぎる表現であろう。そもそも近代国家が始まった時点で、誰にも「国家とは何か」ということ自体が議論されていなかった。この時点で、反国家的な考え方、あるいは、国家を「超越した」思想が明確に意識されていたであろうか。国家が明確ではないのだから、国家を超えた思想などというものも明確に意識されていたとはいえないだろう。今でも、国家と個人の問題は、難しい問題である。そして、明治国家とは、そもそも、まだ国家主義という思想も明確に意識される前にとにかく欧米列強に侵略されないようにと急ごしらえでつくられて行った国家であった。

そもそも、国家というものへの意識が希薄で、しかも、今から、近代国家の制度を整えて行こうとする時代に、竹下弥平はそもそも、「国家を超えた人類の普遍的な理想としての自由之理を強調」していたのだろうか。敢えていえば、「国家の中に、個人の自由をできるだけ体现させたいという思想を抱いてと考えられる」程度の表現が妥当であろう。この論もそうだが、維新までは良かったが維新政府は徐々に間違ってきたという論であるが、この憲法草案が書かれたのは明治8年である。明治6年の政変と西南戦争の間の時期であるが、そこまで明治新政府に対する評価が一般の庶民に定まっていた時期ではないはずである。

実際、明治6年の政変以降、新政府に対する不平をもった旧士族は西郷を担ぐことになるが、明治6年の政変自体は、旧士族層の不満から直接的に起こったものではない。確か

に西郷は不平不満をもつ旧武士層に死に場所を与えるために征韓論を考え出したのだとするならば、征韓論が敗れたということは、旧武士層の行き場がなくなったので、明治6年の政変は、不満を持つ旧武士層の立場が顧みられなかったことに対する抗議だったといえなくもない。だが、この視点からいえば、ここで対象としている神田の「西南戦争は民権思想から影響を受けた」論は否定され、川寄らの「西南戦争は武断派、侵略論者の既得権益確保戦争」論を補強する論となる。だが、実際には、どちらの側に立って論を展開するにしても、それほど、事態は単純なものではなかったはずである。

筆者は、竹下弥平は理想を抱いてはいたが、そこまで明治新政府に批判的だったとも考えていない。自由民権思想側であったことは確かだが、これまでに検討してきた論者のような対立的な視点で明治新政府を見ていたかどうかまでは断定のしようがないと考えている。ましてや、「封建の極北」（後に紹介する久米による言葉）で民主主義思想を抱いて、政府を批判的に見ていたなどということは、殆ど考えられないことである。それどころか文化面、思想面、学術面においては、やっと明治6年に明六社が設立され、一般人への啓蒙の始まった時期である。竹下弥平はこの啓蒙主義運動とも言える文明開化の影響を受けて、新しい社会の構想を考えていた一人の青年であって、強烈なイデオロギストではなかったと考えるのが自然であろう。

また、この「国家を超えた人類の普遍的な理想としての自由之理を強調」というような表現は、鼯鼠の引き倒しの感があるのではなかろうか。竹下弥平憲法草案は、理想の国家を竹下弥平が考えたもので、国家否定ではない。こういうのは、典型的な後付けの解釈であると共に自分の理想から過去の人物を極度に自由に解釈しすぎている例だということを指摘したい。

一方、神田は西郷と私学校に対しては肯定的な評価をしている。それは神田の「ところで、西郷が明治6年の政変によって下野して、鹿児島出身の多くの下士官が西郷とともに職を辞して、鹿児島に帰ってきて、私学校をつくって新しい世づくりを鹿児島からはじめようとした。このことを当時の鹿児島の状況からどう考えるのか。明治7年6月には、私学校がつくられ、また、章典学校として、明治8年（1875年）4月には西郷と大山県冷との交渉で確保した荒蕪地に、桐野利明が指導し、二宮尊徳の報徳思想から学ぶ吉野開墾社がつくられた。これは、下級士族が自立していくための開拓のための学びである」という文章からも読みとれる。

神田は、私学校を目の敵のように書いている川寄とは全く違って、西郷及び私学校に好意的な視点を持っている。この論は川寄のような、西郷を敵視し、軍国主義の祖とする考えとは異なる。ここでは、神田は川寄の流れとは別であることを確認しておこう。

9) 水野公寿「竹下弥平憲法草案をめぐって二、三のこと」

これは、熊本県の民間の史家水野が書いたエッセイである。次に見る久米が報告した第1回鹿児島近代民衆史研究会で配布された。次に見る久米の報告の前の研究会での久米の報告への感想。本章の最初の部分で紹介したように、竹下憲法草案が世に出るまでの経緯について述べられている。

その後は、久米が平成26年9月に行った報告の感想などが書いてある。水野にも当然ながら、誰が竹下弥平なのかは分かっていない。久米の報告を聞いて、水野は、久米が「竹

下(正しくは松元)弥一郎武元を有力と考えていると思われる」と述べている。「自由之理」はJ・Sミルの『自由論』の影響だろうかと言っている。このエッセイは特段、新しいことが書かれているというわけではない。

10) 久米雅章「竹下弥平憲法草案について—西南戦争従軍者の一人か?—」

これは、研究会での報告資料である。久米は、長年にわたり「竹下弥平」を特定しようとしてきた人物。高校社会科教諭。前述した川寄と一緒に鹿児島県歴史教育者協議会始良・伊佐地区サークル編で『鹿児島近代社会運動史』を出している。久米はこの報告の中で、「竹下弥平」を「竹下次郎衛門」と考えてきたが、もしかすると、それは違って「松元弥一郎武元」ではないと考え始めていると言っている。しかし、この時点で久米は、完全に「松元弥一郎武元」を「竹下弥平」とは認定しておらず、「もう一人の弥平」という立場で終わっている。

久米は、この報告の「竹下弥平憲法草案の内容」で「…封建の極北であるといわれる鹿児島の地で当時してみればきわめて民主的な憲法草案として…」と述べているが、出身が鹿児島であっても、東京に行って最新の思想を学び、そこで思索してきた人物なら、「草案」にあるような考え方をもって全く不思議なことではない。

久米は、「封建の極北であるといわれる鹿児島の地」と述べている。確かに、今も鹿児島は保守地盤が強く、また薩摩は家父長的な風土であり、武士が非常に威張っていた地域であることは確かではある。今現在でもこのような気風は確かにある。だが、一面においては、当時は維新政府の担い手を輩出した最も「革新的」で「進取の気風」に富んだ、また先進的な技術をもった地域でもあった。所詮、その担い手は武士に限られていたのだから、維新が起こったからといって、封建的な地ではなかったことの証明にはならない、とこれらの側の論者は反論するだろうが、それにしても「封建の極北であるといわれる鹿児島の地」という表現は、ある種のイデオロギーを全面的に表明しているものとしか考えられない。

後に検討するが、竹下弥平は、当時の明六社系の「啓蒙主義者」から多大な影響を受けていることは確かであり、当時は、戦後的なる意味での「民主主義」などという概念はなかった。そもそも順番からいって、明治政府成立があり、その後に自由民権運動が起こる。これには様々な流れがあったものの、この運動の結果、議会開設へと至る。さらに先になって、時代が変わった後に、大正デモクラシーと呼ばれる一連の思想運動が起こる。この運動は思想のみならず、文芸や映画など大衆的な文化とともに広がった。その中には社会主義や自由主義思想の普及を目指す一団もいた。同じ大正デモクラシーでも、いくつかの思想的な潮流が同時に並存していた。

このような順番で日本の近代史は展開した。つまりは、この時期(明治の草創期)には、「封建主義」、「国家主義」、「軍国主義」対「民主主義」の対立などまだ人々の間に概念としても登場していなかったのである。戦後に使われている「軍国主義」などという言葉もなかったであろう。確かに「富国強兵」は明治政府のスローガンだったが、このスローガンに対して、明治国家の草創期に「富国強兵は軍国主義だからいけない。我々は、平和主義で行こう」といった思想家や庶民がいただろうか。こんな対立があったように考えるのは、後付けの理屈に過ぎない。当時の「啓蒙主義者」の影響を受けた一人であったと思わ

れる竹下弥平を、戦後民主主義の先駆者と位置付けるのは、かなり無理のある解釈のように考えざるを得ない。

そもそも、「啓蒙主義」とは「蒙を開く」というだから、いわば、上からの近代化と親和性がある。また、上からではなくても、「民主主義」とは何の関係もない。民主主義思想自体が珍しかった時代なので、民主主義思想も広義の啓蒙思想に包含されていたとしても、これは当然のことであるが、この論考で検討してきた人々には、殆どその視点がな

い。竹下弥平憲法草案の中身は、議会の開設が提案されているからといって、戦後的な「民主主義」とは似て非なるものである。時代背景を理解せずに、今の自分たちの政治的な立場、思想から「自分たちの先祖が竹下弥平」だとしていたい気持ちも分からなくもないが、やはりこれはかなり無理のありすぎる解釈という他はないだろう。

2 節：竹下弥平に関する先行研究の類型化

1) 竹下弥平に戦後民主主義思想の源流をみる論

1-1：自由民権運動にすら批判的な論

このように見てくると、竹下弥平についての評価もいつくかに分かれていることが理解できる。大方は同じような評価ではあるが、微妙な違いがあるので、本節では類型化しておきたい。

まず、典型的な竹下弥平の評価は、「こんな封建的な鹿児島に先進的な民主主義思想の人物がいた」というタイプの議論である。代表的な論者は川寄、久米、そして雑誌記事を書いた伊地知である。この三人は殆ど、同じような思想、イデオロギーから竹下弥平を研究し、あるいは竹下弥平に迫ろうとしてきた。この人々は、大きくは同じような人々ではあるが、この人々の中にも自由民権にすら否定的なものと、自由民権派は良いが、西南戦争、西郷を評価しないものの二者がある。

自由民権運動すら批判的に見ていたのは、伊地知である。伊地知は自由民権運動の全て否定的に見ているのではなく、旧武士層が担い手だったものを「偽物」と断じている。伊地知は極めて一面的な歴史観の持ち主である。勿論、本稿で筆者も少しは理解を示したように、江戸時代までは土地を持ち、農民の上に君臨していた旧武士層の中でもより上の郷士層が、突然、明治維新で土地も仕事もなくなり、政府に反乱を起こした部分を見れば、初期の自由民権運動は（しかも特に鹿児島においては）既得権益を奪い返そうとした旧武士層の反乱に過ぎなかったと見ることも出来なくはない。このようなものの見方も充分、あり得ることは筆者も理解できる。だが、第1節で言及しておいたように、社会的に虐げられていた階層でなければ社会改革の担い手になれない、なる資格がないとでも言わんばかりの主張には筆者は違和感を覚えざるを得ない。

1-2：自由民権運動には理解があるが、西南戦争と西郷隆盛に批判的な論

川寄と久米は伊地知ほどではないものの、しかし、西南戦争と西郷隆盛に批判的であるという部分においては、同じ系列といっても良いだろう。鹿児島では今日、少数派に属すると思われるこの立場ではあるが、筆者が見聞したところでは、戦後、日本全国で、西郷が征韓論の首謀者とされていた当時は、鹿児島においても左派系の教師によって、そのような評価がなされ、授業でもそのような西郷像が広められてもいたようである。筆者は、

今の鹿児島で川寄のような西郷隆盛観を持っている人々がまだいるのかと不思議な気がしたのだが、筆者の知り合いである、昨年還暦を迎えたという酒造会社の経営者は、子どもの頃、左派的な教師から、西郷隆盛を征韓論の首謀者として教えられたといっておられた。

また、筆者の所属する鹿児島大学稲盛アカデミーのアカデミー長である吉田浩己氏（72歳）とも、この話をしたところ、自分が学生の時にも西郷隆盛を征韓論の首謀者として批判的に教える先生の方が多く、当時の鹿児島大学教養学部である一人の教授だけが、西郷隆盛は濡れ衣を着せられたとの西郷擁護の話をしており、それが今でも強く記憶に残っているといっておられた。当時は旧制七高の教員から新制鹿児島大学の教授となっていた人も多かったらしいが、大半の教授は、西郷は西南戦争の首謀者で軍国主義の祖であるという立場を取っていたらしいのである。とすると、現在の鹿児島では考えられないことであるが、戦後のある時期までは、鹿児島全体では西郷は尊敬されていたとしても、教育界においては、左派的志向をもつ教員によって、かなりの批判的評価もなされていたという事実があったようだ。

とすれば、むしろ久米が書いている「鹿児島では西南戦争の首謀者としての西郷隆盛の存在はややもすれば西南戦争擁護論で語られている感は否めない」というのは逆で、かつては西郷への批判も教育界（の一部）では公然となされており、その後、西郷批判はなくなってきたというのが実際の姿かもしれない。西郷批判が公然となされていたのか、あるいは、西郷反対派が教育現場には多かった時ですら、西郷擁護派の方が鹿児島全体としては多かったのか、そこまでは分からない。おそらくはいつの時代も圧倒的に西郷擁護派が多かったと考えられる。そして、教育現場の一部、特に社会科教師の一部だけが強烈な西郷批判論を教壇で展開したのだろう。

鶴丸（明人）の述懐によれば、どの時代も鹿児島では西郷隆盛を尊敬する人が圧倒的多数派ではあったようだ。これが常識的、平均的な感覚だろう。だが、今、紹介した現在、還暦の企業経営者、70歳を過ぎた吉田氏が自分自身の受けた教育を思い出し、（鹿児島においてすら）、自分の子ども時代（酒造会社社長）、学生時代（吉田氏）には、西郷批判派の方の教師の方が多かったということを述懐しているということは、西郷を批判的に評価する勢力も一定数、鹿児島にもいたということが推測される。

なぜ、こういうことが起こっていたのだろうか。ここから先は筆者の推測であるが、戦後の日本人全体の意識と論壇や知識人の意識の比率は全く違っていたようなことが、鹿児島でも起こっていたからかもしれない。非常に簡単に割り切った書き方をすれば、戦後の日本人は選挙の結果を見ても－55年体制時－常に保守政党の支持者が3分の2弱程度、革新勢力の支持者は3分の1強程度だった。

だが、一方、その3分の1の勢力は実際の数以上の社会的な影響力をもったことも確かだった。それは学者・文化人の大半が左翼だったからである。人口全体からすれば圧倒的な少数派に過ぎない「知識人」の大半は左翼だったのだから、社会的な影響力はかなり強かった。世にいわれるオピニオンリーダーはその殆どが、（広義の意味での）左翼陣営であった。この結果、左派的な言動は、実際に左派的な思想を持つ人の人口全体における比率以上に大きな影響力を持った。

従って、イデオロギーで物事を見ない人々－これは甚だ素朴な意味での庶民といっても

いいだろう—は西郷を相変わらず敬愛していたにも関わらず、西郷を征韓論者として、侵略戦争の思想的先導者であったと位置付けたい一群の人々が、一定数、鹿児島にもいたということなのであろう。

と考えるなら、何故、今になっても川寄（川寄は故人であるが）のような人が鹿児島にもいるのかが多少、理解できるように思う。このように考えれば、このような人々から崇められてきた竹下弥平は、「アジア侵略戦争の首謀者西郷隆盛とその一派に全てが支配されていた鹿児島で、このような『民主的』な人物がいたとは」という驚きをもって受け止められ、左派の人々に感動を与えたことは容易に想像がつく。だが、本稿で明らかにするように—その種の人には残念ながら—実際の竹下弥平は、西郷の知己を得て、さらに西郷から期待されて「書」ももらっていたのである。後付けの戦後イデオロギーで西郷や竹下弥平を自分勝手に評価することは、無理があるのではないだろうか。

鹿児島においてすら西郷への批判派は教育現場を中心に一定数いたのではないかという推測をしたが、そのような状況にも、全国的に西郷の名誉回復がなされるとともに、また変化が訪れたのであろう。鶴丸（明人）の述懐では、いつでも西郷を尊敬する人が多数派という状況だったという。そのような状況の中で、一層、鹿児島では西郷を尊敬する人、好意的に評価する人がある時期以降増え、最早、絶対的多数といっても良いような状況になってくる中で、抵抗していたのが川寄とその流れを汲む人々だったというのが実際のところなのであろうか。

2) 自由民権運動に竹下弥平が影響を与えたとする論

この伊地知を代表者として、似ているものに川寄の流れがあるのに対し、「竹下弥平が西南戦争、西郷の民権派に影響を与えた」のではないかという論がある。神田の論である。神田の論は、西南戦争は自由民権運動を求める戦いであり、さらにいえば「自由之理」を求めた戦いであった。ロマンにあふれる類推ではあるが、このような見方は、筆者は極論だと考える。当然ながら、西南戦争には多くの人に従軍した。また、参加者の全てといっても良い旧武士層の中でも郷土層が中心であった。つまり、農民や貧困な階層のものは西南戦争に兵隊としても参加していない。

筆者も意外だったのだが、西南戦争には農民は殆ど従軍していないようだ。これも、左翼的な人のいう「戦争になれば、一番弱いものが兵隊に取られる」という論とは合わず、当時の鹿児島で西郷軍に兵隊としてでも加わることができたのは、名誉なことだったのである。これも鶴丸（明人）によれば、『溝辺史』（現在の霧島市溝辺の地域の歴史をまとめたもの）の中に60名が立派な出で立ちで西郷軍に参加したとの記述があり、鶴丸が先祖以来住む清水地区（現在の霧島市国分清水）からも近衛兵が出ており、西郷は誰からも敬愛されていたという。西南戦争前夜の様子は、弱い立場の人間が無理やり徴用された後の戦争とは大分、事情が違ったことが分かる。

しかし、このように西南戦争に参加した人々は、先に紹介した伊地知などから見れば、「所詮は偽物」の自由民権の担い手である。つまり、幕末までは比較的（これは、あくまでも土地を持たない旧武士層や小作農に比較してという意味。経済的にそこまで恵まれていたかどうかは一概にはいえない）恵まれた層の人びとであった。

西南戦争に兵隊として参加した人の中には、大政奉還から明治6年の政変までの時期

と、明治6年の政変から明治10年の西南戦争勃発の間までの合計10年間、西洋の最新の思想に触れた者がいたかもしれない。維新と共に、東京遊学の機会を得て、短い東京遊学生活の間に、西欧の思想に触れ、そして、明治6年の政変以後、鹿児島に戻って来て、西南戦争では、西郷軍に参加したという経歴の者も竹下弥平以外にも、いたかもしれない。いなかったとは断定できないであろう。

だが、仮にそうだと考えても、筆者は神田の主張するような「竹下弥平が西南戦争、西郷の民権派に影響を与えた」論は極論であろうと考える。それは何故かといえば、知られているように西南戦争の勃発は、そもそも私学校の生徒の暴発によるものであったからである。そして、私学校の生徒が暴発したのは、大久保（率いる政府）の西郷に対するやり方に反発を強めていったからである。私学校はよく知られるように西郷党であったが、この私学校で竹下弥平が今でいうところの専任講師や教授のように、毎日、西洋の政治思想を講義していたならいざ知らず、そんなことは実際にはしていなかった。私学校はむしろ、軍事教練などに力を入れており（開墾にも力を入れていたが）、自覚的に「自由民権の担い手」などとは思っている生徒などはいなかったのである。そう考えても竹下弥平が西郷党の若者に思想的影響を与えたとの論はやはり極論であろう。

仮に鹿児島に戻った竹下弥平がその後、私学校に入って、しかも生徒としてではなく今でいう専任講師のような指導的立場で入っていたなら、思想的・精神的指導者として西郷派に影響を与えたかもしれないという推測も成り立つ。だが、竹下弥平は西郷の知己を得てはいるものの、私学校の生徒にまでは影響力を持てはいなかった。仮に『朝野新聞』を、西郷はじめ、私学校の幹部クラスの人物は読んでおり、その思想を理解していたとしても、『朝野新聞』で竹下弥平が主張した憲法を制定するという主張を掲げて、私学校の生徒が暴発したものではなかった以上、例えわずかに竹下弥平の思想や主張を知る人がいたとしても、その影響力は極めて限定的なものだったとしか考えられない。

従って、神田がいうような西南戦争は士族民権の闘い、西南戦争の西郷軍の思想的バックグラウンドは、J・Sミルの自由論で、ミルの思想に感化された自由を求める人々が、大久保の政府に立ち向かったなどというのは、全く根拠のない話に過ぎない。勿論、先に述べたように、個々には西南戦争の従軍者にも様々な人がいたのであろうし、旧武士層の中でも郷土層が中心だったのだから、神田がいうように、個人的には西南戦争を自由のための民衆の解放のための戦争と位置付けていた人も、ごく少数はいたのかもしれない。推測は自由だが、最終的には個々人の心の内面のことまでは分からない。

ここで確認しておきたいのは、組織としての西郷軍全体は、そのようなJ・Sミルの自由論を掲げて西南戦争を闘ったわけではなかったという素朴で常識的な事実である。そもそも、西郷は兵を挙げた前、政府に送った文の中の一節で「政府に尋問の筋これあり」といっているのである。内容的には「暇を頂いて帰省していましたが、政府に聞きたいことがあるので上京します。大勢でいきますが、人民が動揺しないように気をつけてください」という意味であり、政治の仕方について質しに行くということであった。イギリス流の自由主義思想から反政府の反乱を起こしたのではない。西郷は確かに民衆の側にも立っており「新政厚德」の旗を掲げていたが、自由民権（士族民権）の本当の意味合いは、士族の既得権回復だったという見方からすれば、西南戦争は封建的な秩序回復のための闘いの側面もあったのである。

田中惣五郎『西郷隆盛』（1958年・吉川弘文館）によると、この時期、日本が一応半封建制に変わったなか、鹿児島だけは8割封建制だったとある。こう書くと、何となく伊地知の「所詮は偽物」論を擁護することになりそうだが、西郷自身の思想と理想がどうであれ、西郷を担ぎ出した人々は、明治新政府の政治についていけない旧士族層だったことは間違いないのだから、西南戦争とJ・Sミルの自由論など、全く何の関係もないことだけは確かだろう。別の県の人郷士が『自由之理』を読み民権運動家になったことはあったのだが⁴、そのことをもってして西南戦争も『自由之理』に触発された人々の闘いだったということの証拠にはならない。

西南戦争と士族民権には、思想的にも人間的にも重なりがあったとしても、旧士族層にとっての民権運動は、失われたものを取り返すための闘いの意味も含んでおり、その視点を強調すれば、西郷派は保守反動であって、（一般）民衆の解放とは関係ない。むしろ逆のベクトルである。そして、間違いなくその勢力に西郷は担がれたのである。したがって、鹿児島における西南戦争をどう見るかは本当に難しい。どちらから見るかで評価も変わる。一方においては「失われたものを取り戻すための武士の反乱」であり封建時代を懐かしむ勢力に支持された側面もあったのだから、農民や貧民による民権運動しか認めない人にとっては西郷を担いだ人々は旧時代の支配階級の末端に位置する人々であり、西南戦争は征韓論に期待したが期待を裏切られた人々の成れの果ての姿である（例：伊地知論）。だが、一方においては、大久保率いる政府への闘いで反政府の内戦であったことから、新しい世になっても生活が苦しいままの人々の解放を目指す「民権運動」的な側面があったことも確かだろう。民権運動も一色ではないので難しいところである。だが、西郷軍の旗印が英国流自由主義（『自由之理』）だったということはなかったと思われる。

先に川寄に言及したが、川寄も少し微妙で竹下弥平憲法草案は「西郷派に影響を与えたのかもしれない」といってはいる。これは『朝日新聞』紙上のインタビューでの発言である。少し奇妙な感じがするのだが、川寄のような立場の人間からすれば、できれば竹下弥平は西郷と無縁であって欲しいし、西南戦争にも行って欲しくないのだが（川寄は私学校と西郷派に批判的であるからこう考える）、その時の鹿児島の雰囲気でも、竹下弥平が西南戦争に参加していたのなら、せめて、西郷派には「民主主義」の影響を与えて欲しいというものだろう。そして西南戦争には、神田がいうような自由論を掲げた戦争の側面も部分的にはあって欲しかったという、期待があるのだろう。

川寄のようなイデオロギー的な立場の人からすれば、こういう期待を持たないことには、自分たちが崇拝する「民主主義思想の先祖」である竹下弥平が、「アジア侵略と軍国主義の先祖」である西郷隆盛と一緒に闘って死んだなどということをどう理解して良いか分からなくなるのであろう。しかし、実はこの辺の議論も複雑である。一筋縄ではいかない。鈴木淳『維新の構想と展開』（講談社・2002年）によれば「征韓から民権へ」という流れが当時はあったようであり⁵、この流れを今日風に解釈すれば「征韓」はアジア侵略

4 鈴木淳『維新の構想と展開』（講談社・2002年）によれば、例えば福島県会議長を務めた河野広中という人物は、廃藩置県後に福島で戸長・区長を務めた人物だが、一方で中村正直訳の『自由之理』を読み民権への認識を深め民権結社を作った。河野広中は後に東北における自由民権の組織作りに努めた。明治12年には土佐で板垣ら立志者との連携も確認している。

5 鈴木淳『維新の構想と展開』（講談社・2002年）p. 146-148 参照。

の最初の形、「民権」は民主主義を求める運動の開始というふうに単純に考えてしまいがちになるのだが、「征韓」と「民権」当時は紆余曲折を経つつも一つの事象の延長線上に展開していったのであった。維新によって行き場所のなくなった旧士族は、西郷の本心がどうであったかに関わらず、最初は「征韓」を求めたが、それが実現できなくなったことによってエネルギーが民権運動へ向かって行ったということであろう。

竹下弥平は、本稿の第2章で明らかにするように、西南戦争に従軍し、戦死したのだが、こんな事実は、川俣のような立場の人は、そのまま認めたくないことなので、せめて「西郷派に影響を与えたのかもしれない」ということであって欲しいのだろう。

この後に言及するが、本稿では、竹下弥平を明六社から影響を受けた、「啓蒙主義」の系列の人物と評価している。さらに、竹下弥平は、現代の左派の嫌う儒学（漢籍・儒教）についても理解の深い人物であったと思われる。これはこの後に譲るが、今日の護憲派の「民主主義思想」の先祖—この派は、西郷を大陸侵略の祖先と位置付けている傾向がある—との見方は当人たちがそう解釈するのは勝手だが、自分たちにのみ都合のよい解釈であるといわざるを得ない。

この論考の目的は、竹下弥平が「松元弥一郎武元」であったという事実を世に公表することだが、同時に偏った人々によって一方的に自分たちのヒーローにされてきた竹下弥平評価とイメージの訂正を求めることも目的なので、西郷との関係、さらには、今日でいうところの、また戦後民主主義者がいうところの「民主主義思想」なるものが、当時はなく、竹下弥平の思想の出所は、明六社系列の啓蒙主義だということについても論じていきたい。

確かに元老院によって議論され、最終的に伊藤博文の責任によって起草された明治憲法は、天皇大権を認め過ぎたので、大正デモクラシーの時代になるまで、日本の民主化は遅れたとの議論も成り立つのかもしれない。可能性としては、最初の憲法で議院内閣制を採用することもあり得ないことではなかった。実際、憲法制定時に最も大きな問題となったのは議会の権力をどの程度にするかであった。事実、この時期に政府内では大隈重信ら、在野では福沢諭吉らが、イギリスを模範とする、議会の権力が強く、議会で多数を占めた政党が組閣する議院内閣制を原則とする憲法を早期に制定すべきと主張していた。そして、これに対する漸進論の代表が岩倉具視だった⁶。

実際には自由民権運動が盛り上がっていたにも関わらず、明治憲法は行政を議会から切り離し議院内閣制を採らなかった。もしも、私擬憲法の中のこの竹下弥平案が採用されていればその後の日本はどうなっていたかというような、このような考え方についても、筆者も全く理解しないわけではない。だが、「竹下弥平憲法か実際の大日本帝国憲法か」という論の立て方はおかしく、私議憲法で竹下弥平が提案していたような議論は、明治9年から憲法の起草が始まっていた時期には、すでに政府部内でも民間の思想家の間でも行われていたのである。

また、今から近代国家の制度を整えて行こうという段階においては、民権思想が盛り上がっていたからといって「反国家主義」という思想などはなかったと考えられるし、今の視点から、竹下弥平は国家を超えた、人類の普遍的な自由之理を強調していたなどというのは、それは後から見て「そうともいえる」というだけである。

6 鈴木淳『維新の構想と展開』（講談社・2002年）p. 298－299 参照。

3節：啓蒙主義と竹下弥平―明六社の影響―

1) 竹下弥平の憲法草案に登場する人物

前節では、竹下弥平をめぐる先行研究の歴史を紹介し、筆者なりの評価も加えた。さらに竹下弥平を論じてきた人々の間でもいくつかの違いはあることを確認した。そのいくつかの違いも大きな違いであるともいえるのだが、共通点は竹下弥平を「民主主義思想の祖」としている部分だ。いわく、議会中心主義、シビリアンコントロール、官僚政治排除、軍人政治排除、三権分立。これらの論者の主張は理解できないことはない。

確かに太政大臣（首相）は左右両院の選挙で選ぶ（第5条）と書いているので、議院内閣制を思わせる。だが、太政大臣は左右両院のどちらかに議席を有する必要があるとまでは書いていない。しかも、この時点での左右両院の議員はまだ民選（撰）議員ではない。後に選挙法を定めるべきことを竹下弥平は提案しているので（第3条）竹下弥平が民選（撰）議院の設立を考えていたことは間違いのないところであるがこの草案をもってして「議院内閣制」が明記されていたとまでいうのはやや言いすぎである。

しかも、第8条の後には、「民選といえども、官選といえども、名目如何に拘らず唯、その実行を要するのみ」との趣旨のことも書いているので、そこまで強く民選（撰）議院の設立の主張はなかったのかもしれない。とにかく議会を設立することが政府の急務と書かれているが、竹下弥平が議会について、どのように考えていたのかは分からない。

第8条はで行政官、司法官、武官を立法権の下においているのは注目すべきことであるが、肝心の立法権を担う左右両院については、上述したように少し曖昧である。したがって、議院内閣制、議会中心主義、文民統制の萌芽をここに読みとることまではできても、先にみた論者のような評価は、やや鼻眞の引き倒しの感をまぬがれない。

確かに、あたかも戦後日本国憲法を先取りしたような内容を見れば、現在の護憲派の人びとが驚き、そして戦前の悲惨な歴史を知るものからしても、もしも、明治期に実際の「大日本国帝国憲法」ではなく、「竹下弥平憲法」が明治国家の憲法になっていたらと考えることは、自然なことだろう。筆者自身も戦前の大日本帝国憲法よりも、戦後の日本国憲法の内容の方が、遙かに優れたものであると考えている。ここまでの章でかなり強い筆致で左派的志向を持つ人々の竹下弥平評価を批判してはきたものの、筆者自身も、戦後憲法の内容が極めて優れたものだとは考えている。

だが、本稿での問題意識は、本当に竹下弥平は、前節で論じてきた人々のというような意味での「民主主義思想の先祖」なのだろうかということなのである。さらに神田のいうように竹下弥平は、「J・Sミル風の自由主義思想の先祖」なのだろうか。そんな風なロマンに満ちた解釈も全部までが誤っているとまではいわないが、本章では、これまであまり正面から検討されてきたとは思われない竹下弥平の思想そのものについて検討したい。

竹下弥平が大きな影響を受けた思想は「啓蒙主義」であろうと筆者（ら）は考えている。但し啓蒙思想も一種類ではない。いわゆる「啓蒙思想」には様々な思想が入っており、確かに今日のような戦後的な視点の民主主義思想、自由主義思想の先祖と見なすことのできる思想も入っているのだが、後付けの視点で竹下弥平を「民主主義の先祖」と位置付けるよりは、まずこの時代がどういう時代だったかを考える方が、余程、重要なことであろう。

私擬憲法の第3条に左院の議員について述べられた部分があるが、竹下弥平は左院につ

いて、定員を100人として、定員の3分の1は現今各省奏任官四等以下七等、判任官八等より十等のもので、「その主務に練達諳熟して且才識ある者」、3分の1は当時の有識者を挙げている。残りの3分の1は府県知事などを挙げている。

ここで竹下弥平が挙げている有識者は「福澤、福地、箕作、中村等、新聞家成島、栗本等」である。これは、福澤諭吉、福地源一郎、箕作秋坪もしくは箕作麟祥、中村正直、成島柳北、栗本鋤雲のことと思われる。ここで竹下弥平の挙げている箕作が秋坪を指すのか麟祥を指すのかは分からない。二人とも啓蒙思想家である。秋坪が洋学者、教育者であり、当時、福澤の慶応義塾と双壁と並び称される洋学塾の三叉学舎を開いていたのに対し、麟祥は官僚としての顔の方が大きな比重を占めていた。

「箕作」は、官吏ではなく純粋な思想家、洋学者、教育者だった秋坪を指しているのではないかとも思われるが、麟祥は日本で初めて、「権利」、「義務」という言葉を使い、日本における法律学の元祖とも評されていることを考えれば、憲法草案を書いた竹下弥平のことだから、当然ながら、国民の権利や義務についても関心をもってもいたとも考えられ、この「箕作」は麟祥を指しているのかもしれないとも推測できる。麟祥の弟子からは中江兆民も出ている。

2) 明六社と『明六雑誌』

竹下弥平は6人の人物を挙げているが、6人のうち3人までが明六社の人物である。福澤諭吉、箕作秋坪もしくは箕作麟祥、中村正直である。箕作はもしかすると秋坪と麟祥の2人を意識していたのかもしれない。箕作秋坪と麟祥は共に明六社の人物であるから、「箕作」を仮に2人を指すと考えれば、4人までが明六社の人物である。どちらかを指していたのだとすれば、どちらかは意識していなかったことになるが、2人とも重要な人物なので、竹下弥平のいう「箕作」がどちらなのかはにわかに判断がつかない。

そして、新聞家として挙げられている2人の人物、すなわち成島柳北、栗本鋤雲は当時の代表的なジャーナリストであった。そして、もう一人名前の挙げられている福地源一郎もジャーナリストである。この6人（箕作がどちらを指すのかははっきり分からないので、2人を対象とすると7人）はいずれも啓蒙思想家と当時の代表的なジャーナリストである。そして、この啓蒙思想家はいずれも明六社の人物である。憲法草案の中身から、明らかに竹下弥平が明六社と当時の代表的なジャーナリストからの思想的な影響を受けていたことが理解できる。

そこで、ここでは一般的な明六社の説明と竹下弥平が憲法草案で挙げている人物の思想を見ておきたい。明六社は、明治6年にアメリカから帰って来た森有礼が西村茂樹に相談して設立した。よく知られているように名前は設立された年に因んでいる。明六社は西洋のように知識人が集まって親交を深めつつ、民衆を啓蒙する目的で設立された。当時は西洋の技術や学問、制度をお雇い外国人から教えてもらう形で明治維新を進めていたが、明治も維新から6年も経つと、そのような枠組みをただ受け入れるだけではなく、人間そのものを変革することを目指す人々が出てきた。これらの人びとの思想は啓蒙思想と呼ばれる。啓蒙思想家（啓蒙家）は、日本が西洋のような文明国になるには、民衆を文明国にふさわしい国民にしていかななくてはならないという使命感をもっており、彼らが集まったのが明六社だった。

明六社には、森、西村に誘われた津田真道、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、福澤諭吉、杉亨二、箕作麟祥などが参加した。これらの人びとは当時の日本を代表する知識人だった。これらの人びとには、いくつかの共通点があったといわれる。一つは多くが下級武士、庶民などの下層出身者であったこと、2つ目が明治となる以前から洋学者となり、幕府の開成所などに召し抱えられていたことである。そして、そのことと関連して幕末か明治に洋行の経験があり、福澤以外は明治以降に維新政府の官僚として働いていた共通点もある。明六社が自分たちの主張を広げるために行ったのは定例演説会と雑誌の発行だった。この両者は不可分の関係にあったといわれる。定例演説会で意見交換をして、それを基として『明六雑誌』が出されていたからであった。この「演説」という言葉も、福澤がスピーチという言葉にあてた訳語であるのはよく知られているところである。

その『明六雑誌』は、明六社が結成されて数カ月後に刊行された。雑誌には当時の日本人を啓蒙して行くという大目標はあったが、厳密な編集方針はなかったという。また『明六雑誌』は特定の意見を発信するよりも、様々な問題を提起していくという性質のものだった。従って、執筆者でも様々な立場のものがいた。扱う範囲は極めて広範であった。哲学や信教の自由などの宗教論、社会問題、経済問題などが扱われていた。

『明六雑誌』が発行されていた時期は、ちょうど時代的に自由民権運動の初期と重なっている。明治7年（1874年）に板垣退助が「民撰議院設立建白書」を政府に提出したが、これをめぐって明六社でも議論がなされた。先に「征韓」から「民権」へとということに触れたが、まさに板垣が「民撰議院設立建白書」を出したのは征韓論争の明治6年政変の翌年である。板垣は征韓論で下野した後、自由民権運動に力を入れ「民撰議院設立建白書」を建白するに至る。竹下弥平の私擬憲法草案も、板垣退助の「民撰議院設立建白書」に呼応して出された私擬憲法私案の一つであったとのことであるから、竹下弥平が、この時期に『明六雑誌』を読んでいたことは十分に考えられることである。

それどころか、ここで論じるように、竹下弥平の憲法草案には、明六社の同人が3人（4人）も入っていることから、筆者は竹下弥平が極めて明六社から影響を受けていたと考える。東京遊学中に竹下弥平は明六社の演説会を聴きに行っていた可能性も高いと思われる。先に見たように、明六社においては演説会の実施と雑誌の発行は不可分な関係にあったことから、竹下弥平は演説会にも熱心に参加し、雑誌も購読していたかもしれないと推測することが可能である。

明六社内では、明治7年（1874年）板垣退助の「民撰議院設立建白書」が出されたときに、二つの立場があった。一つは加藤弘之の民撰議院設立時期尚早論であった。加藤は民撰議院には反対しないが、国民のレベルがまだそこまでには達していないので、まずは啓蒙が先だと説いた。この論には森有礼、西周、中村正直らが賛同したという。一方、西村茂樹は、むしろ議院を設立することで、国民を文明に導くべきだとの論を展開した。これには、津田や福澤が賛成したという。

これには、もう少し細かく分けた見方もある。北田耕也の「「明六社」啓蒙思想について—明治社会教育思想の源流—」という論文では、議院の設立については当時、明六社内部に3つの立場があったとされている。急進論（津田）、漸進論（西、加藤、阪谷、福沢、中村、西村ら）、否定論（神田）である。先に、加藤、森、西村、中村が時期尚早論、西村、津田、福沢が議会設立は時期尚早ではないとの論との一般的な分類を紹介したが、北田の

分類では津田が急進論であり、あとはニュアンスが違うものの、全て漸進論である。漸進論にも様々な開きがあったのが実際のところであった。

北田は「漸進論といったが、一括してそう呼ぶのは無理かもしれぬと思われるほど各人の説は個性的で、漸進の度合い、手立てにはかなりの開きがあった」と述べている。代表的な論は以下の通りであったらしい。西は「設立建白書」の矛盾を指摘しているとのことである。建白書が「人民の知識を開き天下と憂楽を共にする気象を興すために民撰議院を開く」としていることについて、「気象」は学識ある人に期待されるのであり、これは教育の仕事であるのに、政治の世界に求めるといのは手段が違うのではないかと指摘しているとのことである。

加藤は急進論に歯止めをかけようとしたという漸進論であったらしい。中村も漸進論で中村の論は、「民撰議院が民心一新の一助となるのは明白だが、それはしかし人民の性質を改造する主要な力にはならないので、芸術（科学技術）、教法（宗教）を盛んにして、特に教法を芸術の感化の及ばないところを助けなければならない」とのことであったらしい。中村も漸進論であったのだ。確かに議会を創設することは民衆のレベルを上げることにはなるが、これだけでは民衆のレベルを上げることは無理であり、科学技術や宗教を盛んにしなければならないというのは納得の行く論ではある。政治参加だけは保証しても、政治参加する人民そのものの質を上げるのは、政治参加への権利を与えることだけでは不十分なので、他の部門の充実が必要という主張のようであった。

当然、竹下弥平はこれらの明六社内部での議論も知っていたのではないだろうか。憲法草案に明六社の同人を左院の議員として相応しい人物として書きこんでいるくらいだから、竹下弥平は明六社の中での議論を熟知していたと考えられる。また、議論の内容を知っただけではなく、自分の政論も持っていたのであろう。竹下弥平自身の憲法草案は、「民会」を入れており「立法権ヲ議院ニ悉皆委任スベシ」と述べていることから、議院設立時期尚早論ではなかった。そして、当時あった右院と左院を改めて、新たに左右両院を立てることを提案している（第二条）。竹下弥平の憲法草案は明治8年（1875年）に出されている。『明六雑誌』が出され始めたのは、1874年（明治7年）である。

当時の情勢と竹下弥平の動きを時系列的に整理すれば以下ようになる。また、本稿の最初の部分で紹介した他の私擬憲法草案の発表された時期も年表に重ねてみた。

明治6年（1873年）

- ・明六社が設立される。
- ・明治6年の政変（征韓論争）が起こる。西郷、江藤、板垣などが下野。

国会議院規則	1873.01～06	左院	
大日本会議上院創立案	1873	西村茂樹	佐倉藩士
帝号大日本国政典	1873	青木周蔵	政府官僚

明治7年（1874年）

- ・板垣退助の「民撰議院設立建白書」が出される（1月）。

- ・『明六雑誌』が発刊される。
- ・竹下弥平、東京へ出たと思われる（8月）。
- ・『明六雑誌』（第4号）に加藤弘之「民撰議院不可立の論」が掲載される。
- ・明六社内で、早期の議会開設の是非を巡っての賛否の議論が起こる。
- ・自由民権運動が盛り上がってくる。

合衆帝国構想	1874.08	窪田次郎ほか	医師
建言書〔民撰議院構想〕	1874.08	宇加地新八	山形県士族
国体議案	1874.09.14	田中正道	福岡県役人
国体新論	1874.12	加藤弘之	啓蒙学者
矢口某憲法草案（未発見）	1874頃	矢口某（変名）	

明治8年（1875年）

- ・竹下弥平憲法草案が『朝野新聞』に投稿される。
- ・明六社が解散する。

日本国憲按（第1次案）	1876.10	元老院	
日本国憲按（第2次案）		元老院	

明治9年（1876年）

- ・元老院で憲法の起草が始まる（～明治13年まで）⁷。

明治10年（1877年）

- ・西南戦争が勃発。

このように見れば、竹下弥平の憲法草案は確かに先進的なものであったが、「封建の極北であるといわれる鹿児島で当時してみればきわめて民主的な憲法草案」が書かれたことが驚きに値するというようなものではない。東京に遊学の機会か職を得た若者が明六社から何らかの方法―演説会への参加か雑誌の購読か、またはその両方か―で影響を受け、自身は民撰議院設立については、時期尚早論ではないと考える、このような憲法草案を起草したことは、それほど不思議なことではない。実際には、周囲が封建主義に留まっている環境の中で、一人目覚めたというものでもなかったのである。

また、当時の他の私擬憲法の題名と起草者を表にして年表の中に入れてみると、気づくことだが、明治6年に佐倉藩士だった西村茂樹（明六社の創設者の一人）や政府官僚の青木周蔵が私案を発表している。そして、明治7年には山形県士族や福岡県の役人も私擬憲

7 鈴木淳『維新の構想と展開』（講談社・2002年）p. 298 参照。

法を起草している。同じ明治7年にはこれまた明六社の加藤弘之も「国体新論」を出している。竹下弥平はこの明治6年から7年の議論の状況を知った上で自分の憲法草案を起草したのであろう。先に見たように「民撰議院不可立の論」を『明六雑誌』に発表した加藤弘之は「国体新論」も発表していることから、竹下弥平は、意識的に加藤の論に反対する考えをもって自分の草案を起草したのかもしれない。

また『明六雑誌』には、論説に混じって多くの翻訳が掲載されていた。雑誌には全部の156本の記事のうち、16本が翻訳あったという。そして、その翻訳のうち中村正直の翻訳が7本を占めており、ベーコン、ホッブス、スペンサーなどの思想家が紹介された。本稿の仮説では、竹下弥平は明六社と何らかの関わりを持とうとしたか、影響を受けていたことまでは間違いないというものだが、実際に竹下弥平が『明六雑誌』によって西洋思想の翻訳も読んでいたとするなら、憲法草案に西洋思想の影響が色濃く反映されていても、これは全く不思議なことではなく、むしろ自然なことだと考えられる。

『明六雑誌』は、明六社が発足してから一年後、森有礼は毎月の売れた部数は平均3205冊だと述べている。これは明治初期という時代背景を考えれば驚異的な部数だった。また『明六雑誌』の論説は各地の新聞に転載されることも多かったという。ということは、『明六雑誌』そのものの読者ではない人々で新聞は購読しているというような人々にも影響を与えていたことになる。『明六雑誌』は官吏や学生、書生、村役人、旧士族、豪農などの知識人層に読まれていた。地域でいえば東京周辺だけでなく、大阪、広島、青森など全国各地で読まれていたという。その読者の中に16歳だった植木枝盛がおり、『明六雑誌』を読んで感動した植木は高知から上京し、明六社の定例演説会に通うほどになったという。

このような読者層に読まれていた『明六雑誌』の性格と広がりを見ると、旧士族であり、維新後の明治7年に東京に遊学もしくは職を得る機会を得た竹下弥平が、『明六雑誌』を読んでいなかったとは考えられない。仮に直接、毎月までは読んでいなかったとしても、その「空気」には触れていただろうし、『明六雑誌』の影響を受けた新聞を読んでいた可能性も高いと考えられる。そうでなければ、憲法草案に明六社の思想家と新聞家の名前を挙げることはできなかっただろうし、竹下弥平は、かなり熱心な読者であり、演説会にも定期的に参加していたかもしれないと推測できるくらいである。『明六雑誌』はいわば、当時の知識人及び啓蒙された側から、徐々に啓蒙する側にまわって行った人々にとって必読の雑誌だったといつて良いだろう。

明六社はわずか2年ほどで解散し、『明六雑誌』も休刊になるのだが、これには、いくつかの理由があった。『明六雑誌』が刊行された翌年、讒謗律と新聞紙条例というメディアを統制する条例が出された。出したのは薩長藩閥政府である。具体的には雑誌や新聞を出す場合には、必ず内務省に届け出て許可を得る必要があるようになり、掲載する記事や論説にも執筆者の署名をつけることが義務づけられた。

『明六雑誌』には、自由民権の論説が掲載され、徐々に政治的性格を帯びてきた。森の立場には無理も出てきた。森はあくまでも啓蒙団体と考えていたが、森は官僚であり続けたので無理が出るのは当然だった。そして、あくまでも啓蒙や教育は民間が担うべきだと考えていた福澤とは意見が合わなくなった。福澤は徐々に明六社及び『明六雑誌』に距離を置くようになる。そして、福澤や箕作秋坪の提案で『明六雑誌』は停刊中絶となった。

さて、このように明六社も『明六雑誌』も活動期間は短かったものの、当時の知識欲旺

盛な人々には多大な影響を与えた。このように考えると、竹下弥平を評価するにあたって、封建時代の残滓の残る薩摩の大隅に奇跡的で先進的な「民主主義思想」をもった人物が住んでいたというような、本稿の最初に見てきたような評価は全く的外れであることが分かるだろう。大隅国出身の若者が、上京し遊学—または政府に職を得る—の機会を得て、日本最初の学術団体で啓蒙思想家の集まりであった明六社から大きな影響を受け、自身の考え方を固め、鹿児島に戻った後（または戻る直前）に、自身の考え方に基づく私擬憲法草案を『朝野新聞』に投稿したというのが、事実に近いところであろう。

3) 竹下弥平の憲法草案に名前の挙げた人物とその思想的立場

さて、次に竹下弥平が憲法草案で名前を挙げている人物についてみていきたい。

福澤諭吉は、蘭学者、啓蒙思想家、教育者で慶応義塾の設立者。1835年（天保5年）－1901年（明治34年）。明治六大教育家ともされる。元中津藩士である。福澤の思想は、東洋の旧弊にこだわり、西洋文明を拒むことを批判するというものだった。漢学を徹底的に批判したことでも有名である。

議会政治や自由民権運動については、イギリスの政党政治を参考にすべきとの意見をもっていた。しかし、急進的な自由民権運動には批判的であったという。日本の国権を拡張するために官民調和は持論としていたためで、急進的自由民権論者のことは、「駄民権論者」、「ヘコヲビ書生」などと呼んで軽蔑した。しかし、先に加藤弘之の論に対する論争の部分で触れたように、政府が国会を開くことには賛成していた。

福地源一郎は、ジャーナリスト、作家、劇作家、政治家。1841年（天保12年）－1906年（明治39年）。前半生は略す。維新後、明治3年に渋沢栄一の紹介で伊藤博文と会い、大蔵省に入る。伊藤とともにアメリカに渡り会計法などを調査。翌年には岩倉使節団にも一等書記官として参加し、アメリカ・ヨーロッパに渡る。その後、明治6年にはトルコを視察して帰国。

明治7年には大蔵省を辞職し政府系の新聞だった『東京日日新聞』の発行所に入る。そして、後に主筆となる。自由党系からは御用主義などと批判を受ける。明治10年には西南戦争が起きると戦地に出向き従軍記者として参陣、戦争報道を行いジャーナリストとして名を挙げた。明治15年には天皇主権、欽定憲法の施行、制限選挙などを掲げる立憲帝政党を立党。明治14年には、私擬憲法『国憲意見』を起草し、軍人勅諭の制定にも関与した。演劇、文学活動も行ったが、その部分は省略しておく。

「箕作」は明六社に二人いるが、竹下弥平がどちらの人物を左院議員として相応しいと考え、憲法草案書いたのかは分からないので、二人とも紹介しておく。

箕作秋坪は、江戸末期から明治にかけての学者、教育者である。1826年（文政8年）－1886年（明治19年）。若い頃には緒方洪庵の適塾で蘭学を学んだ。その後、江戸幕府蕃書調所の教授手伝となる。文久元年（1862年）の文久遣欧使節に加わり欧州を視察した。その後、維新後は三又学舎を開いた。三又学舎は当時、福澤諭吉の慶応義塾の双壁といわれた洋学塾だった。東郷平八郎、原敬、平沼騏一郎などもここで学ぶ。秋坪は漢学の大家でもあった。明治6年に明六社に参加した。

箕作麟祥は、官僚、法学者、啓蒙思想家。元老院議員、司法次官、貴族院勅撰議員なども歴任。民法、商法の大家でもあった。1846年（弘化3年）－1897年（明治30年）。江戸

の津山藩邸に生まれる。祖父は蘭学者だった。江戸時代末期に漢学、蘭学、英学を学ぶ。15歳で幕府の蕃書調所の教授手伝並出役となる。1864年（元治元年）に外国奉行支配翻訳御用頭取となり福澤諭吉、福地源一郎とともに英文外交文書の翻訳に従事。1867年（慶応3年）、パリ万博に將軍の名代として出席した徳川昭武に渋沢栄一らと随行する。その後は徳川昭武と共にフランスに留学。

帰国後、1866年（明治元年）、新政府の下で開成所御用掛、兵庫県御用掛などを歴任。その後、外交官にもなるが、大学南校（現：東京大学）大学中博士になる。明治2年副島種臣からフランス刑法典の翻訳を命じられる。翌年には江藤新平からフランス民法典の翻訳を命じられる。以後、長く法典の翻訳、編纂に関わる。明治4年に文部省ができると、参画し学制に起草や制定に携わった。箕作麟祥は日本で初めて「権利」や「義務」という訳語を用い、日本人に初めて近代法典というものを知らしめた。日本における法律学の基礎を築いた人物で、1882年（明治27年）には和仏法律学校（現：法政大学）の初代校長にも就任した。明六社にも参加し啓蒙思想家としても活躍した。

中村正直は、啓蒙思想家。東京女子師範学校長、東京帝国大学教授などを歴任。生まれは江戸で幕府同心の家に生まれる。昌平坂学問所で学び、佐藤一斎に儒学を学んだほか、それぞれ別の師から蘭学や英語も習う。後に教授、幕府の儒官になる。幕府のイギリス留学生監督として渡英し、帰国後は静岡学問所教授となった。教授時代の1870年（明治3年）サミュエル・スマイルズの『Self Help』を『西国立志編』（今では『自助論』という題名が一般的）の邦題で出版し、100万部以上を売り上げた。これは、当時、福澤の『学問のすすめ』と並ぶベストセラーだった。

また、J・Sミルの『On Liberty』を訳して『自由之理』で功利主義思想を日本に紹介。個人の人格の尊厳、個人と自由の重視する思想を日本人に紹介した。1872年（明治5年）には大蔵省に出仕。1873年（明治6年）、明六社に参加。『明六社雑誌』にも多く文章を執筆した。

成島柳北は、文学者。ジャーナリスト。1837年（天保8年）－1884年（明治17年）。武蔵野国に生まれる。後に代々奥儒者の家柄である成島家に養子に出される。そして、養父の後を継いで奥儒者となる。成島家は幕府に仕え『徳川実記』、『続徳川実記』などの編纂を行っている家だった。維新後、ある理由から平民となったが、東本願寺の大谷光瑩の欧州視察随行員として1872年（明治5年）欧米に渡った。1874年（明治7年）に『朝野新聞』を創刊し、初代社長に就任。言論取締法の「新聞紙条例」などを批判。自由民権運動の中では大隈重信の改進黨に近い立場だった。

栗本鋤雲は、思想家、ジャーナリスト。1822年（文政5年）－1897年（明治30年）。幕府の典医の家に生まれる。昌平坂学問所に学ぶ。後に医師となる。医師に関する禁令に触れたとのことで謹慎となり、函館に渡る。それ以降は、函館で医学院の建設や薬院経営に尽力したが、その函館奉行組頭に任じられた。樺太や南千島の探検を幕府に命じられる。その後、幕府に功績が認められ昌平坂学問所頭取、目付に登用される。その後、徳川昭武の一行がパリ万博を訪れた時は補佐を命じられた。1868年（慶応4年）、フランスから帰国。新政府から出仕の誘いがあった、幕臣として幕府への恩を感じていた鋤雲は、新政府には仕えなかった。1872年（明治5年）に横浜毎日新聞に入り、翌年、郵便報知新聞の主筆を務め、それ以降は新聞記者として活躍した。

福地、成島、栗本の三人が新聞家（ジャーナリスト）であり、残りの福澤、箕作、中村が啓蒙思想家である。箕作がどちらを指すのかが分からないと述べたが、竹下弥平のいう「箕作」が洋学者の秋坪を指すか、日本の法学の元祖である麟祥を指すかはどちらの可能性もある感じが最後まで残る。竹下弥平自身が書き遺したものは、この憲法草案しかなく、本人の思想のことが殆ど分かっていない以上、どちらの可能性もある感じはするが、社会的影響力の大きさと、竹下弥平が憲法草案を書いた時期から考えると、この「箕作」は幅広く様々な活動をして、日本に権利、義務という概念を紹介した麟祥を指す可能性の方が高いようにも推測できる。

ただ、教育者である福澤の名を挙げていることから考えると、当時、福澤の慶応義塾と双璧をなした洋学塾を主宰していた秋坪のような人物こそ竹下弥平は左院議員に相応しいと考えていたかもしれない。ちなみに、明治5年に学制が發布され（これには麟祥は関わった）教育制度が整っていくに従って英学塾も徐々に姿を消して行ったという。秋坪の三又学舎もいつまで存続したか明らかではないが、明治12年13年に在籍したという塾生の回顧録があるということであり、このころまでは存続したらしい。

竹下弥平が憲法草案を書いたのは、明治8年であるから、その頃には三又学舎は存在していた。学舎には、多い時に100人を超える塾生がいたとのことであり、竹下弥平は何らかの知識を三又学舎で得た可能性も全くないともいえないのである。竹下弥平が東京にいた時期までは判明しているのであるが、その時期の詳細までは分からないので一警視庁巡查として東京で働いていたという記録のみが残っている一広い意味で明六社や『明六雑誌』から影響を受けていたことは確かだと考えられても、特定の思想家や新聞家と直接の交流がどの程度まであったかどうかまでは分からない。

だが、このように、それぞれの思想的な立場を見ると、広い意味では啓蒙思想家ということと、自由民権寄りの新聞家という共通点があるように思えるが、竹下弥平が憲法草案で名前を挙げた人物も全部までが同じ主張ではない。福地だけは竹下弥平の憲法草案に戦後民主主義思想の原点を見る人々からすれば、何故、竹下弥平が名前を挙げているのかが不可解な人物であろう。特に憲法草案の出された明治8年(1875年)以降のこととはいえ、福地は明治15年に天皇主権、欽定憲法の施行、制限選挙などを掲げる立憲帝政党を立党している。これなど、竹下弥平を今日まで研究してきた人々が最も嫌う思想である。なぜ、竹下弥平は福地なども、左院議員に相応しい人物として書きこんだのだろうか。憲法草案を書いた時点でも、福地は明六社関係でもなく、新聞家の中でも自由民権系ではない。自由党から御用主義を言われたほど、政府（薩長藩閥）寄りである。

憲法草案が書かれた時点での福地は、後のような主張はしていなかったのかもしれないが、明治7年には、政府系の『東京日日新聞』の発行所に入って後に主筆になっている。この時点で自由党系からは御用主義、保守主義と批判されている。これも竹下弥平の憲法草案の出た後とはいえ、明治14年には、私擬憲法『国憲意見』を起草し、軍人勅諭の制定にも関与している。このように福地は全く権力の側に立った人物であった。いうなれば、竹下弥平の憲法草案を評価する人々の思想とは対極の人物である。

では、なぜ、竹下弥平は自分の私擬憲法草案に左院議員に相応しい人物として福地の名前を挙げたのだろうか。本当のところは分からないが、思想的に別の立場を取る人物であっても高い見識のある人物だと竹下弥平が福地のことを評価していたか、または別段、

福地を自分と違った思想的立場とまでは見なしていなかったのかのどちらかであろう。『東京日日新聞』の主筆であったということだけで、時代を代表する新聞人という意味で入れたのかもしれない。

実際のところは推測するしかないのだが、前者の場合、竹下弥平は非常にバランス感覚のあった人物ということがいえるかもしれない。また、後者かもしれないのだが、そうだとするならば、竹下弥平は啓蒙主義的ではあり、民選（撰）議院の早期開設で国民の政治参加を進めべきだという思想は持っていたものの、戦後の民主主義の祖と簡単にはいうことはできないのかもしれないということになる。

4) 憲法草案中の人物の竹下弥平への影響

以上の人物で誰が一番、竹下弥平に影響を与えたのだろうか。憲法草案を読んだだけではそこまでは、はっきりとは分からないのだが、中村正直と成島柳北がおそらく竹下弥平に強い影響を与えたのではないかと推測することは可能である。むろん、全ては日記や手紙などの直接的な証拠がない人物のことを、憲法草案からだけから考えて書いているので、推測の域を出ない。

「自由之理」が憲法草案に出てきているところから、中村正直の著作に触れていたか『明六雑誌』を通じて、中村の論に接していたとはまでは充分に考えられる。

成島柳北については、成島が『朝野新聞』の創業者であり、竹下弥平が憲法草案を投書した新聞が『朝野新聞』であることから、何らかの交流があったのかもしれないとも推測される。むろん、これも一次資料が何もない人物のついでのことだから、推測の域はでない。憲法草案に「自由之理」との文言があることと、投書した新聞が『朝野新聞』だからという理由でこの二人を挙げたが、他の人物に比較して、特にこの二人から影響を受けていたという証拠があるわけではない。

ただ、明六社でも全ての同人を憲法草案に挙げてはいないことなどから、竹下弥平の思想傾向は伺える。例えば明六社の中でも森有礼、加藤弘之、西周は憲法草案に左院議員に相応しい人物として竹下弥平は挙げていない。仮説ではあるものの、竹下弥平は明六社または『明六雑誌』から強い影響を受けていたとしても、さらに、その明六社の同人の中でも、尊敬すべき人物と自分とは思想の合わない人物を峻別していた可能性は充分に考えられる。特に先に見たが加藤は「民撰議院不可立の論」を『明六雑誌』に発表して、同じ年に「国体新論」を発表しており、その翌年に竹下弥平は草案を『朝野新聞』に投稿しているから、特に竹下弥平は加藤を批判的に見ていた可能性もある（北田の論文によれば加藤といえども広義の「漸進論」であって、急進論に歯止めをかけるのが加藤の立場だったとのことであった。この時点では、民選（撰）議院設立を時期尚早と考えていても、議会開設そのものには反対ではなかったということだから、程度問題であり竹下弥平と根本的に対立する考え方だったというわけではないようだが）。

森は官僚であり明六社については、純粋な啓蒙団体にしようとしたものの、福澤と対立し、どちらかという和政府の力で社会を啓蒙しようとした人物であることは先にみた通りである。また加藤弘之は板垣の「民撰議院設立建白書」が出た時に、時期尚早論を唱えた。このような人物については明六社の同人であっても、竹下弥平は憲法草案の中に名前を挙げていないところから、政府の力を強固にしようとする側、または民衆をまだ愚かな

状態にあると考える側とは一線を画していたことは確かだろう。

先に確認したように、明六社は、近代的な知識、思想を普及し日本人を啓蒙することでは一致していたものの、その中味や思想的立場にはかなりの幅があった。そして、その幅が大きすぎたことが、明六社が長く活動できなかったことにもつながった。当然、明六社の同人から影響を受けた側の知識人（または準知識人たる読者層）にも、いわばお気に入りの論者とあまり共鳴できない論者がいたであろうことも想像がつく。そう考えれば竹下弥平は自身が共鳴する人物を憲法草案の中の左院議員候補に書きこんだとも推測できる。

今日の表現を使えば、竹下弥平が民間の側に軸足をおいた思考をしていたことは確かであろう。ここには議論の余地はあるまい。今でも、しばしば議論される、国家があつて国民があるのか、国民あつての国家かという単純な二つの立場からいえば、竹下弥平は国民あつての国家を志向していたことまでは間違いないだろう。だが、最初に見たように国家主義か民主主義かなどという対立の構図はこの時には、まだはっきりとは姿を現していない。後に姿を現すこの議論の論点は潜在的には存在していたのだとしても、明六社内部ですら、議院開設時期尚早論と時期尚早ではないという論の対立はあっても、後の視点でいうところの国家主義者と民主主義者の対立まではなかった。

ただ、それにしても、先にも述べたように、竹下弥平が、どうして政府に軸足を置く福地の名を挙げているのかだけは理解に苦しむところではある。福地の思想は完全に国家のというよりも、政府の側に軸足を置いているものである。福地は一貫して権力志向の人物である。やはり、竹下弥平は福地の名を『東京日日新聞』の代表的新聞人であったという理由だけで入れておいたのかもしれない。

何度か言及したように竹下弥平の書いたものは、「憲法草案」しかない。日記、手紙、手帳、その他の著作、論考などは発見されていない。従ってどのような人物だったのかという内面の思想や思索の過程については、全ては推測の域を出ない。そのような理由もあり、今日までの竹下弥平研究は殆ど全てが「洋学の知識をもっていた」、「西欧の最新の政治思想を知っていた」だから「民主主義思想を持っていた」というものばかりであった。不思議なことに、この論考で俎上に上げた論稿でも、憲法草案に出てくる人物にまで検討したものは殆どなかった。わずかに出原のみが明六社に言及しており、出原を紹介した伊地知の記事でも少し言及されているだけである。そして、殆どの論者は明六社そのものには関心を持たずに、憲法草案に出てくる人物にまで論究したものはなかった。

そして、これまた不可思議なことに、竹下弥平の思想を知る手がかりが憲法草案そのものに書かれているにも関わらず、その中に出てくる人物には殆ど興味関心らしきものを示してこなかったこれまでの研究は、殆どがステレオタイプの「鹿児島湾奥にこんな民主主義思想をもった人がいたのは不思議だ」というものであり、不思議というところで留まっていた。竹下弥平なる人物は、場所は分からないが、どこかで「民主主義」を学んだかもしれないという推測に留まっていたのである。また、自由民権運動との直接的な関わりがはっきりしていないにも関わらず、川寄などは「鹿児島にも民主主義の実現を求める歴史的伝統があったということを、理解すべきではないだろうか」などと述べていた。

実際には、そんな「伝統」はなかったと思われる。自由民権思想の芽はあったが、それは大きくなる前に西南戦争で途絶えたのは出原の論考で確認した通りである。これが実際の歴史的事実に最も近い見解であろう。それに歴史的な征韓論から自由民権運動へという

大きな流れを無視して「民主主義の実現を求める歴史的伝統」とはどういうことだろう。そして、この川寄と比較的近い立場の伊地知は自由民権運動すら武士層が担い手だった時期のものは「偽物」と切り捨てている。しかもこの川寄は、この「伝統」を西郷らの私学校を敵視する立場に位置付けている。西郷一色の鹿児島の中にそれに対抗する「伝統」があったと位置付けているのは、理解に苦しむところである。にも、関わらず、一方では、「思想的に西南戦争に参加するタイプには思えないが、ひょっとしたら西郷派にも民権思想が影響していたのかもしれない」とも述べるなど、中途半端さも否めない。

筆者らの結論（仮説であるが）は以下の通りである。大隅の日当山に生まれた竹下弥平は明治維新後、何らかの機を得て上京した。そして東京で啓蒙思想に出会った。その時期に直接的な面識があったかどうかは確かめる術もないが、明六社の思想家から影響を受けた。おそらく『明六雑誌』を舞台に繰り広げられた論争のことも竹下弥平は知っていた。そして、そのような知識人同士の議論を読み、様々な問題を考える中から竹下弥平も徐々に自身の思想を固め、理想の日本国家について思いを巡らすようになった。

竹下弥平は、知識人同士の議論に触発されたのであって、鹿児島で『自由之理』を一人で読んで覚醒したのではない。竹下弥平は、あくまでも、当時の明六社系知識人を初めとする人々の議論を参考にして、同じような文脈の中で理想的な国家システムを構想したのであって、本稿で論じたように、反国家思想をもっていたわけでもないし、殊更に国家を超えた人類的視野などという大袈裟なものまではもっていなかったと考えるのが自然であろう。

そして、竹下弥平はもしかすれば『朝野新聞』には出入りしていたかもしれない。投書先が『朝野新聞』であることから、これは十分に考えられる範囲のことである。であれば、成島柳北とは面識があったことは、想像に難くない。そして、これは次の章で説明されるが、竹下弥平は病を得て鹿児島に帰ってくる。そして、東京時代に憲法草案を投稿してからか、または東京時代に考えた憲法草案を鹿児島で執筆して、東京時代に縁があった（かもしれない）『朝野新聞』に投稿した。実像はそんなところであろうと推測されるのである。次章においては、竹下弥平の実像に迫る。

第2章：竹下弥平は何者であるか（鶴丸 寛人）

1) 竹下弥平は何者であるか。

本章では、竹下弥平は、現在の鹿児島県霧島市隼人町東郷で安政2（1855）年11月に生誕し同地で成長、明治10（1877）年3月に西南戦争で23歳（数え年）の若さで戦死した「松元彌一郎武元（まつもとやいちろうたけもと）（以下、「松元武元」、あるいは単に「武元」と表す。）」であると断定し、論考を進めていく。

（松元彌一郎と表す場合は、旧字体「彌」については、以降「弥」と表記する。）

前章で吉田が触れているとおり、竹下弥平の名前を確認できるのは、明治8年3月4日の『朝野新聞』の投書欄のみであり、それ以前もそれ以降も、その名前を確認することができない。

これまでの研究で明らかになっているとおり、この投書は、史上初の「民間人による最古の憲法草案」が世に出たものであるが、投書した竹下弥平が何者であったのかは、未だに不明とされている。

竹下弥平の人物像を推定する手がかりはただ一つ、この『朝野新聞』の投書のみである。投書された憲法素案は全文8条からなっているが、その末尾に「鹿児島縣（県）下大隅國（国）曾於（曾於）郡襲山郷住居愛國愚夫 明治8年2月1日謹述 竹下彌（弥）平」と記されている。

竹下が自己を特定されるのを防ぐため、全く偽りの住居氏名で投書したのであれば、竹下を特定することは不可能となる。確かに、明治6年のいわゆる「征韓論政変」により西郷隆盛らが下野した後、明治7年1月には、西郷らと共に下野した板垣退助が「民撰議院設立建白書」を政府に提出、同年2月には同じく下野した江藤新平による佐賀の乱が勃発するなど、明治10年の西南戦争に至るまで、明治政府と薩摩が対立する、不安定な時代に突入していく。時期を同じくして、新聞は政府批判の色を高めていったことから、明治8年6月、政府は讒謗律を公布、自由な言論活動を制限するなど、新聞を締め付けにかかる。

竹下の投書はこのように、新聞に対する締め付けが厳しくなっていく時期に行われていることから、偽名を使った可能性もないとは言えないが、投書の内容、それから当時の新聞というものの性格を考慮すると、全く偽りの住所氏名で投書されることは考えにくい。このため、投書に記された住居氏名は竹下を特定する手がかりになるヒントがあるものとして、論じていく（当時の新聞事情については、後述する）。

2) 竹下弥平は何処にいたのか

前章での吉田の論述のとおり、これまでの竹下を扱う論述では、竹下を現在の霧島市隼人町日当山で生誕、成長した人物ではないかと推測している論が多い。これは、投書に記された住所「鹿児島県下大隅国曾於郡襲山郷住居愛國愚夫」の解釈によるものである。「愛國愚夫」については、そのとおり「国を愛する愚かな男」というアイロニーであろう。竹下は国を愛していたであろうが、「愚夫」であれば、そのような投書をするはずがない。

では、当時の「大隅国曾於郡襲山郷」という場所は、現在ではどの辺りを指すのか。

襲山郷とは、明治2年に曾於郡郷（そおのこおりごう）と日当山郷（ひなたやまごう）が合併してできた郷である。鹿児島県市町村変遷史（昭和42年刊行）によると、明治4年

当時の「大隅国曾於郡襲山郷」は7村（田口村、大窪村、川北村、重久村、朝日村、東郷村、西光寺村）で構成され、人口は6195人であったと記されている。

この「大隅国曾於郡襲山郷」は、現在では霧島市隼人町北部、国分北西部及び霧島町にかかる地域である。具体的には、霧島市隼人町（朝日、西光寺、東郷、嘉例川、松永）、国分（重久）、霧島町（田口、大窪、川北、永水）」を指す。

3) 「竹下弥平」は本名であるか。

「竹下弥平」の名が出てくるのは、明治8（1875）年3月の朝野新聞のみであり、その後は、朝野新聞をはじめとする東京の新聞各紙や鹿児島新聞（現「南日本新聞」の前身）、また、鹿児島県史にも隼人町郷土史にも、その名を確認することはできない。

西南戦争後、改めて自由民権運動の機運が高まり、様々な紆余曲折を経て、憲法（大日本帝国憲法）が明治22年に公布される。この間、あれだけの憲法草案を投書する能力があれば、明治8年3月以降も、竹下弥平は何らかの活動の痕跡を残しているであろう。例えば、板垣退助のような民権運動家として、あるいは官僚として、あるいは新聞の創設者・編集者として。

出原政雄「鹿児島県における自由民権運動 『鹿児島新聞』と元吉秀三郎」（志学館法学第四号）によると、『鹿児島新聞』（鹿児島新聞は現在の南日本新聞の前身）の発起人市来政明は、西南戦争に従軍中負傷し戦闘ができなくなったため上京、慶応義塾（現在の慶応義塾大学）に潜伏した際に、西南戦争の敗北で武力による問題解決の不可能性を自覚し、他面で言論による反政府活動を開始した民権運動に共鳴し、当時各地方で盛んになり始めた新聞発行に関心を抱くようになったと推測される、としている。竹下が生存していれば、市来政明は朝野新聞に投書した「大隅国曾於郡襲山郷の竹下弥平」を探し出し、鹿児島新聞の共同発起人あるいは編集者として雇っていたのではないか。

なぜ、竹下の名が世に出てこなかったか。

まずは、「竹下弥平」が本名ではなかったという事であろう。本名ではなかったという根拠については、後述する。

もう一つ、「竹下弥平」は、朝野新聞に投書後、そう長くないうちに、何らかの理由で活動することができなくなった（病死、戦死、獄中死などが考えられるが、讒謗律が公布されたのは竹下投書の3か月後であり、しかも獄中死であれば朝野新聞が黙っていないであろうから、その可能性は否定できる）ということである。

筆者は、この章の冒頭で竹下弥平は、現在の鹿児島県霧島市隼人町東郷で安政2（1855）年11月に生誕し同地で成長、明治10（1877）年3月に西南戦争で23歳（数え年）の若さで戦死した「松元弥一郎武元（まつもとやいちろうたけもと）」であると断定し、論考を進めていくとした。そして、この結論は間違いないと考えている。

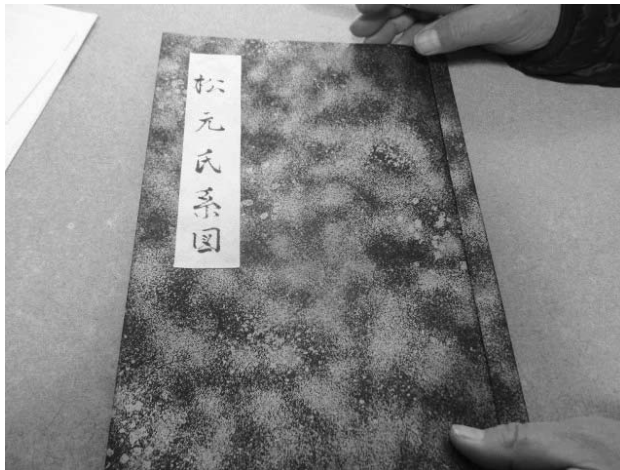
4) 「松元氏系図」に残る松元武元の記録

霧島市隼人町東郷に、松元史子氏という、齢90を過ぎてもなお矍鑠（かくしゃく）としている女性が健在である。

以下は、共同執筆者である吉田健一、鶴丸寛人が平成27年1月に行った同氏への聞き取りと、松元家に残る家系図を調査した結果によるものである。



松元史子氏宅門構



松元氏系図表紙

松元史子氏の配偶者である松元一郎は平成21年に鬼籍に入っているが、松元氏系図によると、一郎の父は松元清彦、松元清彦の父（一郎氏の祖父）は「竹下萬二郎武彦（安政5（1858）年）生誕」となっている。

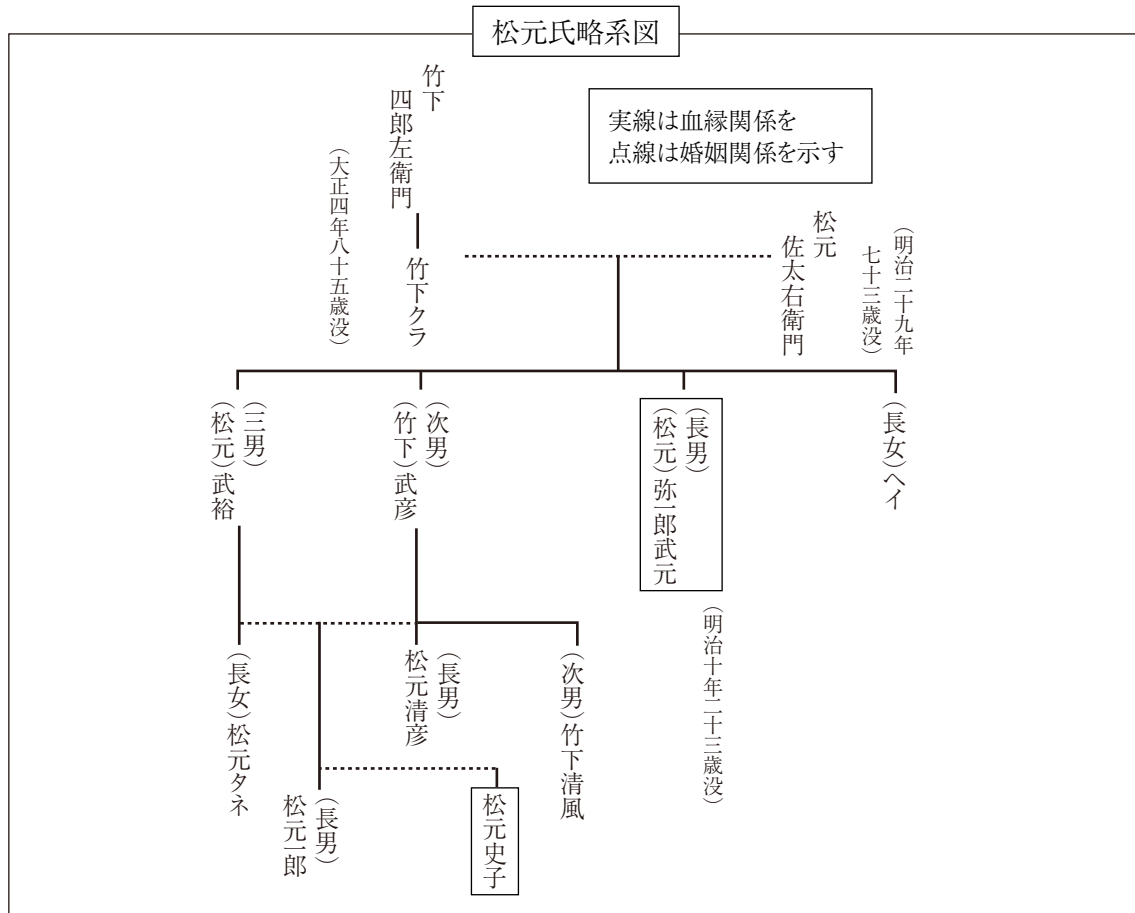
また、竹下萬二郎武彦の父（一郎の曾祖父）は松元佐太右衛門、母は竹下四郎左衛門の長女クラであるが、竹下武彦は松元佐太右衛門の次男であり3番目の子（1番目は長女「松元ヘイ」（嘉永6（1854）年生誕）、2番目は長男「松元弥一郎武元」（（安政2（1855）年生誕）、4番目が三男「松元武裕」（慶応元（1865）年生誕）である。

なお、『隼人町郷土誌』によると、竹下武彦は第3、4、5代日当山名誉村長、その息子松元清彦は第14代日当山名誉村長を務めていることから、松元家（竹下家）はある程度裕福な、地元の名士であったことがうかがえる。

なお、松元佐太右衛門の次男である武彦が「竹下」姓を名乗っているのは、出生後すぐに、武彦の母の実家である竹下家に養子に入っているためである。竹下四郎左衛門に男子がなかったことから、娘クラの次男となる武彦については、竹下姓を名乗ることが決められていた。

また、竹下武彦の息子である松元清彦が再び「松元」姓を名乗っているのは、松元家の長男（竹下武彦の兄）である「弥一郎武元」が明治10年の西南戦争で戦死（享年23歳）、

また、三男（竹下武彦の弟）である「武裕」が明治25年に病死（享年28歳）といずれも若死にし松元家の男子が途絶えそうになったため、竹下武彦の長男である清彦が、再び松元姓を名乗ることになったということである（竹下性は、清彦の弟（竹下武彦の次男）である清風が継いでいる）。



松元氏系図には、墓碑に刻んだ文字が残されている。松元弥一郎武元、竹下萬二郎武彦、松元武祐の3兄弟のうち、長男弥一郎武元と三男武裕の2名の欄には、それぞれの誕生、職業、死亡の経緯が書かれている。次男の武彦の欄は空欄である。これは、長男弥一郎武元、三男武裕が若死（両親である松元佐太右衛門、クラよりも早世）したため、父である松元佐太右衛門が墓碑に刻んだのであろうと伝えられている。次男の武彦は両親の最後を看取っていることから、系図には長男、三男のような墓碑に刻んだ文字は残っていない。

なお、松元氏系図によると、佐太右衛門の三男武祐の欄には、明治16年（18歳）の時に東京警視庁の巡査となり、その後、太政大臣三条実美、内閣総理大臣伊藤博文の守衛（今でいうSP）を務めていると記載されている。当時の政府トップの守衛であり、かなり優秀な警官であったことがうかがえる。

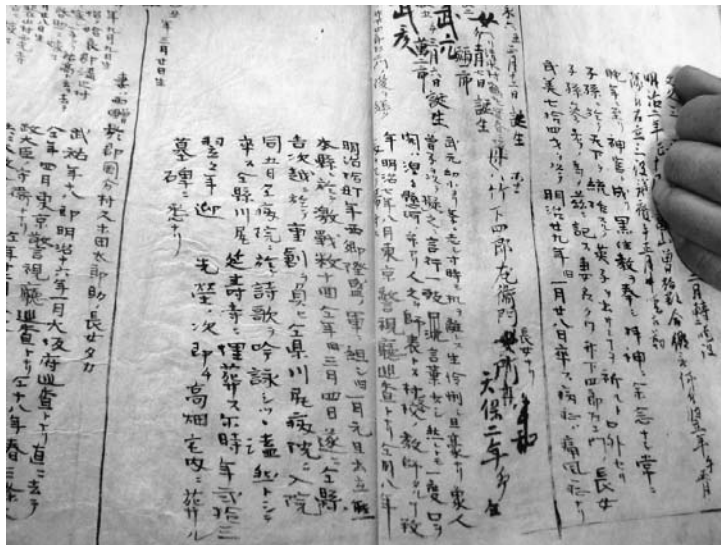
なお、余談ではあるが、今回聞き取りを行った松元史子氏の亡夫である松元一郎の父は松元清彦、その父は竹下武彦であることは先述したが、松元一郎の母は松元タネ、その父

は松元武裕である。従って松元一郎の両親は従兄妹婚であり、松元一郎にとっては、父方の祖父が竹下武彦、母方の祖父が松元武裕となる。このため、松元史子も義理の両親である松元清彦、松元タネから、竹下武彦、松元武裕兄弟の話、その兄であった松元武元の話もよく聞かされており、松元史子が語る話も信憑性が高いと言って良いであろう。

では、佐太右衛門の長男弥一郎武元の墓碑にはどのようなことが書かれていたか。

以下は、松元氏系図による弥一郎武元の欄に記載されている内容である。

(旧字体については、新字体で表記)



松元氏系図中
武元に関する記載

松元弥一郎武元 安政2年11月7日誕生

武元幼少より文字に志し 寸時も机を離れず 生伶俐にて旦豪なり 魯人曾子を以て擬し言行一致 言葉少し 然れども一度口開かば滔々懸河の弁あり 人之を師表とす

村校の教師たること数年 明治7年8月東京警視庁巡査となり 8年病を以て帰村す

明治10年西郷隆盛の軍に組し一月元旦出征 熊本県において激戦数十回 同年3月4日ついに同県吉次越において重創を負い同県川尻病院に入院 同10日病院において詩歌を吟詠しつつ蓋然として卒す 同県川尻延壽寺に埋葬す この時年23

翌々年迎える 先塋の次即ち高畑内に葬る 墓碑に悉くなり

松元弥一郎武元（松元武元）が明治10年3月、西南戦争吉次越の戦いで戦死したことは、熊本にある西南戦争慰霊碑の刻字や、鹿児島県史でも確認できる。死ぬ間際まで詩歌を吟じていたというのは、父である松元佐太右衛門が後年、熊本川尻の延壽寺に遺骨を取りに行った際に、寺の関係者から聞いた話だという。

松元史子氏は、武元のことを、村長になった次弟の武彦、伊藤博文の守衛を務めた末弟の武裕、これら弟達とは比べ物にならないほど優秀であったと聞かされている。また、ハ

ンサムであり、口数は少ないが一旦語り始めると、それは流れるように言葉が出てきたという。それは、「寸時も机を離れず」や、「村校の教師たること数年」（警視庁巡查となる前なので、教師をしていたのは10代後半となる）という記載からもうかがうことができる。

なお、松元史子氏宅には、武元の次弟武彦、末弟の武裕の写真が残されている。武元と長姉のヘイの写真は残されていない。



松元武元次弟
竹下武彦写真



松元武元末弟
松元武裕写真

さて、系図中武元の記載に「魯人曾子を以て擬し言行一致」という文がある。曾子は孔子の弟子（孔子よりも40歳前後若い弟子グループの一人）であり、孔子の教えのうち、人間の内面性を重視する学派の開祖である。『孝経』の著書と伝えられている。曾子の系列から、後に性善説を唱える孟子が出てくる。孔子・曾子・子思・孟子の思想はそれぞれ『論語』・『大学』・『中庸』・『孟子』という4つの書物に位置づけられている。曾子の『大学』は自己修養から始めて、多くの人を救済する政治へ発展していく儒者の基本綱領が定められているとされる。「大学」とは、「大人（たいじん）になるための学問」という意味

であり、「大人」とは、「世の中の役に立つ立派な人」の事である。曾子の思想は、「曾子曰く、士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁以て己れが任となす、亦（また）おもからずや。死して後已（や）む、亦遠からずや。」（現代語訳：曾先生が言われた。士たる者は度量が広く包容力が有って意志強固でなければならぬ。それは任務が重く、道遠しだからだ。仁道の実践こそ己の任務である。なんと重いではないか。全力で死ぬまでこの任に当る。なんと道遠しではないか。）に代表される、政（まつりごと）に携わる者のあるべき姿を説くものが多い。

武元が曾子に魅力を感じていたというのは、どのような理由であったのかはわからない。ただ、武元が若年の頃から中国の古典に親しむ環境にあり、特に、政（まつりごと）を行う者のあるべき姿を説く曾子に大きな共感を得ていたというのは、興味深い。曾子の思想は、政に携わる者のあるべき姿を説く竹下弥平憲法草案にも共通する。

このように、武元が中国古典の素養があったのは、竹下武彦（武元の弟）は第3、4、5代日当山名誉村長、その息子松元清彦（武元の甥）は第14代日当山名誉村長を務めるなど、松元家（竹下家）はある程度裕福な、地元の名士である家系であり、希望すれば中国古典を学びやすい環境で育ったことから推測できる。

また、「明治7年8月東京警視庁巡查となり、8年病を以て帰村す。」とある。武元の警視庁からの辞令は松元家には現存していないが、記載が墓碑どおりであるとすれば、武元は、竹下論文が朝野新聞に投書された明治8年初頭には、東京にいた可能性が非常に高いということが言えるのである（松元史子氏によると、武元の弟である松元武裕が警視庁に採用された時の辞令、伊藤博文の守衛を命ぜられた時の辞令を見た記憶があるとのこと。このため、武元が明治7年8月に警視庁巡查となったことも、間違いはないと思われる。ただし、明治8年病を以て帰村す。ともあり、実際に警視庁に勤めた期間は短かったと思われる）。

5) 「竹下弥平」の名の由来

さて、「竹下弥平」が「松元弥一郎武元」とする根拠である。

西郷隆盛が、西郷吉之助、菊池源吾など、その生涯において複数の名を名乗っていたことはよく知られている。大久保利通（大久保一蔵）もそうである。薩摩藩英国留学生として欧州に旅立った長沢鼎（本名：磯永彦輔）もそうである。当時は本名以外の変名を名乗ることは普通であったということを認識しておく必要がある。これは、現在もそうであろう。「ペンネーム」とか「芸名」というように。「竹下弥平」という、あれだけの投書をする能力を有する人間を特定できないということは、その名が「ペンネーム」「変名」であったからと考えるのは妥当であろう。

では、本名「松元弥一郎武元」という人が変名を名乗るとすれば、どのような名を考えるであろうか。

まず、名字の「松元」を使わないとすれば、次に脳裏に浮かぶのは、母の実家であり弟が名乗っている「竹下」であるのは、違和感はないし、ごく自然であろう。

また、「弥平」の「弥」については、自分の名前「弥一郎」の「弥」を使うと。「平」については理由なく付けているかもしれないが、姉の名が「ヘイ」であるため、そこから取ったかもしれない。

なお、武元の姉「松元ヘイ」は、武元より2歳年上であるが、松元史子氏によると、ヘイは頭の良いしっかり者で、武元をはじめ兄弟たちが大変親しみをもち、頼りにしていたと伝えられている。武元にとっては、何でも相談でき、信頼できる姉であったのであろうと思われる。

このように、「松元弥一郎武元」にとっては、「竹下弥平」の名は、「母（弟）の名字」プラス「本人の名の一部」プラス「姉の名前」で構成されており、非常に合理的でわかり易い名前であることが言えるのである。

『朝野新聞』への投書時、武元が警視庁に勤めていたとすれば当然、本名で投書することは憚られたであろう。「竹下弥平」であれば、「松元弥一郎武元」を匂わしつつ、しらばくくれる事も可能である。もしかしたら、警視庁勤務時は本名の「松元武元」を、勤務時以外（公務以外の「私人」としての活動時）はペンネーム「竹下弥平」を名乗っていたのかもしれない。

6) 明治8年前後の西郷隆盛の動向

松元武元による『朝野新聞』への憲法草案の投書は、西郷隆盛に高く評価され、西郷が武元に揮毫を与えるきっかけになったと考えられる（松元家が所有する西郷隆盛の揮毫については、後述する）。

武元が投書を行った、明治8（1875）年前後の鹿児島、東京の情勢はどのようなものであったか。

明治6年9月のいわゆる「征韓論（筆者は征韓論ではなく「遣韓論」であったと考えているが、この論においては征韓論と表す）の政変」において、西郷隆盛以下、板垣退助、江藤新平らの参議、桐野利秋、篠原国幹らの軍事官僚らが一斉に下野する。

明治7年6月には鹿児島に私学校が設立、明治8年4月には同じく鹿児島に吉野開墾社が設立など、西郷らにとっては、明治10年2月の西南戦争勃発に向けた「雌伏の期間」となっている。

なお、西郷については、明治元年4月11日の「江戸城無血開城」以降、明治元年6月～7月、明治元年11月～翌2年3月、同年6月～12月、そして明治6年9月～西南戦争の期間、鹿児島に滞在し、その間、日当山・高城・鰻温泉など県内各地の温泉で療養をしている。特に、日当山温泉が一番のお気に入りであった。日当山温泉は鹿児島から船で隼人浜ノ市に到着後、そこからまっすぐ北上し徒歩30分足らずの位置にあり鹿児島から比較的近かったこともあるかもしれないが、その背後には霧島連山を望むなど地理的・風景的にも恵まれていることも、一番のお気に入りの理由かもしれない。西郷が何度も療養に来ていたことは、日当山に残される西郷に関する数々の逸話からもうかがい知ることができる。日当山には「西郷どんの宿」も現存している。

このため、現在の隼人町東郷で育った松元武元は、日当山の地を訪れる西郷と面識があったのではないかと考えられるのである。西郷は、訪れてくるものは身分の分け隔てなく対応し、ある者には狩猟で獲った猪やキジを、ある者には農作業で得た野菜や芋を、ある者には揮毫を与えるなど、多くの逸話が残されている。要するに、西郷は誰でも会っているのである。明治7年ごろに面識があったとすれば、西郷が45歳、竹下が20歳であろうか。それ以前にも面識があったかもしれない。隼人町東郷から日当山温泉までは、わずか

徒歩5分の距離である。

7) 松元弥一郎武元と西郷隆盛に面識はあったか。

松元武元は、明治7（1874）年8月に、東京警視庁巡查として上京し、翌明治8年に鹿児島に帰国している。一方、征韓論政変に敗れた西郷は、明治6年11月に鹿児島に帰国している。このため、両者に面識があったとすれば、まずは明治6年11月から7年8月の間であった可能性が高い。

明治維新後の西郷は、湯治のため日当山温泉へ何度も足を運んでいる。「日当山温泉南州逸話」によると、記録に残っているだけでも、明治元年冬、明治2年2月、明治7年12月、明治8年1月、明治9年10月、明治10年1月に西郷は日当山で過ごしている。明治2年2月には、西郷を藩の仕事に復帰させるため、当時の薩摩藩主島津忠義が日当山の西郷を訪問し説得したという記録もある。

このように、西郷は日当山に長期間滞在している。そのため、地元の人々と触れ合う機会は大変多かったであろうと推測できるのである。

さて、「竹下弥平＝松元弥一郎武元」は西郷と面識はあったのか。明確な記録は残っていないが、望む者には身分の分け隔てなく会っていた西郷である。おそらく、いや、必ず、武元は西郷と会っていたであろう。坂本龍馬は、西郷を「大きく叩けば大きく響く。小さく叩けば小さく響く。もし利口であるならば、とてつもなく大利口で、もし馬鹿であるならば、とてつもない大馬鹿だ。」と評している。明治維新の一番の立役者で、廃藩置県や版籍奉還を断行するなど普通の人間では決して真似できない「大利口」であった西郷も、ここ日当山では「大馬鹿」（教養がない、頭が悪いという意味ではなく、狩りをしたり農作業をしたり温泉に入るなど、普通の人間であれば誰でもできる事に没頭していたという意味）であったのだが、憲法草案を投書するほどの能力がある武元が西郷と会話するときは、「大利口」の西郷に戻っていただろう。「武元どん、おはんの言うことは誠に筋が通っちゃう。どこでそんな思想を学びやったとか。」と語りかける西郷の姿が目浮かぶ。

武元と西郷が面識があったとする根拠を「西郷に関する逸話」、「武元の親戚関係」の二点から論ずる。

まずは、西郷に関する逸話である。

「日当山温泉南州逸話」の、「揮毫に関すること」の項目に、元日当山村長松元清彦が語った、父である松元武彦と西郷の逸話が掲載されている。

上述したとおり、松元武彦は正確には「竹下武彦」であり、松元武元のすぐ下の弟である。松本清彦は松元武元の甥にあたる。

16歳の時、ある日西郷先生から字を書いてもらおうと意気込んで、一人自ら先生の寓居を訪ねた。何か田舎土産をと考えて、自家の里芋を掘りとらせ、よく洗って「カガリ」一俵を、下駄履きのまま背負って先生の宿に上がった。まず内に入って「ごめんなさい」と言ったら、西郷先生さっそく「はい」「うちおしゃんせ（中へいらっしゃい）」と言われて一向に出てこれられないので、松元氏ちょっと困った。すぐ背負った芋かがりを下ろしてうやうやしく内に上がり、先生の座敷近く座って挨拶した。先生も丁寧に応対された。「芋を持って来ました。」と差し上げたら、大変お喜びになった。それから頭を下げて、出し抜けに「字を書いてたもはんか（字を書いてくれませんか）」と願ったら、先生たやすく「書いてあげもそ（書いてあげましょう）」と承諾してくださった。下駄を履いてお礼しようと振り返ってみたら、先生座席におられぬので、「ハテナ」と思ったが遅いか先生すでに縁側に来て、跪いて両手をついておられたので、びっくりして何も言えず、ただ「ありがとうございます（ありがとうございます）」と礼をしたら、先生「ご無礼ごわした」とおっしゃった。

「実にその時のことは一生忘れぬ。」と父が酒でも飲んで酔ったら、すぐその話を言い聞かせて、自分を戒めてくれた。西郷先生は実に礼儀の正しい尊いお方で、親切あふれる偉いお方であったと。酒に興奮したときなど、涙をほろほろ感激して語り開かした。

身分の区別なく、誰にでも分け隔てなく接する、また、庶民に優しい西郷らしい逸話であるが、この逸話のポイントは二つ。

一つ目は、冒頭で「16歳の時、ある日西郷先生から字を書いてもらおうと意気込んで、一人自ら先生の寓居を訪ねた。」というところである。竹下武彦16歳ということは、明治7年であろうか。里芋を持っていったということであれば、晩秋であろうか。西郷は明治7年の12月には日当山に滞在している。おそらく明治7年の暮れから明治8年にかけての逸話であろう。

竹下武彦16歳であれば、兄の武元は19歳。明治7年の8月に武元が上京しているので、この時は武元は不在であっただろう。逸話では「一人自ら先生の寓居を訪ねた。」とあるが、これは、「（それ以前に、誰かと一緒に先生の寓居を訪ねたことがあったので、今回は）一人自ら先生の寓居を訪ねた。」と考えるのが自然であろう。その「誰か」とは、武彦の実父である松元佐太右衛門か、兄である松元武元か、祖父である竹下四郎左衛門か。はたまた、それ以外の誰かか。武元が上京する前、武彦と共に西郷を訪ねていたのであれば、武彦にとってみれば、「（今までは兄と一緒にだったけど今度は）一人で訪ねてみた。」と逸話を残しても違和感はない。

二つ目は、「字を書いていただいた。」というところである。

西郷は、「敬天愛人」をはじめ、数多くの揮毫を残している。相手が誰であろうと、書を頼まれれば、快く書いていた西郷である。もちろん、相手がどのような人間であるかを見て（教養がある人間なのかどうか否か。教養があるのではあれば、どのような言葉を書くのが相応しいのかなどを判断し）書き分けている。

この逸話の時、竹下武彦がどのような字を書いてもらったかはわからない。しかしながら、竹下武彦が、（そしてその兄である松元武元が）、西郷と面識があるだけでなく、字を書いてもらうような関係にあったという事は想像できる。

なお、松元家には、西郷から貰った揮毫が残されている。（現在、鹿児島県黎明館に寄託されている。）この揮毫は、松元武元の人物像を考えるのに、大きなヒントになるものである。後ほど論述する。

次は、「武元の親戚関係」である。

武元には、2歳離れた姉の「ヘイ」、3歳離れた長弟「武彦」、7歳離れた末弟「武裕」、の兄弟がいた。先に、姉の「ヘイ」がしっかり者で、弟妹の面倒をしっかり見ており弟妹達から慕われていた、と述べた。竹下弥平の「平」は姉の「ヘイ」から取ったのではないかと考えた、姉である。

この「ヘイ」は、明治6年、この論文の筆者である鶴丸寛人の高祖父にあたる「鶴丸資治」に嫁いでいる。この「資治」は、明治4年の廃藩置県に際し、西郷によって組織された「御親兵」（明治5年に「近衛兵」に改称）の一員として上京しており、さらに、明治6年の征韓論政変では、大半の近衛兵がそうであったように、西郷と共に下野し、鹿児島に帰国している。「ヘイ」との婚姻は鹿児島への帰国後である。鶴丸家には、「ヘイ」がしっかり者であった（おまけに「美人」であった）という話が伝えられている。

武元にとってみれば、義兄（姉の夫）という一番身近な親戚が、東京生活を経験しているのである。東京とはどのようなところであるか、鹿児島とどのように違うのか。また、義兄が慕っている（であろう）西郷とはどのような人物であるのか。知的好奇心にあふれていたであろう武元は、義兄の話を興味津々に聞いたに違いない。様々な事を間違いなく武元は資治に聞いたであろうし、資治も快く答えたであろう。また、資治の縁で、西郷を紹介してもらった可能性もある。武元の住居である霧島市隼人東郷と、姉の嫁ぎ先である霧島市国分清水は、徒歩で30分の距離にすぎない。

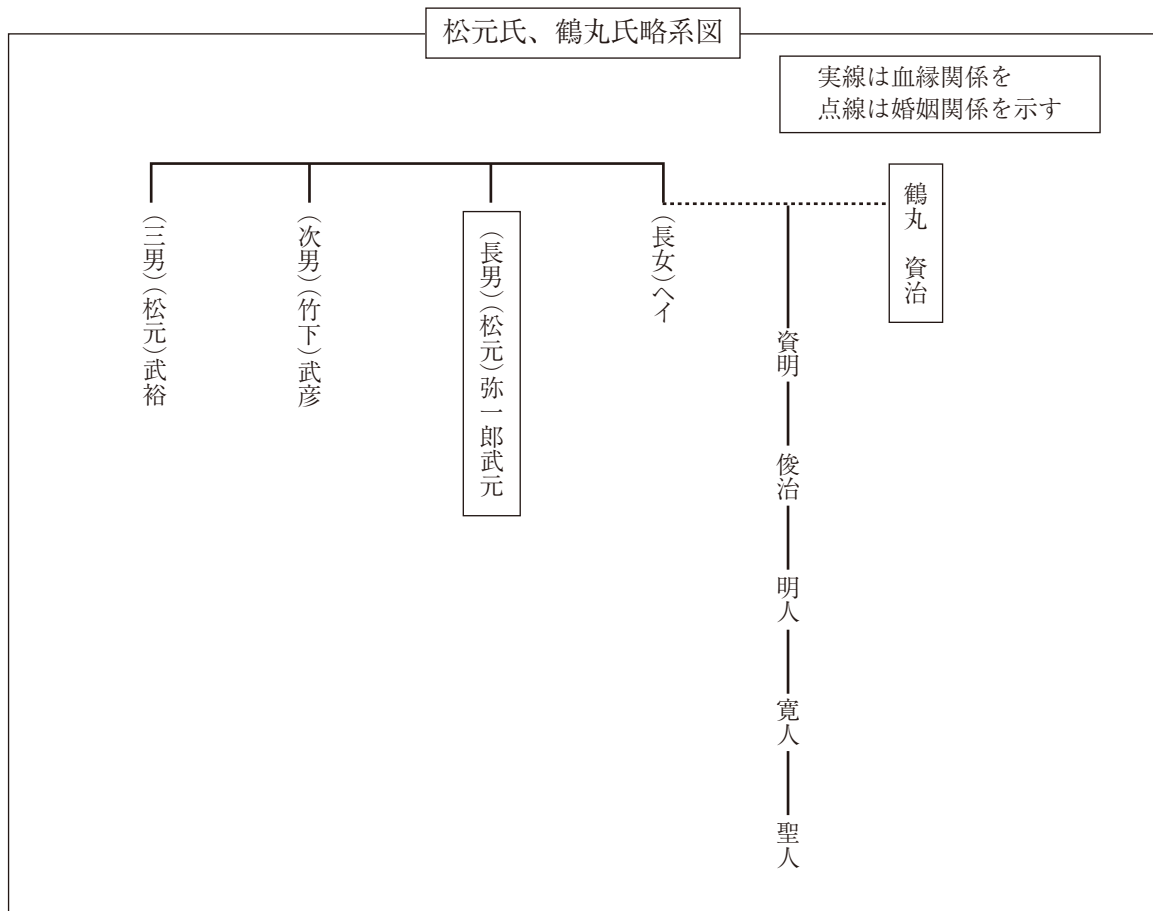
なお、武元は西南戦争で薩軍として従軍し、熊本吉次越の戦いで戦死したことは先に述べているが、資治も同様に薩軍として従事し、田原坂の戦いで負傷したが一命をとりとめ、鹿児島に帰国している。

このように、時系列、西郷の鹿児島での行動記録、武元の実弟による日当山の逸話、武元の親戚関係といった様々な観点を考慮すると、武元と西郷は間違いなく面識があったであろうと推測することができるのである。

そして、武元と何度も話す中で、人生経験豊富な40代後半の西郷は、20歳になったばかりのこれから成長していくであろう若い武元を大きく評価し、感銘のしるしとして、武元に揮毫を与えたものと考えられる。

なお、筆者は、明治7年8月以前にも武元は西郷と面識があり、両者が議論を深める中で、西郷は武元を高く評価していたが、明治8年3月の武元の朝野新聞の投書を見た西郷が、自分の評価に間違いなかったこと、武元の見識の高さに深く感銘し、武元が帰国後、揮毫を与えたのではないかと考えている。

これは、松元家に残されている（西郷が武元に与えたと考えている）揮毫の内容からも裏付けることができる。



8) 松元家に残された西郷の揮毫

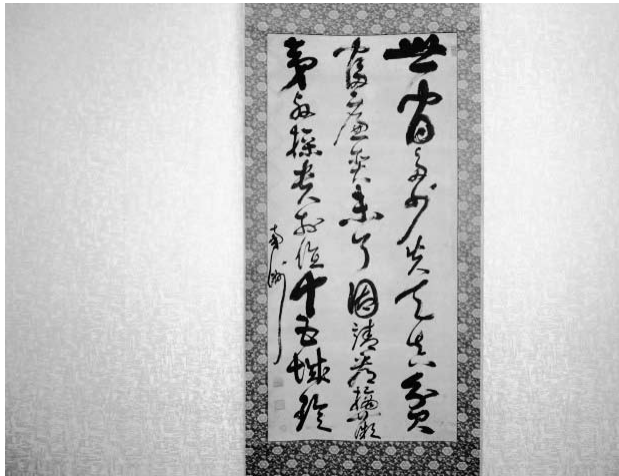
先に、「松元家には、西郷から貰った揮毫がある（現在、鹿児島県黎明館に寄託されている）。この揮毫は、松元武元の人物像を考えるのに、大きなヒントになるものである。」と述べた。

松元家の揮毫には何と書いてあるか。

松元一郎（松元清彦の息子。竹下武彦の孫）が鹿児島県黎明館に寄託したため、実物は、黎明館にて職員立ち会いのもとで確認することができる。



松元家から鹿児島県黎明館に寄託された、西郷隆盛直筆の揮毫
(鹿児島県黎明館にて撮影)



全体
縦 185cm
横 71.5cm
中心
縦 122cm
横 57.5cm

上記2点「松元史子氏蔵、鹿児島県歴史資料センター黎明館保管」

そこには、西郷の直筆で、以下のような記載がなされている。

記 載	読み下し文
世間多少失天真 貧富廉貪未了因 請看摘薇夷叔操 貴於値十五城珍 南州	<p>1 世間^{せけん}は多少^{いかほど}ぞ天真^{てんしん}を失う、</p> <p>2 貧富^{ひんふ}廉貪^{れんたん}未だ^{いまだ}因^{いん}を了^{りょう}にせず。</p> <p>3 請う^こ看^みよ 薇^{わらび}を摘^つみし夷叔^{いしゆく}の操^{みさお}を、</p> <p>4 十五^{じゅうご}城^{じょう}に値^{あた}せし珍^{ちん}よりも貴^{たつと}し。</p>

口語訳

- 1 世の中のいったいどれほどの人が人間の純粋な本性を失ってしまっているだろうか。
- 2 貧乏人と金持ち、無欲と欲張りなど、人間の欲望の根源はまだはっきりと解き明かされていない。
- 3 どうかよく見てほしい。伯夷叔齊の兄弟が周の粟^{ぞく}を食むことを潔しとせず、薇^{わらび}を摘んで遂に餓死した清廉潔白の節操を。
- 4 それは十五^{まち}の城に匹敵したという和氏の壁よりも値打ちのあることなのだ。

難解部分解説

「3」の部分。夷叔は伯夷と叔齊の兄弟こと。殷末周初（紀元前12世紀）の人。殷の孤竹君の二子。孤竹君は次男の叔齊を跡継ぎにせよと遺言したが、叔齊は兄を差しおいて継げないと拒否した。伯夷は父の意向だからと互いに譲り^{くつわ}合い、二人とも国を去った。のち、二人は殷の紂王を武力討伐しようとした周の武王の轡を抑えて止めようとしたが聞かれず、首陽山に隠れ住み、周の国の粟を食べるのを潔しとせず餓死した。

「4」の部分。十五城珍の説明。楚の国にいた卞和（べんか）という人が、山中で玉の原石を見つけて楚の厲王（れいおう）に献上した。厲王は玉石に詳しい者に鑑定させたところとただの雑石だと述べたので、厲王は怒って卞和の右足の筋を切断する刑をくだした。厲王没後、卞和は同じ石を武王に献上したが結果は同じで、今度は左足切断の刑に処せられた。文王即位後、卞和はその石を抱いて3日3晩泣き続けたので、文王がその理由を聞き、試しにと原石を磨かせたところ名玉を得たという。その際、文王は不明を詫び、卞和を称えるためその名玉に卞和の名を取り「和氏の璧」と名付けた。その後、宝玉は趙の恵文王の手にわたり、秦の昭襄王が自領にある十五の城と交換に入手しようと持ちかけられた。しかし、秦が信用できるかどうか悩んだ恵文王は藺相如を秦に送った。命をかけた藺相如の働きにより、約束を守る気の無かった昭襄王から璧を無事に持ち帰ることができ、「璧（へき）を完（まっとう）する」ことができた。少しのきずもない、完全無欠なことを「完璧」と称するのは、そのためである。また、十五城もの価値がある璧だと「連城の璧」と称されるようになった。

難しい内容である。西郷は人を見て揮毫を与える。西郷はこの書を与える人間を、「伯夷と叔斉」に匹敵する人物であると評価していたものと考えられる。

なお、この揮毫には西郷の烙印もある。烙印の内容、そして西郷の筆跡の特徴（上部より下部のほうが、文字が少し中心に寄っている）が確認されるから、これは明治7年後半から明治8年5月に西郷によって揮毫された書であることがわかっている。



右上の冠帽印
「猛虎壺聲山月高」の烙印



左下の氏名印と号印
氏名印は「藤氏隆永」の烙印
号印は「南州」の烙印

上記2点「松元史子氏蔵、鹿児島県歴史資料センター黎明館保管」

氏名印については、明治2年～3年頃の「藤 隆永」、明治3年～4年頃の「藤 武雄」、明治4年～明治7年前半の「藤 武盛」、明治7年後半から明治8年5月頃の「藤氏 隆永」、明治8年5月以降の「隆盛」の5種類がある。

また、氏名印の上には「南州」の文字も記載されている。ここが「南州」であれば、西郷自作の詩であることを、「南州書」であれば、昔の中国（唐など）の詩など、他人の作を西郷が書いたということを表す。

では、この武元に与えたと思われる揮毫は、他にどのような人に与えられているか。

西郷南州遺墨集によると、同じ内容の揮毫が旧庄内藩に2幅あるという。

1幅は、「明治7年1月、庄内藩士酒井了恒、栗田元輔、伊藤孝継3氏が鹿児島に翁を訪ねし時、酒井氏の乞うものなり」→庄内上郷村の佐藤五右衛門氏が所有するもの。

もう1幅は、明治8年5月、庄内藩士の「菅実秀」が鹿児島に翁を訪ねし時、揮毫されたもので、山形県酒井市の本間美術館に現存しているとのこと。

庄内藩は、江戸城無血開城後の戊辰戦争において、薩長を中心とする官軍に最後まで勇敢に立ち向かった藩であるが、菅は、庄内藩降伏後の敗戦処理でその能力を存分に発揮し、明治2年には庄内藩の中老、廃藩置県で庄内藩が酒田県となった際には、酒田県の大参事となった人物である。いや、鹿児島の人間にとっては、「西郷南州遺訓」をとりまとめた人物と言ったほうが通りが良いかもしれない。西郷南州遺訓は、西郷に接する機会の多かった薩摩の人間ではなく、遠く離れた庄内の人間によってとりまとめられた書である。

接する機会が少なかったからこそ、西郷の偉大さを感じることができたのであろうか。言われてみれば、明治6年の下野後の西郷は、温泉、狩猟、農作業という「庶民の生活」に励んでおり、薩摩の人間は（鹿児島県人が見る桜島と県外客が見る桜島の偉大さの違いが好例である。）その偉大さを感じることが案外少なかったのかもしれない。

西郷南州遺訓については、この論考の本筋ではないため詳細は省略するが、例えば為政者の心構えを説く一文

「廟堂に立ちて大政を為すが天道を行うものなれば、ちっとも私を挟みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操（と）り、正道を踏み、広く賢人を選挙し、能（よ）く其の職に任ふる人を挙げて政柄を執らしむるは、即ち天意也。」

「万民の上に位する者、己を慎み、品行を正しくし驕奢(きょうしゃ)を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思う様ならでは、政令は行われ難し。」

国の会計制度を説く一文

「租税を薄くして民を裕（ゆたか）にするは、即ち国力を養成する也。故に国家多端にして財用の足らざるを苦むとも、租税の定制を確守し、上を損じて下を虐（しい）たげぬもの也。」

「入るを量りて出るを制するの外更に他の術数無し。」

敬天愛人の道を説く一文

「道は天地自然の物にして、人は之れを行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛する也。」などが有名であろうか。

菅の物語は、『臥牛 菅実秀』（昭和41年発行）に詳しい。

庄内藩は戊辰戦争で最後まで勇敢に戦うものの、官軍に降伏する。降服してきた東北諸藩に対する官軍の過酷な処分、また、江戸末期の庄内藩による薩摩藩邸焼き討ち事件など、薩摩と何かと因縁の深い庄内藩は厳しい処分を覚悟していたが、庄内藩処分の総責任者（薩摩藩士黒田清隆）は、寛大な処置を下す。この処置は、黒田の背後にいる西郷の判断ではないかと考えられていたが、菅が後に東京で黒田と会った際に、「あの当時の処置、全て西郷の指図である。」と黒田から伝えられる。西郷ら薩摩の人間に感銘した菅ら庄内藩の人々は、その後、藩主酒井忠篤をはじめ多くの人々が薩摩に留学に来ている。

西南戦争時に庄内藩から2人が薩軍として参戦、鹿児島市の南州墓地にその菩提が弔われている。また、鹿児島市と山形県鶴岡市はこれらの縁で「兄弟都市」として交流を続けている。

菅は天保元（1830）年に誕生、明治36（1903）年に没しているが、その生涯において、西郷と会っているのは、明治4年4月～9月（東京）、明治8年5月（鹿児島）とわずか2回である。そのわずかな交流の間に、両者は非常に意気投合し、お互いを高く評価している。

「菅実秀」の銅像は、鶴岡市の他、鹿児島市武町の西郷屋敷跡の公園内に設置してある。鹿児島市のものは、西郷と菅が差し向かいで対談している銅像である。

鶴岡市には、西郷を称えるその名も「南州神社」が存在する。



左が菅実秀
右が西郷隆盛
平成3年に建立されている



「徳の交わり」の表示
西郷の偉大さが全国に知れ渡ったのは、
菅の功績も大きい

松元家に伝わる揮毫は、明治8年5月に西郷が菅に与えた揮毫と全く同じものである。西郷は、人を見て揮毫を与えていたことは、先に述べているとおりであるが、これは、武元を、酒田県の大参事である菅と同等に評価していたと事の証明にもなる。

9) 「明治7年から8年にかけての武元の動静」

竹下弥平が朝野新聞に憲法草案を投書したのは明治8年2月1日、それが掲載されたのは同年3月4日である。松元家系図に残される武元に関する記述は「武元 明治7年8月東京警視庁巡查となり、8年病を以て帰村す。」となっている。行動の記録が詳細に残る西郷と異なり、武元に関する記述については正しいと証明はできないが、正しいとすれば例えば、「明治7年に上京した武元が、東京で何らかの形で勉学を極め、また交流を深める機会を得たことで、憲法草案が今後の日本に必要なものであることを確信し、知人である成島柳北が主筆を務める「朝野新聞」に草案を投書し、3月4日の掲載を確認し鹿児島に帰ってきた。あるいは、明治8年早々鹿児島に帰国し、草案を投書し3月4日に掲載された。

西郷は以前から武元的能力、物の考え方を高く評価していたが、朝野新聞の投書を確認することで、あらためて武元に感銘し、揮毫を与えた」というストーリーを組み立てることができる。

まず、武元が明治7年8月に東京警視庁巡查となったのか。松元家に当時の辞令が残されておらず、当時の巡查名簿もなく断定はできないが、明治6年の西郷らの大量離脱により近衛兵が一挙にいなくなり、明治7年1月に設置された東京警視庁（警視総監は川路利良）では巡查を大量に募集していたこと、武元は明治7年に20歳（数え年）となり巡查の募集要件を満たしていること、義兄の鶴丸資治から東京の話は十分聞いていること、後年（明治16年）に弟の武裕が警視庁巡查として上京していることなどを考えると、武元もこの時巡查となり上京したのであらうと考えられる。

竹下という人物が明治7年に上京したことを窺わせる西郷の手紙が残されている。

明治8年 正月6日 在鹿児島篠原冬一郎あて 在鹿児島西郷吉之助（一部現代語表記）

両三日は拝眉能わず候得共、いよいよ以て御壮栄恐賀奉り候。のぶれば下士官免官の一条竹下氏登京の節、尚又申し遣わし候処、返答相達し申し候。ついては不頓着の県庁故、達書それなり相置き候事共にてはこれある間敷や、御糺し見下されたく、もし相見えず候わば、名書きの内免官これなき分は、このとおり御引き置き下されたく、早速返事申し遣わすべく候。小弟にも野屋敷へ参り居り候に付き、明晩帰家致すべく候。其の内御調べ下されたく願ひ奉りたく候。頓首。

（解説）

この時、西郷は鹿児島の郊外西別府村の西郷家の耕作地（自作開墾地）にいた。野屋敷というのはそれである。明治7年12月11日付け大山弥助宛ての手紙に対する返書が来たこと、それによると下士官免官の検については、陸軍省から熊本鎮台を通じて鹿児島県庁に通知が来ているらしい。鹿児島県庁が無頓着で放置しているのではなかろうか、一応問い合わせてもらいたい。もし通知が来ていなかったら、名簿の中に免官されていない者には、傍線を引いて知らせてもらいたいと依頼したのである。

これによると、竹下氏が上京の際、西郷の従弟である大山弥助（巖）あてに、手紙を託したということが記されている。竹下氏が竹下弥平（松元武元）であるかは、この手紙だけではわからない。しかし、東京に住む自分の従弟への手紙を託す人物像を考えれば、東京に土地勘があり、かつ、自分（西郷）の信頼のおける人物となるであらう。であれば、この竹下氏とは、竹下弥平を指す可能性は高いと思われる。

では、警視庁巡查となり上京した武元が、東京で勉学する機会があったのだろうか。これは、竹下弥平の憲法草案に第3条に登場する、「福澤、福地、箕作、中村、成島、栗本」という個人名が大いにヒントになると考えられる。これらは、憲法草案で「議員として相応しい、在野の俊傑及び博識卓見なる人物」として、竹下が挙げている面々である。

本稿の共同執筆者である吉田が第1章で論述しているが、この研究会では、竹下憲法草案が「明六社」、『明六雑誌』の影響を大きく受けた内容であることに着目し、大隅国出身の若者である竹下弥平が上京し遊学（または政府に職を得る）の機会を得て、日本最初の

学術団体である啓蒙思想家の集まりであった明六社から大きな影響を受け、自身の考え方を固め、自身の考えに基づく私擬憲法草案を『朝野新聞』に投書したのではないかという仮説（おそらく事実であろう）に基づき、論を進めている。

明六社と竹下弥平の関わりについては、前章で吉田が詳細に論述しているので本章では以下、吉田論文から抜粋したものを記す。

福澤は、福澤諭吉。言うまでもなく、慶応義塾の創設者である。政府が国会を開くことには賛成していたが、急進的な自由民権運動については批判的であったという。

福地は、福地源一郎。旧幕臣であり大蔵省に勤めていたが、明治7年12月に『東京日日新聞』（毎日新聞の前身）の主筆となり、後に西南戦争の従軍記者として名をはせる。

箕作は二人いる。一人は箕作秋坪。学者、教育者。維新後に三又学舎を開く。三又学舎は当時、福沢諭吉の慶応義塾と双壁と言われた洋学塾であった。東郷平八郎、原敬、平沼騏一郎などもここで学ぶ。秋坪は明治6年に明六社に参加する。

もう一人は箕作麟祥。官僚、フランス法学者、教育者。日本における法学の基礎を築く。

福沢諭吉、福地源一郎とともに英文外交文書の翻訳に従事。日本で初めて「権利」や「義務」という訳語を用い、日本人に初めて近代法典というものを知らしめた。竹下憲法草案の「箕作」は両名のどちらであるかはわからない。

中村は中村正直。啓蒙思想家。J.Sミルの『On Liberty』を訳した『自由之理』で個人の人格の尊厳、個人の自由を重視する思想を日本人に紹介した。明六社に参加し、「明六社雑誌」にも多くの文章を執筆した。

成島は成島柳北。後にも述べるが、武元が「竹下憲法草案」を投書した『朝野新聞』の初代社長。武元と成島が面識があったからこそ、武元は「竹下憲法草案」を『朝野新聞』に投書したのであろうし、成島もそれを紙面に掲載することを了承したのであろう。

栗本は栗本鋤雲。思想家。ジャーナリスト。幕臣であり、新政府に誘われるも仕えず後に郵便報知新聞の主筆を務め、以降新聞記者として活躍。

これらの人物の多くは、明六社のメンバーでもある。ということは、武元は、これらのメンバーと東京で知己を深め、西洋の情報を吸収することで、元々持っていた曾子の知識と西洋の情報を合致させることができ、あのような憲法草案を投書することができたのではないか。鹿児島にただけでは、西洋の情報を得るのに限界があったであろう。明六社は講演活動が盛んであり、誰でも聞くことができた。明六社の發揮人は鹿児島出身の森有礼である。

また、西郷は福沢諭吉を高く評価していた。慶應義塾入社帳にも、推薦人の名に西郷隆盛の署名を多数確認することができる。西郷と明六社に関係があったのかどうかは定かではないが、上京する武元に西郷は「明六社」や慶応義塾の存在を伝えていた可能性は大いにあると考えられる。「武元どん、おはんがそげな考えを持っておわすなら、福沢諭吉を訪ねてみやんせ。勉強をしてきやんせ。」などと。

筆者は、西郷の斡旋により武元が慶應義塾で学んだのではないかと考え、明治元年から8年までの入社帳に「松元武元」、「竹下弥平」の文字がないかを調べたが、鹿児島出身の人物は多く確認できたものの、残念ながら両人の文字は確認できなかった。であればなおさら、警視庁勤めの武元は明六社の講演を聞き、明六社に出入りし、明六社の面々と知己

を深め、自己の考えを高め、そして憲法草案を投書したと考えるのは、ごく自然な解釈であろう。

10) 新聞の社会的役割の変遷

明治7年から8年ごろの新聞はどのような社会的役割を有していたか。

新聞が本邦で最初に発行されたのは江戸末期であるが、現在のような日刊紙として発行されたのは、明治2年の『横浜毎日新聞』が初めてであり、その後明治4年には東京初の日刊紙となる『東京日日新聞（毎日新聞の前身）』、『郵便報知新聞』などが発行される。明治政府は、国民の間に文明開化施策を周知徹底させる必要性を認識しており、そのために新聞を積極的に保護育成する政策を取った。例えば、日本各地に無料の新聞縦覧所や、新聞を読み聞かせる新聞解話会を設置した、などである。

また、明治5年には郵便制度が完成した。郵便制度を完成させたのは、前島密であるが、（前島は、薩英戦争後に薩摩藩が設置した「鹿児島開成所」の講師として鹿児島に滞在していた期間がある。「鹿児島開成所」は、現在の「かごしま県民交流センター」近くにあったとされており、鹿児島市電「水族館前」電停近くには開成所の案内看板もある。）現在のような宅配制度が整っていない状況においては、郵便制度は新聞の普及に大きな役割を果たした。政府においても、新聞記事に掲載する原稿を地方から東京に送る際の郵送料を無料とするなどの普及政策をすすめるなど、政府と発刊当初の新聞は蜜月の関係で成り立っていたとされる。この、新聞原稿郵送無料化は、後の活発な投書活動の転機となった。

しかし、明治7年1月、征韓論争で西郷らとともに下野した板垣退助、後藤象二郎らが「民撰議院設立建白書」を提出、その内容が新聞「日新真事誌」に掲載されたことで、政府と新聞の蜜月関係にピリオドが打たれることとなる。これを契機に、新聞界は言論活動中心の「大新聞」と、娯楽活動中心の「小新聞」に分かれる。「大新聞」はさらに、早期議会開設を要求する急進的な民権派新聞と政府の政策を支持する官権は新聞に分かれるが、そのほとんどが民権派新聞であったため、政府は新聞奨励策を180度転換し、新聞弾圧策を進めていく。それはやがて、明治8年6月の新聞紙条例の改正、讒謗律の制定となってあらわれる。

では、松元武元が投書した『朝野新聞』はどのような新聞であったか。この新聞は元々、明治2年に公文通誌として創刊されたものが、民選議院論が盛んになる明治7年に『朝野新聞』と改題し、その改題初号が明治7年9月24日に発行されたという経緯がある。その場所は、先述した「明六社」と同一住所であり、初代社長兼主筆に旧幕臣の偉才であった成島柳北を月俸200円で迎え入れている。民権派新聞を代表する新聞であった。ちなみに、明治7年12月に東京日日新聞（官権派新聞の代表である）主筆として迎え入れられた福地源一郎の月俸は、250円であったと伝えられている。

朝野新聞は成島を主筆に迎え入れた頃から部数が飛躍的に伸び、明治9年度（明治9年9月～明治10年6月）の発行部数は5,319,510部と、大新聞としては最大の発行部数を記録するが、明治10年の西南戦争で誤報を出すなど徐々に勢力が衰えていき、明治26年に廃刊となっている。ただ、明治8年2月～3月の期間は、新聞自体に勢いがあり、武元が投書先に朝野新聞を選んだのも、その影響力を十分理解していたからであろうと考えられ

る。また、先述したように、成島と面識があったことも理由の一つであろう。

投書の取捨選択は編集長にあったが、一人でなく数人の記者による慎重な選択がなされていたようである。また、(現代もそうであろうが)投書の内容は、掲載する新聞側に不都合なものは少なかったと思われる。さらに「大新聞」への投書は、当時のオピニオンリーダーの役割であったと考えられ、その内容は、大衆への意見の浸透を促す役割を果たしていた。そのため、投書が世論形成や政治過程に持つ意味は予想外に大きかったと言える。そのような状況で、鹿児島在住の全く無名の「竹下弥平」の投書を採用することは考えにくい。成島は「竹下弥平」が、知己を深めた警視庁巡查「松元武元」であったことを知っていたからこそ、ペンネームによる投書を掲載したのではなかろうか。

武元は病気で帰郷している。投書の掲載を確認してから帰郷したのか、掲載の確認前に帰郷したのかはわからない。ただ、病気で帰郷したのは無念であったろう。

帰郷後の足取りは分からない。恐らく、病気のため積極的に活動することなく療養していたのであろう。あれだけの才能の持ち主が病気で活動できず、明治10年の西南戦争で若くして戦死する、歴史に「IF」はないが、もし武元が長く生きていれば、歴史の流れも少し変わっていたかもしれない。その功績を考証することが、我々後世に生きる者の務めでもあるだろう。

11) 武元は幼少から外国文化に触れる機会があった。

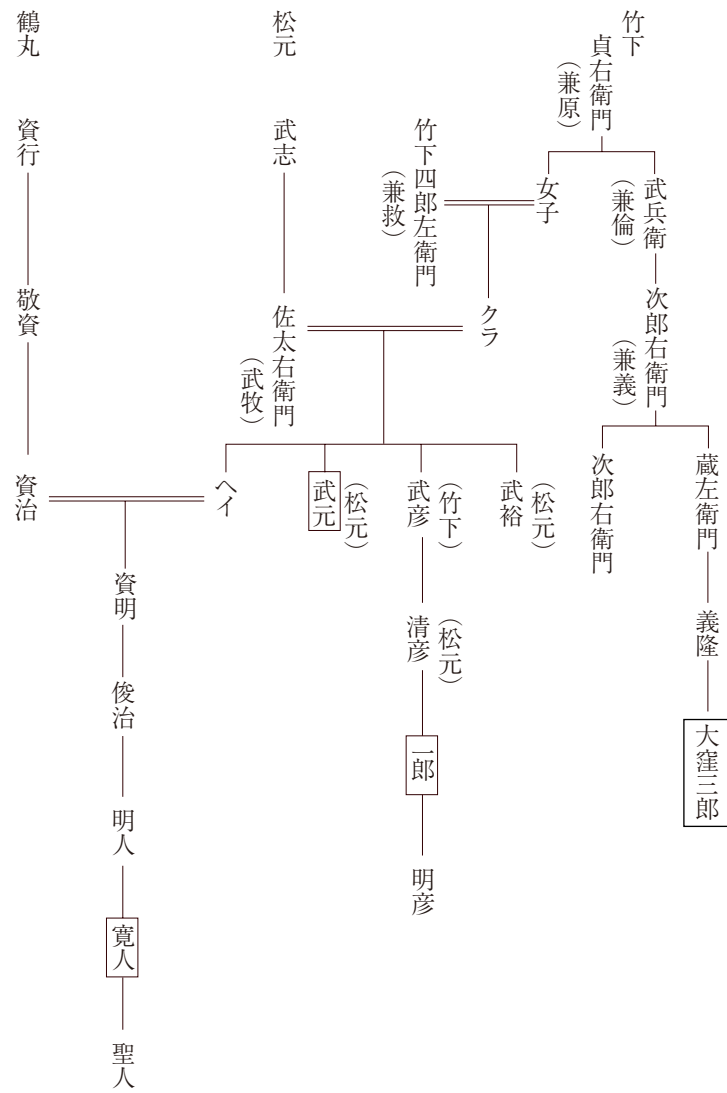
先ほど、武元は東京で明六社のメンバー知己を深め、西洋の情報を吸収することで、元々持っていた曾子の知識と西洋の情報を合致させることができ、あのような憲法草案を投書することができたのではないかと述べた。であれば、武元が東京に行く前、即ち幼少の頃に、西洋の情報を吸収するための基礎が出来ていたのではないかと推測することができる。ここで、武元の親戚関係をさらにひも解くと、武元から見れば又従兄にあたる人間(武元の母である竹下クラから見れば、従弟の息子)が、鹿児島開成所に会計係として勤めていたという事実突きあたる。

名は竹下次郎右衛門、嘉永6(1853)年の生まれなので武元より2歳年上、この人物は鹿児島開成所に会計係として勤務している。氏名については薩藩海軍史で確認できる。次郎右衛門は明治41年に没しているので当時としては平均的な寿命であったが、開成所に勤務していた時は10代半ば、又従弟に頼まれれば、開成所で講義に使われていたであろう、今日でいう「テキスト」を又従弟に提供するということは、難しいことではなかろう。

開成所では、当時の日本の最先端の教育が行われていた。砲術、造船といった強兵に必要な講義から、医学(ウィリアム・ウィルスも開成所で医学を教えている。)、数学など自然科学系の講義が主であるが、当然ながら英語教育も行われている。開成所で学んだ者が薩摩藩英国留学生として渡欧したことは、周知のとおりである。

この話は、竹下次郎右衛門の末裔にあたる、霧島市牧園町在住の大窪三郎氏からの聞き取りによるものである。このように、武元が幼少から海外の文化に触れる機会が十分にあった事を確認できたことで、武元=竹下弥平であることは益々確信に近くなる。

松元・竹下・鶴丸家系関係図



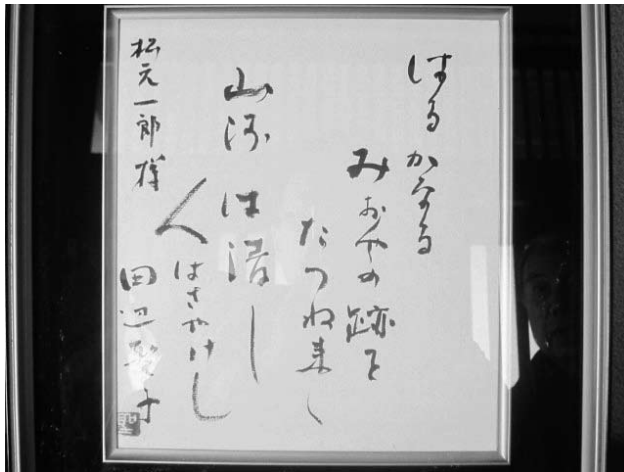
12) 田辺聖子氏のこと

芥川賞作家である田辺聖子氏は、平成17年に、松元史子氏宅を訪れている。これは、田辺氏の秘書を務めていた安宅みどり氏が、「私の従兄の家には、西郷隆盛から貰った揮毫があった」と語っていたことに田辺氏が興味を持ったことによる。

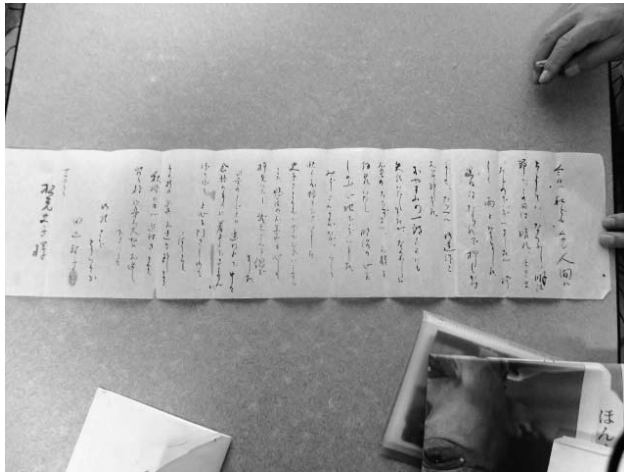
松元家には、田辺直筆の色紙と手紙が保管されている。

色紙は松元一郎宛、手紙は松元史子氏宛となっている。

松元一郎宛の色紙



はるかなる みおやの跡を たづね来し
山河は清し 人はさやけし
松元一郎様 田辺聖子 印



松元史子氏宛の手紙

内容は以下のとおり

文中「武元さんを偲びました」とある。

松元家の鴨居には、武元の弟である竹下清彦、松元武裕の写真が掲げている。

今日は私ども昔人間にとってはなつかしい明治節で、この日は晴れときまったものでございましたが珍しく雨となりました。過日はならんで押しかけまして、たいへん御造作をおかけ致しました。

おやすみの一郎さまにも失礼いたしました。なつかしいお宅のたたずまい、お顔を拝見し、明治の世をしのぶ心地でございました。

みどりさんのおかげ、そして快くお招き下さいました史子さまのおかげでございます。

また、鴨居のお写真も心して拝見いたし、武元さんを偲びました。

日常の仕事に追われて、中々念願のものに着手できませんが、ぼちぼちと心を引き締めてまいります。

その時の写真、お送りいたします。秋冷の日が近づきます。皆様御身お大切にお過ごしくださいませ。

御礼まで とりいそぎ

田辺聖子 印

松元史子様

田辺氏が松元家を訪れた理由は何であったか。初めは、秘書の従兄の家に西郷の揮毫があると聞いて、興味本位で訪れたのかもしれない。しかし、松元家の家系図、さらに「鹿児島県歴史資料センター黎明館」に寄託された西郷の揮毫を見た田辺氏は、作家としての直感で、武元が只者ではないと感じたのではなかろうか。松元史子氏宛の手紙に、わざわざ「武元さんを偲びました。」と書いているのである。また、平成17年に田辺氏は、当時鹿児島県国分市長であった論者の父に対し、「もう一人の西郷隆盛というタイトルで松元武元について書きたい。西郷からこのような書を送られた松元武元なる人物は、西郷先生が将来を嘱望された人物では」とも語っている。

田辺氏はこの時、武元イコール「竹下弥平」であるとは語っていない。しかし、作家としての直感、そして取材能力を駆使すれば、どこかの時点で武元イコール「竹下弥平」であると気づき、松元武元についての面白い物語を書いていたと思われる。田辺氏に確認できないのが残念である。

論の最後に、松元家の敷地内に残る、武元の墓を示す。

子を成すことなく亡くなった武元を供養するもので、武元の遺骨が眠っている。





鹿児島市南州神社の西南戦争戦没者招魂碑に
刻まれた「松元武元」の氏名
「西襲山」の欄に表示

		西郷隆盛	松元武元
明治6年	10月	東京から下野 県内各地で療養	
		この間日当山で両者面会	
7年	6月	私学校設立	
	8月		警視庁巡査となり上京
		この間県内各地で湯治	この間「明六社」で福沢諭吉、成島柳北らと交流
8年	2月		朝野新聞に憲法草案投書
	3月		朝野新聞に掲載
	4月		鹿児島帰郷
	5月	菅実秀と武町で面会	西郷から揮毫を与えられる。
9年		この間県内各地で湯治	この間病気療養
10年	2月	西南戦争勃発	薩軍として従軍
	3月		熊本吉次越の戦いで戦死
	9月	城山にて戦死	

おわりに（吉田）

以上、本稿ではこれまで謎の人物とされてきた、明治の私擬憲法の発表者である竹下弥平についての出自とその生涯を可能な限り明らかにした。本稿の最も重要な部分は、鶴丸の手による第2章であり、「竹下弥平」の本名が「松元弥一郎武元」であったということ

を明らかにした部分である。本稿の意義はこの事実を広く世の中に伝えることである。

それ以外はほぼ蛇足といっても良いのだが、本稿で竹下弥平こと松元弥一郎武元の短い

生涯をほぼ明らかにしたことによって、私擬憲法の執筆者である竹下弥平が主にどのような歴史的背景と環境の中で、どのような思想の影響を受けたかも可能な限り推測し明らかにしたことにも多少の意義はあるかもしれない。

今日まで全てが謎に包まれてきたゆえに致し方がないことではあるが、竹下弥平はこれまで、論者によってあまりに恣意的に自由に都合よく解釈され過ぎてきたきらいがある。全てが謎であった以上、さらには殆どの論者が竹下弥平を生涯、鹿兒島の湾奥の片田舎で過ごしたことを前提としての想像を膨らませてきたがゆえに、これは致し方のなかったことだと筆者らも考える。だが、これまで竹下弥平は、その残された「草案」だけを手掛かりにして、あまりに自由に解釈がなされ過ぎてきた。本稿により、竹下弥平こと松元弥一郎武元の出自及び生涯が明らかになったことによって、このイメージが修正されればと我々は考える。

本稿の第1章2節で検討したように、これまで竹下弥平について言及してきた数少ない人にさえ、大きく分けて、自由民権運動にすら批判的な論、自由民権運動には理解があるが、西南戦争と西郷隆盛には批判的な論、自由民権運動に竹下弥平が影響を与えたとする論があったことを確認した。

1つ目の論は同時代の鹿兒島の中で竹下弥平のみを評価し、士族の民権を偽物と断じる論である。2つ目の論は、士族、私学校が県政をろう断した時代に本物の民主主義があったとする論である。小さいが独自の「民主主義思想」が湾奥（錦江湾奥）から始まっているとする論である。これらは似て非なる論ではあるが、竹下弥平を戦後民主主義の先駆けと位置付けるという意味では共通点があった。そして3つ目の論は竹下弥平が『自由之理』によって自由主義思想を身に付けており、西南戦争は自由主義に基づく戦争であったとする論である。筆者らはどの論もそれぞれに偏っており、実際の竹下弥平こと松元弥一郎武元の評価としては不自然かつ的を外したものであったとの結論である。

それぞれの論への評価はここでは改めては行わないが、筆者らは、竹下弥平こと松元弥一郎武元は、明六社の同人の議論と『明六雑誌』から影響を受けた啓蒙主義の徒であったとの結論である。これも本稿で論じたが、啓蒙主義、明六社の同人にもかなりの幅があった。明六社の思想も一言では論じられないし、啓蒙主義の中の思想の内容も一言では括れないのは確認した通りである。

我々は、竹下弥平こと松元弥一郎武元は明六社の議論から影響を受けつつ、議論の展開を自身で考え、自身の思想を固めていった人物だと考えるに至った。東京遊学の時期と当時の日本の世相、憲法草案に出てくる人物の選び方からもそう考えるのが最も自然だとの結論に至った。この我々の結論からいえば、第1章で検討した今日までの竹下弥平研究の見方はかなりの部分が的を外したものであったといえるのではないだろうか。

また、竹下弥平こと松元弥一郎武元が『論語』に出てくる孔子の弟子である曾子に魅力を感じ、自らのありようを曾子に求めていたことも明らかにした。これは鶴丸家の人でなければ発見できないことであった。今日まで竹下弥平を論じていた人には、竹下弥平の憲法草案の先進性にのみ目を奪われ、どこかで西洋思想を身に付けた人物という点ばかりを強調してきたきらいがあるが、実際には竹下弥平こと松元弥一郎武元は儒学、東洋思想によって人格の陶冶をした人物でもあった。これを明らかにしたことにも意味があろう。

このように人間の内面を重視しながら、理想の社会を構想するのは儒学者の系譜にある

人物の特徴でもあり、竹下弥平を単に封建道徳から真っ先に解放された西洋流自由主義者、民主主義者だったとする見方も実際の人物像からかなり離れていたことが理解できよう。特に本稿で紹介した論考の著者らは、いわゆる戦後民主主義思想への賛同者が多く、儒学や東洋思想を前近代の遺物（封建道徳のイデオロギー）とするような考え方の系譜にある人が多数であるように思われるが、実際の竹下弥平こと松元弥一郎武元は、幼時に身に付けた東洋的・儒学的教養、人格的な素養の上に、青年期に東京で出会った啓蒙思想を受容した人物であったと思われるのである。

本稿が今後、竹下弥平こと松元弥一郎武元に興味をもつ方々の役に立つことができれば筆者らとしては幸いである。

【参考文献・吉田執筆部分】

衆議院憲法調査会事務局「明治憲法と日本国憲法に関する基礎的資料（明治憲法の制定過程について）」平成15年5月
大久保利兼『明六社』講談社学術文庫・2007年
戸沢行夫『明六社の人びと』築地書館・1991年
山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』上巻 岩波文庫・1999年
山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』中巻 岩波文庫・2008年
山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』下巻 岩波文庫・2009年
田畑 忍『加藤弘之』吉川弘文館・1959年
富田正文校訂『新訂 福翁自伝』岩波文庫・2008年（原著：1978年）
乾照夫『成島柳北研究』ぺりかん社・2003年
サミュエル・スマイルズ『西国立志編』中村正直訳・講談社学術文庫・1984年
田中惣五郎『西郷隆盛』吉川弘文館・1958年
鈴木 淳『維新の構想と展開』（日本の歴史20）講談社・2002年
五百旗頭 真編『戦後日本外交史』第3版 補訂版 有斐閣・2014年

※本稿の第1章第1節中で直接紹介し検討・批判の対象とした論文、論考、ブログ、新聞記事などは参考文献に含めていない。本文中で引用した文献は挙げておいた。

※明六社及び明六社の思想家の事績及び『明六雑誌』について、既知の事実について本文中に記述した部分はインターネット上の百科事典の記事も参考にしつつ記述したことを附記する。

【参考文献・鶴丸執筆部分】

鹿児島県総務部参事室『鹿児島県市町村変遷史』鹿児島県・1967年
鹿児島県隼人町教育委員会『隼人町郷土誌』鹿児島県隼人町・1985年
出原政雄『鹿児島県における自由民権運動 鹿児島新聞と元吉秀三郎』
志學館法学第4号・2003年
鹿児島県維新資料編さん所『鹿児島県資料・西南戦争』鹿児島県・1978年
湯浅邦弘『名言で読み解く中国の思想家』ミネルヴァ書房・2012年
藤浪三千尋編『日当山温泉 南州逸話』高城書房・1989年

久米雅章ほか『鹿児島近代社会運動史』南方新社・2005年
渡部昇一『南州翁遺訓を読む』到知出版社・1996年
加藤省一郎『臥牛 菅実秀』到道博物館編・1966年
山本武利『明治期の新聞投書』関西学院大学社会学部・1976年
慶応義塾大学福澤研究センター『慶応義塾入社帳』慶応義塾大学・1986年

【資料提供・鶴丸執筆部分】

松元史子氏

大窪三郎氏

鹿児島県歴史資料センター黎明館